川満　力　かわみつ つとむ　　(那覇地区漁協)

1936年(昭和11年) 宮古島に生まれる。78歳(2014年時)。

6歳に八重山に移住、17歳(1953年)から南方へ、海人草、貝殻採りへ。26歳(1962年)に、サンゴ船・福泉丸(船主大城清一 12㌧)に乗り、初めてサンゴ漁に関わる。以後豊岡丸(船主福本豊三郎㌧)の漁労長を経、1966年琉球サンゴ組合の第2回ミッドウエイ沖に出漁する。沖縄のサンゴブームは1960年から始まった。氏はサンゴブーム最盛期62年からミッドウエイ出漁までの 5 年ほど従事してきたベテランである。氏にサンゴ網漁の仕組みから、当時のサンゴブーム状況とその盛衰、幾つかのエピソードを語ってもらった。

15から海　素潜りで　ドンブリだと　50㍍潜る

僕は宮古の平良市字大浦で生まれた。6歳には家族で八重山に移住した。貧乏育ちで、長男だから、15歳には海の仕事、追い込みとか、潜りの仕事やっておった。17から24までは、ずっと南方に、新南群島とか、プラタスとかに、貝殻や海人草採りで行っておったです。

・・以下は「5－3、電灯潜り関係　(前半)」の項に掲載

26歳(1962年)　福泉丸乗って　サンゴ漁　始める

24歳(1960年)に、女房を探したから、南方行きは辞めれと言われて、辞めた。

八重山で、夏はカツオ船のエサ採りとか、冬は一本釣り、底延縄とかしていた。底延縄は尖閣列島に行ってやったら、相当獲れましたよ。だけど船がオンボロだった。使えなくなったから辞めて、また八重山で、一本釣やっていた。八重山は魚が安かったから宮古に行ってやっていた。

サンゴ網を手に取って、その仕組みを説明する福泉丸船主大城清二さん。

そしたら26歳(1962年)の時かなぁ、大城清二さんに遇って、サンゴ船に乗ったわけ。大城さんは、丁度宮古に来て、サンゴ採る準備しておった。与那原の人だから初対面で、福泉丸(12,3 ㌧)に乗ってくれんかと言われた。私もあの時はサンゴはどんなものか分らない、契約の収入がちょっと大きかったから、いいですよ、乗りましょうと、乗ったですよ。船長は池間の若いのを頼んで、乗組員11名位だった。あの時分は、宮古のサンゴ船は久松辺りの半農半漁の人を給料で雇っているから、あれなんか海は分らん、道具の準備もできんから、私が行って、それやって宮古の宝山にサンゴ採りに行ったわけです。

テレビにサンゴがよく映るさぁ。魚がいっぱい周りを泳いでいて、赤とか白とかのきれ

いなサンゴがある。あのサンゴではない。あれはきれいだからと石から起して採ってきて、飾っておくと、1 週間位では乾燥するよ。で、乾燥したら、枝も折れて、パラパラーして崩れてすぐダメなる。あれは浅い所にある軟らかいサンゴ(造礁サンゴ、六放サンゴ亜綱に属する)で、20,30 ﾒｰﾀｰには沢山あります。ムルというけど。ウチらが採るのはもっと深い所のもので、100 ﾒｰﾀｰから 200 ﾒｰﾀｰ位の深さにあるサンゴです。これだと石より硬い。それに磨いたら宝石みたいにきれいになる。それで宝石サンゴ(八放サンゴ亜綱)ともいう。

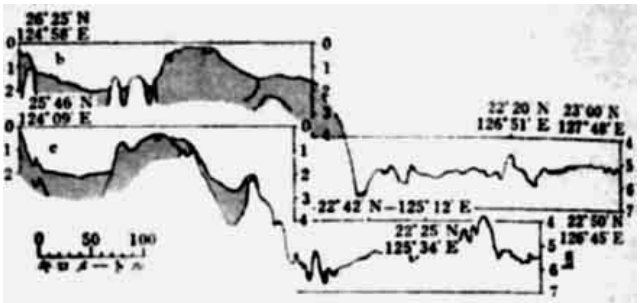
色は桃とか、ピンク、それに赤とか、白とかがあります。

して、宝山行ったら、赤サンゴは安いから、採らなかったが、桃とか、ピンクを採った。採れる深さは、場所によって違いますけど、赤サンゴは水深が大体 80 ﾒｰﾀｰから 100 ﾒｰﾀｰ。桃とか、ピンクは 180 ﾒｰﾀｰから 250 ﾒｰﾀｰ位です。

サンゴブーム　宝山ソネで　80 隻あまり操業

大城さんの福泉丸に乗ったのは。丁度サンゴーブームの頃でした。宮古から出て、宝山向けて、船 2 時間位走らすと、明かりが見えてきた。ずらーとして、那覇の街の電気より明るく見えたんですよ。皆サンゴ船です、80 隻位はいましたかねぇ。

宮古の池間、佐良浜から 70 隻位、沖縄から 10 隻位来てましたねぇ。皆が皆、サンゴ許可をとってなかった。宮古の船は殆どカツオ船、夏はカツオ船上がりで、25 ﾄﾝから 30 ﾄﾝ位で船員は 14､5 名　沖縄から行っている船は 15,6 ﾄﾝ位、船員は 7､8 名か 10 名位で殆ど与那国の人のサンゴ船でしたよ。で、行ったら船が沢山いるから、昼だったら、割り込んで行くけど、夜は危ないから度胸も必要だった(笑い)。それに、潮の流れ計算せんで、合い中に割り込んで行ったら、向こうの船の網と縺れたら迷惑するから、これ考えて網入れましたよ。宝山はソネが大きいです。サンゴゾネもあそこだから、あっちこっちにサンゴはありはするけど、沢山採れる所と採れない所がある。だから船もあっちこっちにたむろしてました。



宝山ソネ海底地形図。国内有数のサンゴ、一本釣漁場であり 150～2500 ｷﾛに跨る広大なソネである。(「エカフェ報告」より)

大九に？　いや､あそこはあまり行かなかった。もっぱら宝山でした。サンゴはよう採れましたよ。最初の 2 年位は相当採ったんです。サンゴ船は夏だけしかやりません。宝山は 5 月から潮引く、冬は全然潮引かないから潮の流れが悪い。潮の流れが悪いと、サンゴがあっても掛からない。だから冬はやらない。潮の流れは 5 月頃から速くなるから 5 月から 8 月、大体 9 月中頃まではやりよった。

1 航海ですか、大体 8 日から 10 日間位、これだけ分の食料を積んで行きますから、10 日

以上はあんまりやらなかった。船員は大体 11 名位、少ない時は 8 名位です。宮古のサンゴ船の場合は親方も乗らんし、大体が雇い船長 1 人と船員だけで、漁労長もいない。だから船員なんかやりたい放題、採ったサンゴを失敬もするし(笑い)。

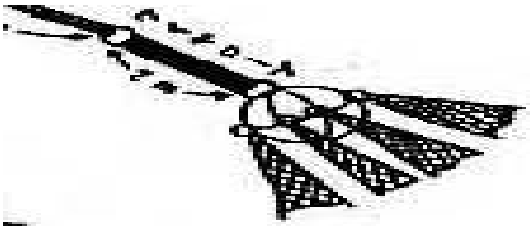
福泉丸の場合も、親方の清二さんは乗らん。代わりに兄さんの清次郎さんが一緒に乗ってました。漁労長で監視役ですよ。あれだけの船員だから少しずつサンゴ盗られても大変でしょう。だから、箱作って、それにサンゴ入れて鍵式にしたわけです（笑い)。

サンゴ網　石に輪作り　網結んで引っ張る

サンゴは、サンゴ網というのを使って採ります。サンゴは 100 ﾒｰﾀｰから 200 ﾒｰﾀｰの深海に生えているから、網も底に沈めんといかん。石をオモリして。網を石に縛って、底に沈めて、船は潮に流しながら、網を底から曳きながら、これにサンゴを引っ掛けて採るわけですよ。

(サンゴ網図を指して)　オモリの石は、5,6 ｷﾛ位の丸い石。

これに針金で輪を作って、網を 4 つ括る。サンゴ網は長さ 1 ﾒｰﾀｰ 50 位、折りたたんでワッカーから通して石に縛ってある。幅は小さく見えるけど、広げると 4 ﾒｰﾀｰ位はあります。1 つの石に 4 つ網を縛って、石の先にワッカー付けて、これにロープを通して、このロープを船から曳いて、網流すわけですよ。石に縛った網 4 つはくっ付いたまま流れるから、そしたら、この幅にあるサンゴが、網の目に掛かって、そのまま揚がってくるわけです。

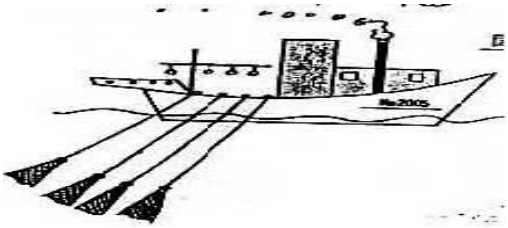


上：サンゴ網の丸石、オモリの役目、重さ 5.6 ｷﾛの丸石。
下：ロープ 1 つに石 2 個縛り、石 1 個に 4 つ網付けて流す。

ウチなんかは、ロープ 1 つに、サンゴ網の石を 2 つ付けた。石 1 つだと網は 4 つ、2 つだったら 8 つになるから、掛かる率はいいですよ。で、サンゴ網流す時は、大体ロープは、2 本まとめて入れて、引っ張るから、一遍に網を 16 入れて曳くことになる。ロープ 1 本だと、石 2 つ、網 8 つだから、ロープ 2 本だと、16 になるから。サンゴ網は 2 種類ありました。ナイロンと麻の網が、ナイロンは台湾から、麻は内地から来ました。ナイロンは台湾の何かの網の使い残し、麻の網は新品で、最初からサンゴ網だから高い。麻網、ナイロンだけだったら、皆束になって掛かる率が悪いし、麻の場合は、ナイロンみたいには引っ付かん。だから、こっちナイロン、こっちは麻と交互に縛って使いよった。

船　エンジン停めて　潮の流れに乗って　網流す

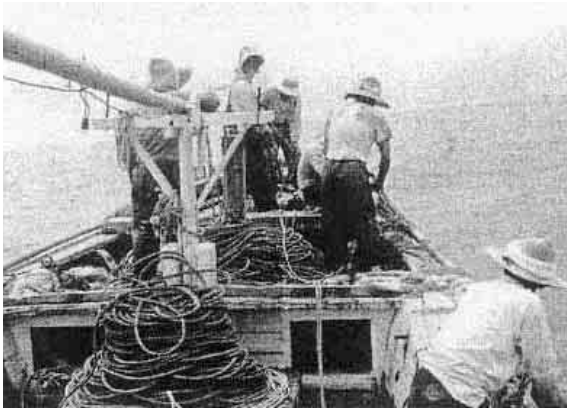
サンゴ船は、船員１人でロープ２本を受け持つ。ロープ１本に石２つを括るから、石は全部４つ使う。あと予備の石とかが傍に置いてあったりして。で、石１つに網４つ縛ってあるから、船員１人がサンゴ網８つ入れるわけ。福泉丸の場合は、船員 11 名乗って、８名がサンゴ網入れるから、８名×８つで 64、一遍に、64 のサンゴ網を入れるんです。サンゴ船は大体が皆この位です。そして、サンゴ網入れたら、船はエンジンかけたまま、ゴーウェイもしないで、船は潮に流してまま、サンゴ網を曳いて行くわけですよ。



船員１人でロープ１本入れる。ロープ１本に石２個、サンゴ網８つ縛る。４本だと 4×8 で、網 32 となる。

網を揚げるタイミングですか、これは漁労長の判断で、網の引っ張り具合とか、距離とか、時間とか見て、網を揚げます。船が流れている間に、草とかゴミ、石とか、サンゴとか、色んなものか掛かってきますよ。ロープ１本に、全部で網は８つあるから、相当重量あります。それに水深も 100 ﾒｰﾀｰから 200 ﾒｰﾀｰもあるから、網はラインホーラーで揚げます。揚げて、甲板に広げて、サンゴが掛かっておれば､外して採ります。

その時に草とか、石も全部外して、網きれいにせんといかん。これ外すのに時間掛かるから、傍に予備の網、石を置いてあるから、それを繋いで下ろして、流れる間に、前の網から、草やサンゴ、ゴミとかを外すわけです。



サンゴ漁光景、サンゴ船は夜昼とない、夜も点灯して仕事する。万事潮の流れ次第、潮見ながら、適宜網引く。

また船がこう流れていると、たまにはロープとか、網とかが、底の岩に掛かる時があります。これが 1,2 本掛かったら､もう船は流れない｡流れんと、サンゴ掛からんわけだから、その時はエンジン掛けて、船バックさせて、これを引き起こす。バックして外せば、船はそのまま流れて行きます。

また、サンゴがあっても、潮の流れが悪かったら、船はあんまり流れないから、サンゴは全然掛からない。その時は皆寝かしますよ。責任者はずっと起きていて、潮の流れを見ていますから。潮の流れがよくなったら、皆を起こします。また夜寝ておっても、サンゴが掛かるいい潮だったら寝かさない。夜通しずっと起こして仕事させます。サンゴ網は、万事潮の流れ次第ですから（笑い)。

サンゴ揚がった情報　聞いて　漁場行く

サンゴだけは、サンゴ船が漁場を探してない。殆どが一本釣り船が、だからアカマチなんかがいる 200 ﾒｰﾀｰの所はサンゴが多いわけさぁ、皆一本釣りが漁場見つけている。

1959 年に、那覇地区の一本釣り船が宝山で、サンゴ揚げた。これが沖縄のサンゴブームの始まりです。それで、大城さんの福泉丸も、宝山に行ったわけ。で、行って、魚探で、水深と海底地形を見て、こっちにサンゴありそうだと思って、やってみたら、ある所もあれば、ない所もあるんですよ（笑い)。魚探では、サンゴがあるか分らん。ずっと 100 ﾒｰﾀｰから　240､250 位の海底を見ていて、影映っても、これサンゴかどうかは分からん。今は船の機械も進歩して、サンゴがあるのが分るか知らんが、あの時分はそれができない。

どこそこで採れた、どんなサンゴが、どの位採れた、そういう情報を聞いて、皆その漁場に行って、そこに網入れても、魚探でサンゴかどうか分らんですよ。深さと地形見て、あとは勘でやりよったです。殆ど桃サンゴ探していましたから、桃はどの位の深さかを調べて、地形見て、地形がパッと落ちる所もあれば、宝山の場合だと皆少しの凸凹ですよ。こうして落ちる所は、あそこは広いから、サンゴあるだろうと、もう勘で、自分の勘でやってました。それに、サンゴがあっても、潮の流れが悪かったら網に掛からない。1,2 回入れては分らないから、潮の加減見て、何回も網入れてみるわけです。運良くサンゴが掛かったら、万々歳です。目印のブイ持っていますから、そこにブイを放り込むわけです。

これは運がよければの話で、大体が 1 日中やっても掛からない場合が多い。

宝山も、最初はもう 2 年位、どこに行っても採れよったです。サンゴ船が 80 隻位来て採るから、段々少なくなってきましたよ。宝山ソネは広いですから、サンゴある別の場所を探さんといかん。見つけるまでが大変だった。1 航海、2 航海ではなかなか探せませんよ。

サンゴ漁光景　左：目印のブイが入れてある。右：揚ったのは大きな桃サンゴ。(場所、日時不明)

サンゴ網　草とか　貝とか　色んな物　掛かる

サンゴ網揚げたら、色んな物が引っ掛ってきました。草とか、サンゴみたいなものが、

だけどサンゴではないですよ。ウチなんかは海サボテンとか、ウミマーチ（海松）というけど、この位の骨のある草が、この長さ位で、これがもう針金みたいに硬いものが。これ多い所と少ない所があるが、尖閣列島はとくに多く掛かったですよ。あんなものが網にいっぱい掛かるから、サンゴあっても掛からんわけです。網をもうこう畳んで、こう引っ張っても、色んなものが掛かっているから。たまにはヒーゴー(痒い物)といって手袋しても、触れたら痒い、もう痒くて、あのヒーゴー掛かったら大変だったですよ（笑い)。また見たことない貝殻なんかが掛かりよった。今だったら飾り物で上等だけれども、これをいちいちきれいに外す暇ないから、丸い木ハンマーで、もう叩くだけ、叩いて、皆バラバラにしますよ（笑い)。

ウミマーチ（海松)と呼ばれ、深さ 100 ﾒｰﾀｰに生えている。サンゴと一緒に掛かってくる。（上原常太郎所蔵）

小さい石なんかも皆外す、網広げてきれいに外さんとダメですから。ハンマーで叩いて、これ外すのは面倒くさいです。で、外すのが間に合わんかったら、予備沢山積んでいますから、サンゴは外さんで、ロープから切って、そのままダンブルに入れる。これ外すまでに船どこに流れるか分らんから、新しい網入れる。これは帰りの航海中に、暇々見て、ダンブルから取り出して広げて、また網外しよったです（笑い)。

32 歳　豊岡丸に　漁労長で乗る

福泉丸には、何年か乗って、そのあと、豊岡丸(10 ﾄﾝ)に替わった。あれは岡村豊三郎さんの船、この人は与那国で、サンゴ船は初めてで、経営だけですよ。で、岡村さんに頼まれて漁労長で乗った。サンゴ船の親方は大変だったはずですよ。普通漁船の船員は歩合制だが、サンゴ船の場合は皆給料制です。マグロ船とか、一本釣り船だと、水揚げしたら魚すぐセリに出します。で、売上げから船の経費とかを差し引いて利益出して、これを 5・5 とか 6･4 で、親方(船主)と船員で分ける。だから水揚げしてセリ出せば、金も回るから、船の経費も、配当金の支払いもできる。サンゴ船は違う。幾ら水揚げしても、セリがないからすぐに売れん。サンゴは入札があるけど、あれは年 1,2 回しかないから、金は回らんですよ。サンゴ船は経費も掛かるし、船員の給料も毎月払わんといかん。親方は金の工面に苦労して、大変だったはずです。

サンゴ網を手入れ中の豊岡丸の船主岡村豊三郎氏。(「今日琉球」より)

サンゴ船やるのは大体が夏です。カツオ漁とかで忙しい時期だから、ベテランの海人はあまり乗っていない。半農半漁の、海を知らない人達が多かった。簡単な仕事だから、その分給料は安いさぁ（笑い)。

親方(船主)も元々海人じゃない。だから漁労長、船長も頼んで雇う。サンゴ船の場合、漁労長に一番の責任がある。海に行ったら、船長は普通船員みたいに働かんといかん。漁労長は給料も船長の倍位はとる。それに船員の給料も漁労長が決めるわけです（笑い)。

尖閣　赤サンゴ揚がる　桃掛からん　草掛かる

尖閣列島にも行きましたよ、宮古やっている時から、尖閣の話はよう出ていましたねぇ。ウチなんか行った時は、宝山があんまりだったから、尖閣に行った。行ってみて、魚釣島の東側にソネがある、浅瀬があるから、あそこに網入れたら、赤サンゴがあることが分った。あそこの赤は大体 80 ﾒｰﾀｰから 100 ﾒｰﾀｰ。やってみたら、赤しか揚がらん、あんまり採らなかった。赤採る人いないです、安いから。桃サンゴが金になるもんだから。

それで、桃サンゴ採ろうと 80 から 100、200 ﾒｰﾀｰ下に、網を下げて行ったですよ。尖閣は潮が速いさぁ、しょっちゅう北にチャー(常時)行きだから、網入れて、船が流れたら、大体 40 分位で、網揚げないといかん。網揚げたら、アキサマョー！！!(感嘆詞、おやまぁの意)、草がいっぱい掛かってきた。針金みたいに長くて硬い草、海サボテンから、ウミマーチから、色んな物が掛ってきた。赤サンゴが掛かる 100 ﾒｰﾀｰの所には、あんなに草はないです。桃がある 180 ﾒｰﾀｰから 200 ﾒｰﾀｰに網入れたら、もう草ばっかりですよ。

桃は少しは掛かっていたけど。あんなに草が掛かったら、網がサンゴの上に被っておっても、草が丸く束になっているから、この上を滑って行って、サンゴは掛かる暇ない（笑い)。それに、あの草を外すには大変だった。1 時間ナーでは網外し切れない。尖閣行ったら、サンゴは掛からなくて、人間が忙しいですよ（笑い)。だから、船員は向こうに行くのは気が進まん、嫌がったですねぇ。

上空から見た大正島、尖閣諸島は海草？が多いせいか、網に草が掛かり操業を敬遠されている。（奥茂治 2008）

アカオ南　やったら　赤サンゴと草が

あとアカオ（大正島）南側かなぁ、10 ﾏｲﾙ位、15 位ﾏｲﾙ行ったら左に下がる所ある、百尋線の下側で、フチミグワー(大陸棚縁辺)になって、あっちに網入れたら、やっぱし赤サンゴが掛かった。桃も大きい木が掛かるけど、そんなに沢山は掛からない。代わりに、こんな

草が、海サボテンが沢山あるわけ。魚釣島の東と大体同じよ。もう網下ろしたらサンゴ掛けないうちに、草とかがいっぱいに掛かってきましたよ。あれ外すには大変だったです。船員もぶつぶつ文句言ってねぇ（笑い）。尖閣行ったら、もうサンゴは掛からなくて、人間が忙しい。だから、船員は向こうに行くのは、嫌がったですよ（笑い）。

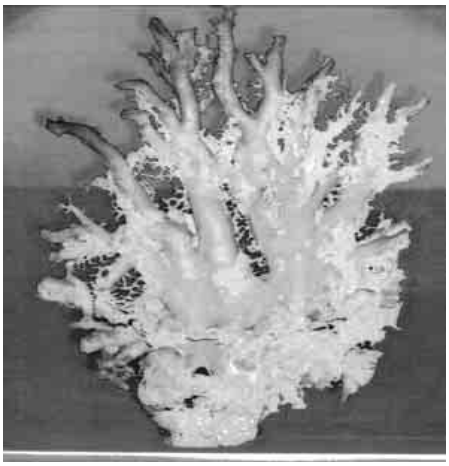
また、赤サンゴは採れるけど、桃はあんまり採れない。今が赤サンゴは高いみたいですねぇ。中国があんなに高いから、台湾でも赤が高いみたい。桃とかピンクは安いと言いよった。あの時分は桃とかピンクとかが金になる。

赤は買う人いない、いても安い。赤採ったら引き合わん、船員の給料、食料代なんか上げて、人使っては引き合わない赤字ですよ。だから、皆あんまり尖閣には行かなかったですよ。ウチらもあとからは行かんかった。

尖閣専門・小橋川長助　3名で　ずっと行っていた

(1967 年度尖閣で操業したサンゴ船主と生産高一覧表を見る　※同一覧表は末尾に掲載)。これ、僕がミッドウエィに最後に行って、サンゴ辞めたが、大体そのあと位だねぇ。結構行ってますねぇ。小橋川長助さん、慶田清稀さん、前西原豊さん、砂川亀吉さん　池間幸夫さんも。こんなに尖閣に行ったわけですねぇ。この人達皆知ってます。昔のサンゴ仲間で、先輩達だったです。もう皆亡くなっていますよ。こっちの慶田さんは、僕と歳は一緒位、この人はまだ元気だはずです。尖閣で、皆サンゴ採ってますねぇ。採っているが、この表にサンゴの種類ないが、殆ど赤ですかねぇ。桃はあんまり採れなかったですから。

この小橋川長助さん、この人は尖閣専門でしたよ。昔から、僕がやっていた頃から、ずっと尖閣に行ってました。与那国の人ですよ、第三新徳丸という船持って、これが一番小さい船だった。宮古にいたが、船があんまり小さいから、他の人みたいに資材は買いきれない。宮古の宝山とかでは採らなかったけど。尖閣に行って、3名で行って、少しずつナー採っていると言っていた。あとからは宮古から八重山に引っ越していったですよ。



尖閣諸島で採れた赤サンゴ。1970 年採取。
重さ 20.3 ｷﾛ、H65×W50 ｾﾝﾁ。時価 22 億円とある。
（稲葉恒雄提供）

八重山の大川にいて養豚しながら、船があるから。すぐアカオに行ってサンゴ採っている。どこで採れるか、分かるから。3名でヨー、ゆっくりゆっくりやって。2人は島の後輩だから、給料やらんでも、ご飯食べさせて、酒飲まして、手間賃少し上げればいいわけです（笑い）。他の人みたいに、お金は掛からんから。そんなして、ずっと尖閣に行ってましたよ（笑い）。八重山から尖閣までは、大体8時間位で行くさぁ。今の船だった

ら4時間で行くんだけど。あの時分の船は8時間位、小橋川さんは第三新徳丸で、3名で行ったり来たりしてました。少しナー、サンゴ採っても、燃料代とか、手間の分はあるさぁ。それをずっと尖閣専門に続けてましたよ。養豚しながら（笑い）。もう本人亡くなったです。2人も亡くなった。1人は泊にきて、海に落ちて亡くなりました。誰か1人でも元気だったら、その時の話が聞けたんですがねぇ。

宝山　噴火の焼石？　サンゴあって　草ない

宝山辺りは、尖閣よりは、海サボテンとか、ウミマーチとか、草はそんなに掛からないです。宝山行ったら、これ位の焼石に、こんなサンゴが生えてよ、この石に生えている桃サンゴがそのまま石と一緒に掛かってくる。これ位の奴かねぇ、殆どあれの前に生えているサンゴは大きかった。この石は噴火の跡の石か、何か分らん、真っ黒して、これ位の石がゴロゴロして、サンゴと一緒に網に掛かってきたんですよ。

石も重い、相当な重さ、あれに生えているサンゴは大きいです。石はもう真っ黒くして、草は少しナーは掛かりはしますよ、だけど尖閣みたいに掛からん。あの石の前には草は生えない。サンゴだけしか生えない。珍しいよ(笑い)。でも、サンゴの付いた石は、全部が全部そうでもないけど、でも真っ黒くして焼けていた石が多かった。そしたら、そこのサンゴは大きいわけですよ。

宝山がダメといって、今度は八重山の東側に行ったですよ。行って、やったら、あそこもそんなに草ない、1回ピンクが掛かりよった。向こうには8隻位が行った。

で、港からこの場所まで3時間で行きますから、あそこには1ヶ月あまりかねぇ、やって掛からんから、もうあそこもダメでした。

で、与那国にも探しに行っているけど、この位のクサリギー(腐り木)サンゴ、この位あるけど、外は皆虫食っているさぁ。して、折ったら、中身のこの位、芯はあるわけよ。芯があるから、新しいのは掛かるんじゃないかなぁとやったら、ポッボッとは掛かるけど、そんなに掛からんさぁ。あそこにもう2航海行ったけど、与那国に行ったら、チャー(いつも)赤字で帰って来たですよ（笑い)。

サンゴ枝の形･質　地形見て　生え状況　見当

サンゴがある地形ですか、魚探で見たら、真っすぐしている所はあまりないんです。

ちょっと凸凹のある所に、こう山がありますでしょう、急に地形がこう落ちる所があります。でもこういう所はあると見当付けても、採れるかどうかは実際やってみないと分からん。その時は潮の流れを見て、この地形がこう落ちているから、この辺に網を下ろしたら、底まで流れて、この辺から網を引っ張っていく計算でやるんです。でもやり方は人によって銘々違います。上手な人もいれば、下手な人もいますよ（笑い)。サンゴが折れて、網に枝が掛かってきたら、この枝の形、質とか、あと地形見て、根っ子はどの位あるか大

体分ります。

例えば折れ口がありますと、こっちから折れているから、どの位折れていて、掛かってきたら幾ら位、秤にかけて幾ら位はある。あくまでも見当ですよ。下にはどの位残っていると、幾ら位あると、でも大体当りますよ。あとサンゴの質とか、そこの地形見て、あぁこっちに群がってあるとか、ないとか、バラバラだとか、生え状況を見当付けて、これ採れるなぁと思ったら、すぐブイ打ってから、またやるわけですよ。

海底の凸面に生えている桃サンゴ。根元は枯れ小枝が落ちているが先端は異常ない。(「奄美群島漁場調査報告」より)

ブイはドラム缶を 2 つこう引っ付けて、ぎっしりして括って打つわけ。夜は暗くなる時分にダルマ灯点けて明かりせんと分からない。夜もずっとやるから。昼はバッテリーを充電するからダルマ灯取って、遠くからでも見えるように旗立てます。で、晩方なったら旗取って、ダルマ灯点けて。で、大体 1 航海 8 日から 10 日位だから、操業終えたら、このブイ揚げて、持ち帰ります。だからブイは皆銘々持っていて、操業場所には自分達のブイ打っておかんといかん。

折り口舐めて 質判断　たまに 高価なボケサンゴも

赤サンゴは安いから、皆桃とか、ピンクとか、狙っていた。宝山でも、尖閣でも、どこでも桃とかピンクのある所は 180 から 200 ﾒｰﾀｰですよ。そこから、たまにですが、桃と一緒に赤も掛かってくる。またピンクとも一緒にも。赤は僅かだけど。

赤サンゴはまた平均に小さいです。こんなのは大きいのはない。赤は大体この位に皆小さい。貫木は少ない、枝が多い。桃のは相当大きい。1 本で 5 貫目、6 貫目掛かってきた、根元から。で、桃とかピンクを採ると、折口を唾で舐めて、透明なったら値段が高い。ガラスみたいに透明なのは高い、また木の模様みたいに、この折口にギザギザしているのはちょっと安い。表面は同じ桃とか、ピンクだけど、折ったら違うわけ。だから折ってみたら、もうガラスみたいに透明なのは高い。ダイヤモンドも透明でしょう。あぁいった感じで高いわけ。これがボケとか、スカッチといって、これ当ったら普通のサンゴの 3 倍位の値段、でもなかなかあれは掛からない。掛かったら儲けものですよ（笑い)。

サンゴ屑“ピンコロ”　船員の小遣い賃

サンゴ船は操業して危険というのはあまりなかったですねぇ。ただ網揚げる時に、ラインホーラーでロープ巻くから、このホーラーに巻かれたら危ないですから、もう夜はどんなことがあっても、前に行かんで、ロープは後ろから手繰りなさいと指導したです。

夜シケている時はちょっとやり難いから、皆雨合羽を着けて、雨靴履いているから、転ぶ時もある。だから、ホーラーの前には行くな、後ろでやりなさいと、口うるさく注意したです。網揚げたらもう忙しい、船は流れているから次の網入れんといかん。滑ってホーラーに巻かれたら、もう危険いですからねぇ。

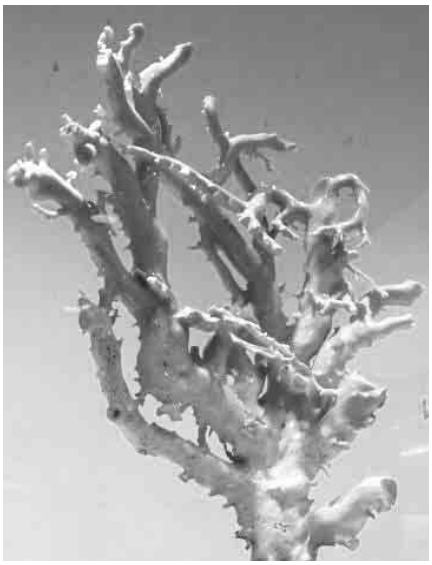
で、網揚げたら、甲板にこれを広げて、サンゴとか草とかを、いちいち外しておったらもう間に合わん。サンゴさえ外せば、小さい枝とかはハンマーで砕いて　もったいないけど、ハンマーで打ったらもう短いさぁ、これのピンコロ（サンゴ破片・屑）と言うさぁ。これが網の下に落ちているから、拾う船員の物よ。あれたちのワタクサー(へそくり)、洗い流して捨てないうちに、皆拾って、ビンに入れて、船員なんか、あれで相当儲かっている（笑い）。

サンゴ屑ピンコロ。加工業者が浜で待機して、買い取った。船員達はこれ集めて売り小遣い稼ぎにした。

マグロ船なんかでも、昔からサメが掛かると、サメのヒレはダンブルに入れないから、皆船員のワタクサー(へそくり、小遣い銭)、ヒレ取って、干して、これ売って、皆タバコ賃にしていた。サンゴ船でも、サンゴのピンコロは船員のワタクサーです（笑い)。

宮古でやっている時は、傍に皆 1 升ビン置いて、こうハンマーで叩いておって、ピンコロを拾って、皆で、せっせと 1 升瓶に入れるわけ（笑い)。で、サンゴ船が港に着いたら、これ買う人から、あれで女の子のネックレスなんか作る加工業者が買いに来る。安く買えるから、1 升ビンだから相当な金ですよ（笑い)。あれを売ってタバコ賃、小遣い稼ぎにしておった。ウチなんかは、このピンコロは関係ないさぁ。1 航海にたまに 1 升瓶の 2 つ位持って。船員なんか頭がいいから、この位小さなサンゴなら分るけど、時々は、少し大きいものもハンマーで、もうバンバン叩いて、ピンコロにして、1 升瓶に入れておったよ（笑い)。

ウチなんか責任者も、たまには親方からサンゴもらいました。そんなに沢山じゃない、少しですよ。もらったら、サンゴ加工する店があるから、向こうに持って行って、指輪とか、ネクタイピンとか、加工させて、半々で分けた。加工賃代わりに、半分上げた。指輪作ったら、台は 18 金だから、あれ売った。もう皆安売りしたですよ（笑い)。



サンゴは船主が資金繰りが苦しいと入札に廻されず、浜売りされ、即刻現金化された。

サンゴ　沖縄で　国際入札も

採ったサンゴ、最初は神戸に持って行って、入札しておった。あとから沖縄で、国際入札やった。年に 2 回、波の上の松の下料亭、向こう借い切りして、すごかったですよ。

その時はﾄﾞﾙ時代で、現金払いだから、内地から来る人は鞄に、こんなにお金持ってきて、これ位のカゴに、いいサンゴはえり分けて、入れて。で、皆、並べた品物見て、これは品いいねぇ、これは幾らと、入札しておったです。あれだけの品だから、大体入札終わるまで 1 週間位でしたよ。ウチらもセリに出しているから行かんといかん。だから 1 週間食べるのも贅沢に向こうでくれるわけ。

サンゴ組合がそこ借い切りして、もう自分の奥さんでもいいから皆連れていって、あんなに食べさせておったよ。ご馳走つくって、飲むのも飲みたい放題、ものすごかったです。サンゴを出した人は、入札だから、その場にが値段は分かるさぁ。サンゴ船の親方相当儲かったはずよ。最低でも、半年で 1 億 5 千万位かねぇ、もっと儲かったかなぁ、2 億から 3 億は（笑い）。

映画「八月十五夜の茶家」の舞台ともなった料亭松の下。当代沖縄随一の社交場、借り切ってサンゴ入札を行なう。

1965,66 年　サンゴ組合　ミッドウェーへ　出漁

泊のここで安里虎寿さん、柴田重利さん、岡村豊三郎さん、あと誰だったかなぁ、7､8 名位でサンゴ組合やっていた。ミッドウェイでサンゴが採れると聞いたもんだから、100 ﾄﾝ位の船をチャーターして、慶田さんに頼んで、向こうに採りに行ったわけですよ。

行って来て、その翌年かなぁ、また組合は向こう行くということで、泊のマグロ船、海幸丸と魁丸を 2 隻チャーターした。内地から中山さんというサンゴ専門家を連れてきて、魁丸の漁労長に。海幸丸は私を頼みに来たんだけど、私は 2 回断ったんですよ。したら、豊岡丸の岡村さんが、バカ野郎！　何んで行かんと断るか、お前ができんで、誰ができるか、行きなさい！、じゃ行きますよと、承諾しましたよ。

だけど、魁丸は 100 ﾄﾝ位、乗組員は 15,6 名、ウチが持つ船は 220 ﾄﾝ位で、36 名。もう、宮古行って、あそこの連中も頼んで来て準備しておった。でも組合は金がないわけです。

給料、資材、食料、燃料、皆入れたら、220 ﾄﾝの 1 隻で、大体 3 万ﾄﾞﾙ位掛かるから、したら 2 隻だったら、詰め込み、給料入れたら、もう 5 万ﾄﾞﾙ位準備せんと、詰め込みできないさぁ。

出漁資金　女傑照屋敏子　出資

で、柴田さんと豊岡丸の親父と、那覇のサンゴ土産店の照屋敏子といって、カンプー(髷)

結うた糸満出身の女傑ですよ。柴田さんと岡村さんは向こうに金借りに行っているわけさぁ。資金出してくれと、財閥だから、行って話を聞いたら、昔は福岡で、船 2 隻持っていて、あれで追い込みしたらしい、海のことはよう分かる。そしたら 2 人は断られたわけですよ。断るというより責任者連れて来いと言うたらしい。

リー(さぁ)、リッカリッカ(行こう行こう)。マーカイヤイビーガー？（どこへ行くんですか？)。こうこうお前を店に連れて来いと言うから、連れに来たよ。アイ、何で親父、僕が行ったって意味がないさぁ。僕が行ったらお金借りられるの？　あそこが来いというから行ったわけですよ（笑い)。

照屋敏子さんと宝石サンゴ店「クロコデールストア」。地下はサンゴ加工場。

で、店に行って話したら、私に、あんたミッドウェイに行ったことあるか？　組合が 1 航海は行きました。あぁそう、あの人は大変よ、あそこの海図皆持っていた。持ってきて、こう広げて、あんたどこに行くか、どこでサンゴ採る積もりか、東の方指したら、大変ですよ。いろいろ質問して、すぐ皆調べるわけです。で、話終わって、組合長に、分った、明日来なさい。行ったら、一緒に来て、何は、はい幾らかと、皆すぐ現金払いよ。このお婆が（笑い)。

して、出港の日に、あの一斗缶がありますねぇ、あれ持ってきてから、僕に、漁労長、これはサーターアンダーギー（砂糖てんぷら）だから、これは普段は食べさせてはいけない。海はいつシケるか分からんから、シケて飯が炊けない時に、これを出して皆に上げなさい、サーターアンダギーを。これ皆自分で揚げたんだって、偉いですよ（笑い)。

白サンゴ揚がった　売れないから　採るな

ミッドウェイに 2 隻一緒に行った。組合は、中山さんを内地からサンゴ技術者として頼んでいるわけさぁ。あの人は戦前から台湾でサンゴ船やっていた。だから、私にどこに行っても中山さんの魁丸に付いて行きなさい。一緒に仕事やりなさいと言われた。あぁそうですかといって、ミッドウェイ着いて、網入れたら、皆白サンゴであるわけさぁ。

もう網にいっぱい掛かるけどよ、もう白だから、ウチの海洋丸に無線局長が乗っておったから、局長に、白サンゴは沢山採れるけど、どうするか、白サンゴ採ってくるかと、組合に無線打たしたんですよ。そしたら返事来た、白サンゴは売れない、売れないのを採ってもしょうがないと。で、中山さんにこうこう組合から連絡があって、ウチは別探しますよ、と無線打ったら、いいよ、行きなさい。それで 1 週間位、あっちこっち行きました。行って、一生懸命あっちこっち網入れるが、全然白しか掛からんわけ。網は白だけですよ

（笑い)。またもとの場所に戻って、白サンゴでも採っておこうかなぁと思ったですよ。

そうこうしているうちに、夜なって遠くに灯が、船の灯がバァーと見えたもんだから、あれマグロ船か、何隻かおるなぁ。もう網入れて皆寝っておった。9 時頃、皆起こして、網揚げて、灯の方に行ったわけです。したら、内地の大型船が 3 隻よ。サンゴ網しているわけさぁ。

大型船 操業　網入れたら　桃サンゴ　揚がる！

船の近くに行って、操業しているから、あれなんかのやり方をずっと見ておったです。魚探で廻ってみて、潮の流れも調べんといかん。こう網揚げたら、こう潮上りする、潮はどこに走っていると分ったから、すぐ網入れてみたんですよ。もうこんなにサンゴ掛かっているわけ。折ってみたらピンクですよ。桃サンゴ、もう桃サンゴが毎日採れるさぁ（笑い)。バンナイ、バンナイ（どんどん）採れるもんだから、無線局長に、中山さんにこうこう採れるから、魁丸に連絡させたんですよ。連絡させたけど、こっちに来ないわけです。

何回か連絡しても来ないから、もういいよ、ということでそのまま操業していた。

もう揚がるのは桃だけだから、それを 18 日位操業しましたねぇ。で、これ位採ったら大漁だからと帰ることにしましたよ。

帰るからと魁丸に無線入れたら、自分なんか、網とか、ロープとか資材切れていから、自分なんかに残っている資材貸しなさい。同じ組合ですから、行ってからに資材を渡して帰ってきたんです。

ミッドウェイで採れた桃サンゴの原木

結局、魁丸はあとから来て、皆白サンゴ採って、もう赤字ですよ（笑い)。白は安いどころではない、売れない。ウチのは桃サンゴさぁ、あの時分は桃が高いから、アキサミョー(感嘆詞　時)、ウチなんかは黒字、あれなんかの赤字を埋めておる（笑い)。

あの時、内地の船も桃採っていた、3 隻。あれなんかは 150 ﾄﾝ位の船で、ずーと採っておった。ウチなんかより先にやっているけど、ウチなんかが帰るまで、あれなんか帰らない。

だから、相当運がよかった。あの時桃はどの位採ってきたかなぁ。もう忘れたけど、最低でも 800 貫位はあったかねぇ。1 貫が 6 斤、3.75 ｷﾛだから、800 貫なら、約 3 ﾄﾝ位かねぇ。はっきり覚えていない。

照屋さん　出資金分　10 数年分？　サンゴ買い込む

あの頃は年間 2 回、国際入札であるわけさぁ、そしたら、ミッドウェイから採った桃サンゴを入札したら、あの照屋さんが、アキサマヨー、皆あの人が、相当取った。船 2 隻分の積め込み 3 万ﾄﾞﾙ出してあるから、3 万ﾄﾞﾙ金出した分のサンゴを買い上げている。

照屋さんは国際通りで 4 階建て店あるさぁ。あの建物の地下で、サンゴ、宝石類とかは皆加工してある。あの時入札して、サンゴは何 10 年分と買い上げているから、組合のサンゴ船には資金はもう出さない。出す必要もないさぁ（笑い)。結局、ウチらがミッドウェイから持ってきたサンゴを相当買い上げているから。

あれからは資金はもう出さん。組合はお金ないですよ（笑い)。帰って来た時、組合長の柴田さんが文句言うておった。お前は何で、中山さんを呼んで、桃を採らさんかったのか。組合長さん、失礼だけどねぇ、2､3 回呼んでいますけど、来ないから、これ以上呼んだら、迷惑と思って、呼ばなかったんですよ。あぁそうねぇ、魁丸も桃採って来ていたらよかったが、あの白の赤字を、お前達の桃の黒字で埋めたから、儲けはないよと言うていた。

落入したミッドウェイ産の桃サンゴ原木。枝が山なす。

もう組合が出すお金はないから、ウチらがミッドウェイに行ったのが最後でした。あれっきり組合もサンゴ船辞めて、そのあと解散したわけです。

ミッドウェー　ペラに　ロープ絡まり　潜って外す

ミッドウェイは、ハワイと東京の合い中位、片道 15 昼夜、15 日掛かりよった。往復 1 ヶ月です。大東亜戦争でミッドウェー海戦のあった所です。あそこに大きなソネがあって、海図から見たら、ソネは沖縄より大きい。

で、昼、ウチなんかが仕事していたら、内地の 150 ㌧位のサンゴ船 1 隻が旗振るから、何かなぁと思って、行った。行って、船着けて見たら、ペラ(スクリュー)にサンゴ網のロープが巻いて動かんと言うわけ。サンゴ船乗っている人は潜りはできないから、誰か潜ってやってくれんかと頼まれた。もう僕は若い時は潜っているから、ミーカガン(水中メガネ)とかはいつも持っている。で、包丁持って、潜る準備して、あんたなんかの船のエンジン止めろと言って、エンジン止めさせたわけさぁ。絶対エンジン掛けるなと言って、潜って見たら、ペラにもうこんなにロープが巻いているわけ、そのロープ切るのに半時間位かかった。して、終わって、元の場所に戻って、また仕事やっていたら、また来い来いしたよ。

何かなぁと思ったら、今度は封筒よ。封筒に何か入れて投げたきた。拾って開けてみたら、お金 300 万円、僕にさっきのお礼というわけよ。僕の権限だから、取って、もう船員にはくれないさぁ。機関長、船長、局長、ボースン、ボースンも 2 人いたからよ、あれなんか皆に 20 万ずつ分けて、残り僕がもらったですよ。こんなこともありましたねぇ。

船員に一苦労　沖で黙って　陸で懲らしめる

サンゴ採りは、人間使うのが大変です。このミッドウエーの時は36名の人間で、ハッサヨー、これなんか調整取るってあんな苦労はない。航海も 3 ヶ月と長いから、ずっと神経使いました。海の上ではも少しのことでも我慢するしかないです（笑い)。黙って見ておかんとあれだけの人間は使えないです。

サンゴも掛かったら、夜もずっとやり放しですよ。夜通し仕事するから、疲れたら、人間は何を考えるか分からん。中には 2､3 名はきついといって眠って仕事はやらんさぁ。ボースンが怒ろうとするけど、いいよ、黙って寝かせて置きなさいと、そう言ったですよ。あれなんか、もう寝るだけ寝て、今度は、今日から仕事やろうと言うけど、僕はさせなさい、させるなと、ボースンに言うわけよ。で、帰ってきて計算したら、給料は普通の人の半分もくれなかった。これ漁労長が決めるわけだから（笑い)。

で、少ないと文句言います。言うけど、これ仕方がない。お前達、仕事やらんで、何で皆と同じようにもらおうとするか、叱ってやるわけですよ。

豊岡丸の場合は8名から10名でした。皆宮古の久松の人で大人しかったです。その代わり仕事終わって、晩酌しないと夕飯は食べんわけさぁ、だから泡盛の 1 合瓶があったでしょう。で、何名分といって、大体 10 日分を、予備も積んで行きますよ。それを 1 本ナー、これ以上は飲まさんわけさぁ。これ飲んで、飯食べて、また寝るから、久松の人は文句言わないですよ（笑い)。

八重山サンゴ騒ぎ　内地船　10数億揚げた？

とにかく、ミッドウェーで、あれが最後のサンゴ採りだった。あの時儲かって八重山に行って、家内が雑貨屋して、僕は3ﾄﾝ位の船造って、あれで一本釣しておったんですよ。

今度はその時の話、八重山の海人はサンゴの意味が分からんさぁ。したら、あるアガリグヤ(東小屋：糸満系の海人集落)の一本釣船がサンゴ掛けてきて、港の傍らの観光土産店がこれ買って、店の飾り物にしていたんです。たまたま僕が向こうに行って見たよ。この位の石に付いたサンゴ、扇みたいに広がってきれいさぁ。

これどこから買った、幾らで買ったんですか？と聞いたら、東小屋から買った。50ﾄﾞﾙで、じゃ、僕が70ﾄﾞﾙで買いましょう。いや、これは店の飾りものだから売らない。

そう言うもんだから、東小屋に行った、行ったら名前聞かんでも、狭いから、誰が掛けたかすぐ分かった。あんた、あのサンゴ掛けた所分かるねぇと聞いたら、場所は分る。あれなんか山当てで、漁やっているから、行って山当てしたら、掛けた場所に、すぐ連れて行けると、そう言っていた。

で、サンゴ採りは許可証もらわんと権利ができないわけさぁ。で、慶田さんは許可証も皆持っているんですよ、で、慶田さんに連絡するから、彼がこっちに来るまでは、あんたこの場所、誰にも言うなよと、そう言って帰ってきたわけです。

あの時に、丁度内地のサンゴ船が 3 隻が来ておったらしい。私はそんなこと分からんさ

ぁ。で、このサンゴ船の人もあの店のサンゴ見て、掛けた本人を探して、これ掛けた場所に連れて行ってもらって、で、3 隻で、バンバンやったわけです。

したら、やっぱり、サンゴが相当掛かっておったんじゃないか、あの本人は見てないから分からんさぁ。1 隻の船が帰る時、港に着けて、本人に、はいと、封筒渡したらしい。

お礼のお金さぁ、幾らか分からん。ちょっと厚みがあったから、そのまま家に帰って開けて見たら、100 万円入っておったって（笑い)。もう内地船は帰っていないし、サンゴも採り尽くしたあとですよ。そのあと、本人に慶田さんに会わして、話したよ。あんた、何であんなことするねぇと、意味が分からんから仕方がないけど。あの時は復帰前さぁ、アメリカが治めているから、内地船はこっちでサンゴ操業できない。許可証もないから。

許可証持っている人から借りたらできる。慶田さんは許可証もっている。借りて操業はできるから。そしたら水揚げの 3 割は払わんといかん。あの時 3 隻で、2 航海といったかねぇ、10 数億円位は揚げたらしい。その 3 割なら数億円になるさぁ。僕らも大きな魚を逃がしたけど、一番びっくりしたのは本人だったさぁ（笑い)。

このあとからですよ、もう八重山の海人は、どこ行っても、もうサンゴの噂と話 (笑い)。

石が掛かっても、サンゴ、サンゴ。あの赤石なんか、あれが掛かったら、あぁサンゴだと言うし（笑い)。あの時ですか、僕が 34,5 歳位だから、1970 年か、71 年頃かなぁ。

もう復帰直前だったかなぁ。もうあの時には沖縄サンゴ船は皆辞めていたです。慶田さんだけは辞めないで、サンゴ許可証持って、サンゴ船続けていましたよ。

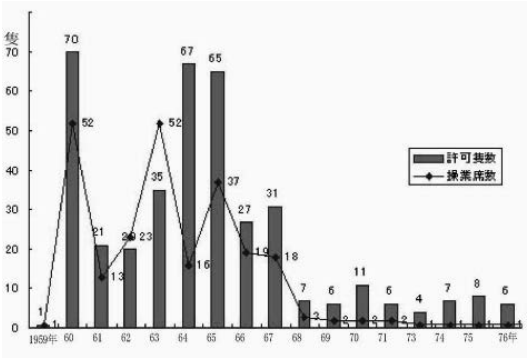
サンゴ採り尽くす？　サンゴ船　次々廃業

僕がサンゴやった最初の頃は、だいぶ採れたです。1962 年から 2,3 年は採れました。

だけど、あれだけの船ですから、段々採れなくなって　宮古の宝山辺りではあんまり採れない。位置が当っても、全然潮の流れがよくても採れない、もうダメです。

あのサンゴの採れる範囲はあんまり大きくないし、70､80 隻の船が 10 日間位やっているわけだから。もう大体やって、掛かり方見て、これでは引き合わないと分かります。1 航海大体どの位採らんと、収支の計算してが仕事はやりますから。乗組員の給料もあるし、網の資材、積込みの経費もあるし、この分も採りきれないから皆辞めたわけです。

宝山もダメといって､サンゴソネでも、大九でも、どこ行っても、よう経費が取れないといって、皆辞めました。



サンゴ漁業の許可隻数及び操業隻数
（「沖縄のサンゴ漁業に関する実証的研究　比嘉堅」より）

豊岡丸の親方の岡村さんはもう少し頑張ろうと続けましたが、やっぱり経費が取れなくて、辞めたわけです。僕がミッドウェー

行く前には廃船してました。豊岡丸ですか、最初 6 ﾄﾝ、あとでは 10 ﾄﾝでしたから 5 年位やりましたねぇ。

（サンゴ船の推移図を見せる）これがサンゴ船の許可隻数と操業隻数ですか。この表の 1962 年を見ると許可 20 隻、操業数 23 隻とあります。僕はその頃やり初めた年です。その時に、宝山に行ったらサンゴ船 7,80 隻いたですよ。実際操業していた船は 7,80 隻、これには 23 隻ですねぇ。大分数字が違うのは殆どが無許可船で操業していたわけですかねぇ（笑い）。よく分からない。だけど、この表見たら隻数は段々減っていくことがはっきり分ります。サンゴ採れなくなって皆辞めていってます。

1967 年の 18 隻から、68 年には 3 隻に減って、そのあとは 2 隻、1 隻になっている。

最後の年の 1978 年の 1 隻は、慶田さん所有の第六宝興丸とありますねぇ（笑い）。

最後の頃までやっていたあとの 2 隻は、大城清二さん、安里虎寿さんかもしれん。

サンゴ船　当れば　相当儲かる　親方取り分　80%

サンゴ当てた人は、相当儲けたはずです。だいぶ採れたから、億単位で儲けていますよ。

親方なんかは相当儲かった。船儲けの 80%はもらうわけだから。船儲けというのは、食料代、資材とか、船員の給料とかの経費を皆差し引いた純利益です。責任者は漁労長だから、船儲けの 20%を取って、10%は自分でもらってから、あとの 10%は皆に上げる。船長とか、機関長、ボースンにはちょっと上乗せして上げて、普通の船員にはまじめとか不真面目がいるから、あれには幾ら、これには幾らと決めてやる。これは責任者の判断でやるわけです。

宮古島近海で採取した桃サンゴ、1970 年頃採取。
重さ 39 ｷﾛ、H115× W160 ｾﾝﾁ　時価 40 億円とある。
（稲葉恒雄提供）

して、親方には、船儲けの残り 80%が行くわけ。あれだけ利益があるから大変ですよ。親方なんかは相当儲かった。ハッサミヨー（驚きの感嘆詞）、サンゴ 1 貫(3.75 ｷﾛ)で、いいものになると 500 ﾄﾞﾙもしたから。あんなに金が儲けられるかねぇと思う位、相当儲かっていたです（笑い）。これ苦労して儲かったお金じゃないから、大変だったですよ。

宮古の港の前で、瓦葺 2 階屋、宮古ホテルとあったです。あそこを借り切りして、天気の悪い時は、皆でバクチャー(賭博）して。あそこは人泊めるより、親方連中の飯作って、バクチャーさせて、相当儲かっていますよ（笑い)。ウチなんかも誘われて行ったです。

あの時若いからいつでも儲けられると思って、2, 3 回付き合ったけど（笑い)。

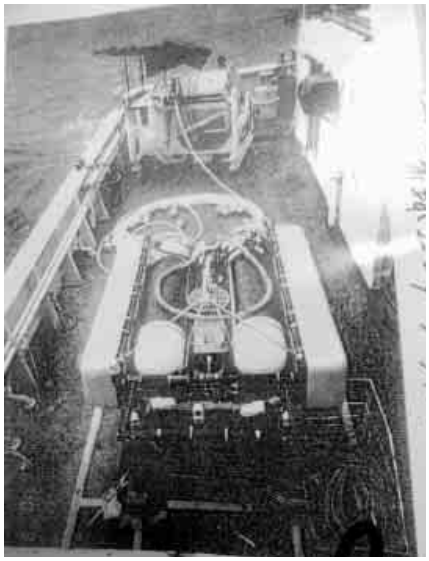
もう親方連中のバクチャーは大変でしたよ。もうバンナイ、バンナイ賭けては、捨てて、お金を紙くずみたいに、もうびっくりしましたねぇ。サンゴで儲かった人達、親方達は、

皆あんなでしたよ（笑い）。その代わり、もうサンゴ採れなくなったら、もう皆苦労しています（笑い）。

儲かった人　サンゴ夢見て　サンゴに　金捨てている

サンゴで儲かった人は、もうサンゴ採れないからパッと辞めればいいけど、また儲かるからと夢追っている人もいますよ。僕が最初に乗った福泉丸の大城清一さんねぇ。大城さんもサンゴで相当儲かった。相当儲かったもんだから、サンゴ採れなくなった時は、皆は切上げたですよ。大城さんは、サンゴを諦めきれず、また儲かるから、やるといって、今度は内地に行って、スポンサー探ししてやっていた。

もう何年前かなぁ、ロボットでサンゴ採る船持ってきた。このロボットというのは潜水艇です。これは大城さんが責任持ってやって、お金は糸満の会社の社長が出したみたい。このロボットを下に降ろして、上に母船があるから、母船でリモコンで調整する。サンゴもはっきり映るから、ロボットはサンゴを挟んで折るわけさぁ。このロボットが1回で1本ナーしか採れないらしい。200ﾒｰﾀｰ下だから、潮の流れが強いからこの調整が難しい。



母船に積んだ潜水艇。上からモニターで操作してサンゴを掴み採る。

もうサンゴは沢山あったみたいですよ。ロボットでサンゴもはっきり映るというから、やった場所？どこでやったか分からんさぁ。3年間やったかなぁ。

結局失敗して、糸満の社長さんを5億円欠損させたみたい。今度はまた2年位してかなぁ、フィリッピンに行っているわけ。で、フィリッピンに行く時、僕の所に来て、この位の大きいサンゴの写真持ってきたよ。フィリッピンであんなに掛かるの？　あぁ掛かるよ、で、僕を連れて行くというわけさぁ。

あぁ行かない。また来て、行こう、行かない。3回位来て、それでも断ったから、1人で行ったですよ。　そしたら4,5年前かねぇ、フィリッピンで亡くなったという話を聞きました。アッキミヨー！（可哀想に！）。最後までサンゴ夢見た人は、皆大城さんと同じ。あんなして哀れしている。サンゴで儲かったお金は、全部サンゴに捨てている。

安里虎寿さんも相当儲かったけど、もうあっちこっちサンゴを探すといって、サンゴに皆お金捨てていますよ。安里さんもサンゴで儲かって、きれいな家も造って、マグロ船100ﾄﾝ余りの 3 隻も持っておって、会社をしておったです。この会社辞めて、船も売って、あれからまたサンゴ採るといって、また船買って、あっちこっち廻っていたよ。サンゴ採るけど、ダメさぁ。それでも、サンゴに、チャー（ずっと）お金突っ込みさぁ。

サンゴ船は大体給料だから、あとは給料も払いきれんで、辞めたと聞いたけど、元気か

ねぇ。大城さんや安里さんだけじゃない。こんな人沢山いますよ。サンゴで儲かった人は、サンゴ夢見て、サンゴに皆金捨てている（笑い）。

台湾船　来て　採り残し赤サンゴ　盗る？

ウチらがサンゴ採っていたサンゴブームの頃は、あの時は、台湾のサンゴ船は見えなかったですよ。サバ釣りはいたけど、あれは夜しか釣らんさぁ。電気点けて釣っておったです。台湾船が向こうにサンゴ採りに来たのはあとからです。

何時頃か忘れたけど、八重山の東側に、港から 2 時間位で近いわけですよ。台湾船は相当来て、そこでサンゴ採っておった。向こうに入ると、保安庁が追い出すわけです。捕まえはせんけど、台湾船を追い出しておった。尖閣列島もそうですよ。捕まえないで、ただ追い出すだけ。沖縄の船は、あの時分赤は採らなかった。あるんだけど採らない、値段が安いから。桃とか、ピンクを採って、赤は金ならないから採らない。

だから、赤はあっちこっちに残っておったです。あとから台湾船がこっちに来てから、あの赤採っていたはず。今、中国でもそうだけど、台湾でも赤が相当高いわけだから。

で、台湾船がやめてから、今度は中国船が来ておった。宝山なんかに、いっぱいよ。僕なんかはそれ分からなかった。小笠原に中国のサンゴ船が来たニュース見てからが分かった。中国では赤がものすごく高く売れるから、小笠原に赤を盗りに来たニュースをテレビで見た。あの時 100 隻以上は来ていたはず。あんなに来たら、保安庁は何もできんさぁ。毎日テレビでやっていたけど、上から撮っているようす見たら、アキサミヨー、もうフシガラン（唖然とする）。もう中国のサンゴ船が群がって、海いっぱいよ。あれじゃ小笠原のサンゴは皆盗られるさぁ。国会でも問題となって、取締まりを強くして、罰金も 10 何倍にするとか、法律でも決めたわけ。

宮古島宝山ソネで密漁する中国サンゴ船。(高杉忍 2014)

そしたら、友達の海人が、宝山でもあんなだったよと言った。中国のサンゴ船が沖縄にも沢山来て、あんなしてサンゴ盗っていた。もう何年間前からよと。私は海人からこの話聞いて、初めて知ったです（笑い）。テレビも、何もしないから分からんです。

中国船　押しかけ　沖縄のサンゴ　盗り尽くす？

何で、テレビも、新聞も、こんな大事なことを、小笠原みたいに知らせんかねぇ。沖縄にも、中国のサンゴ船が沢山来ていると、これを皆に、何で言わんかねぇ、不思議さぁ。

国や、県も、ちゃんとこれ知っているかねぇ。知っていて対策しているのかよく分からんよ。それに沖縄には、サンゴはまだまだ沢山ある。沖縄はサンゴは相当有望と言われているさぁ。中国船は、あのヌクサー(残した)の赤だけじゃなく、新しいサンゴも探して、盗っているかも分からん。まだ、盗っていなくても目は付けているはずよ。

今、中国では、赤はものすごく高い、一番価値があると言われている。サンゴの価値も昔に比べて相当高くなっているわけだから。国や、県は、トルバイカーバイ(とろとろ呆け)していたら、沖縄のサンゴは、中国に全部盗られるさぁ。宝山にも、尖閣にも、八重山、与那国にも、あっちこっちに来るさぁ、久米島沖にも。したら、沖縄のサンゴ全部盗っていかれて、もう全滅ですよ。

沖縄のサンゴは莫大な財産よ。やっぱり、中国に盗られんように守らんといかんですよ。そのためには、組合(漁協とか漁業団体)だけでは、どうにもならん。テレビとか、新聞も、ちゃんと調べて、皆に知らせて。県も、国も取締りを、警備を強くして、皆でサンゴを守っていかんとならんです。　(了)

採れたサンゴを飾り、談笑するサンゴ船の船員達。1960年頃。
(「記録写真集与那国」より)

・・・以下は「5－3、電灯潜り関係　(後半)」の項に掲載

(続き)

※参考　中国船、サンゴ乱獲
沖縄近海　日本法令及ばず

中国漁船が宮古島と久米島近海の漁場で宝石サンゴを乱獲している状態にありながら、日本の法令では取り締まりができず、中国の自由操業を黙認せざる得ない状態であることが 7 日、分かった。1997 年の日中漁業協定締結の際、当時の小淵恵三外務大臣が沖縄近海の水域で中国が操業する際、日本の法令を適用しないとする書簡（小淵書簡）を中国側に提出していた。赤土の流出やオニヒトデの影響で宝石サンゴが減少している中、県内漁業者は海洋資源が奪われてしまうと反発。協定の見直しを求めている。（仲田佳史）

沖縄総合事務局によると、中国船による宝石サンゴの採取は、2005～06 年ごろから始まったという。当初は中国大陸から沖縄近海にまで延びる大陸棚の斜面で 1～2 隻が年間を通じて採取していたが、11 年には久米島南方の「北大九曽根」で約 20 隻、12 年には宮古島北東の「宝山曽根」で約 40 隻が確認され、宝石サンゴの採取は年々、活発化しているという。

日中漁業協定では、①北緯 27 度より北側の日中暫定措置水域、②北緯 27 度以南の沖縄近海の水域―での操業が認められている。

①は、毎年開かれる日中漁業共同委員会で許可隻数や漁獲量、操業期間などを制限している。だが、②は、「小淵書簡」で日中両国が海洋資源の維持が過度の開発によって脅かされない協力関係にあることを前提として、日本は関係法令を適用しない意向を表明。以降、日中漁業共同委員会で協議事項から除かれる状態が続いている。

関係者によると、当時、尖閣諸島の領有権問題を「棚上げ」する代償として、日本政府が認めたという。

中国漁船の採取の活発化を受け、水産庁は一昨年、中国にサンゴ漁船の操業を照会。だが、中国側からは操業の実態が把握できないとの回答があったという。関係者によると、サンゴ採取は中国では違法だが、中国政府はサンゴの陸揚げルートが不明確で証拠がつかめないとして、事実上、黙認しているという。

（沖縄タイムス.2013 年.5 月 8 日）

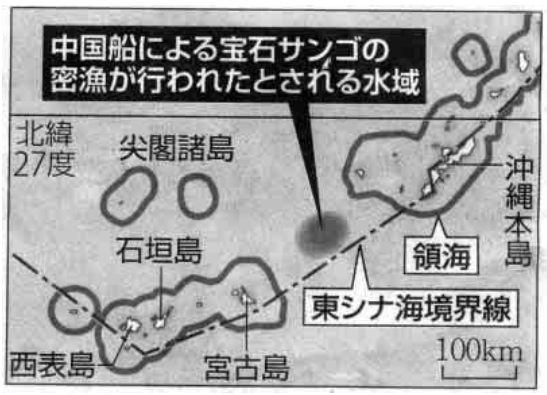
※参考　　宝石サンゴ密漁 被害調査
沖縄近海　中国船関与 立証へ

中国漁船による日本近海の宝石サンゴ密漁問題で、水産庁は 8 月、沖縄周辺海域のサンゴの資源調査に乗り出す方針を固めた。この海域では 2013～14 年頃、中国漁船による集中的な違法操業が行われた一方で、直前の時期に宝石サンゴの分布状況などを調べたデータがある。同庁は、データと比較して乱獲を実証することで、中国に密漁の取り締まりと再発防止を迫りたい考えだ。

水産庁取り締まり要請方針

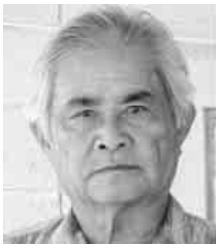
宝石サンゴの密漁は昨年 9 月から今年 1 月にかけて、東京・小笠原諸島の周辺海域でピーク時に 200 隻を超す漁船団が確認され、問題化。水産庁が今年 3 月、同海域を調査したところ、海底から中国漁船のものとみられる漁網 381 枚が見つかったため、政府は外交ルートで中国政府に再発防止を要請した。ただ、小笠原では元々の海底の状況を示す資料はなく、被害の深刻さを立証しにくかった。これに対し、沖縄周辺などの海底では 10～12 年、高知大や立正大の研究グループが海底を撮影し、宝石サンゴの生息状況を調査。沖縄の 10 か所（1 か所あたり約 2 万～6 万平方㍍）の宝石サンゴの分布密度などのデータなどを保有している。水産庁によると、沖縄周辺で 13～14 年、多い時に約 200 隻の、宝石サンゴの密漁船とみられる中国の漁船団が確認された。

日本の排他的経済水域（EEZ）内だったが、日中両国は 1997 年の漁業協定で「北緯 27 度以南」「東シナ海境界線以北」の EEZ では中国漁船の中国漁船の通常の操業を認め、中国国民に日本法を適用しないことを合意している。宝石サンゴの採取は中国法で禁じられ、日本でも自治体の許可が必要にもかかわらず、日本側は取り締まれなかった。今回の調査は 8 月下旬頃から約 1 か月間を予定し、同庁の漁業調査船が、無人潜水探査機で水深数百㍍の海底を撮影。折れるなどしたサンゴがあるかどうかや、漁網による地形の変化などを調べ、研究グループから提供を受けた映像やデータと比較して、被害の範囲や規模の割り出しを目指す。



密漁の形跡が見つかっても、中国船のものと断定するのは難しいが、同庁は海底に残された漁網も調べる。中国当局はこれまでも一部の漁船を摘発しており、今回十分な証拠が得られれば、水産庁は年に 1 度開催される「日中漁業共同委員会」の場で、改めて中国側に取り締まりなどを求める方針。　　（読売新聞.2015 年 7 月 19 日）

西里 勇　にしざと いさむ （ 池間漁協 ）



1933 年(昭和 8 年) 宮古島平良池間島に生まれる。81 歳(2015 年時)。

勇猛果敢な池間の漁師である。18､9 歳(1951,2 年)には尖閣諸島に出漁し、深海一本釣り、曳き縄漁に従事、久場島では不時着機で寝起きしたエピソードなどの話を紹介した。氏のサンゴ漁体験も興味に深い。1959 年森田真弘氏の発見により一大サンゴブームがもたらされるが、氏らは 1952 年にはすでに仲間屋真氏の幸丸でサンゴ漁を試みている。また森田氏が発見するや、その翌年には、氏らは伸光丸で、福太郎丸栄泉丸と一緒にサンゴ漁に乗り出した。ほどなく宮古のカツオ船はサンゴ船に切り替わり、100 隻余が宝山ソネに押しかける。氏らはいち早くサンゴ漁から撤退している。氏はサンゴブーム初動の頃の体験者である。貴重なお話を伺った。

中学卒えたら　翌日には　仲間屋真の船乗る

仲間屋真オジーが、台湾から、2 ﾄﾝ位のちょっと小さい船を、買ってきてあった。第三瑞光丸という船を買ってきて、僕はこの船に、今日は学校卒業して、明日からあの船に乗っておった。して、サメ釣り、一本釣りして、昔はクリ舟にサメの油塗っておった。あれを買っていたから、サメを釣ってきて、肝臓炊いて、脂作って、出しておった。大体サメ釣りは、今の時期(5,6 月)、また冬の時期には深海一本釣りやって、夏には、沖縄に行って、闇商売やっておった。して、あんまり船が小さいから危ないさぁねぇ、あれは 2 ﾄﾝ少ししかない。この小さな船で尖閣列島にも行った。尖閣行ったのは 17,8 歳(1950,51 年)かなぁ。向こう行って、一本釣りしたり、曳き縄したりした。一本釣りはマチとか、タマン類、潮の強い時は、曳き縄して、シマガツオ、マンビキ、サワラとかをよく釣っていた。

終戦直後の池間島の景観、湿原は干拓されて僅か島中央に残る。右上は仲間屋真。(譜久村健提供)

その前は闇商売で、沖縄にカツオ節を運んで売った。30 ｷﾛのあれだよ。ダンボール 20 幾つだったかなぁ、700 斤位しか持たなかった。エンジン場も皆カツオ節入れて、あんなにして密航しておったさぁ。糸満まで、30 時間から 32､3 時間掛かっておった。僕は乗ったら、いつもロープ縛られておった。あの船は海と一緒だったのに、もう船は相当揺れるから、海に落ちないようにして (笑い)。もう子供だから、怖いから行かんと言ったら、仲間屋真オジーが許さんもん。

オジーは僕の母方の祖父だから、僕をかわいがって、どこにでも連れて廻っていた（笑い)。だけど危なかった（笑い)。それに僕は船弱かったから。船酔いして、血まで吐いておった。あぁこれはもうダメだと思った。あとはオジーは、鍬と鎌を買ってきて、お前に

預けんといかんと（笑い）。だけど何航海もしたら、段々船酔いしなくなった。やったら、一応吐くけど、吐いたあとはあんまりきつくない。あの時物入れておったら何もしない。何もきつくなかった、船酔いは治ったよ。

幸丸(11ﾄﾝ)で　コウビトウ・アカオ北側　サンゴ採り

オジーの船は少し大きくなって、幸丸という 11ﾄﾝの船になった。僕が 19 才位の頃（1952 年）だったかなぁ。尖閣列島にサンゴがあるからとサンゴ採りに行った。オジーが船長しておって、長嶺金五郎さんなんかも一緒だった。行ったのは、森田真弘さんがサンゴやる前だから、サンゴブームの 7,8 年前。あの時は、網も、サンゴ採っていた時の網とは違った網だった。オジーが自分で作っていったんじゃないか、あれは、僕も小さいから分らなかったけど。屋真オジーはサンゴ分っていたさぁ。何で分かっていたかは知らん（笑い）。戦前台湾で採っていたか分らん。あれは池間で初代議員しておったから、議員屋真キューと言うていて、このオジーはもうやり手だったよ（笑い)。

大正島沖で一本釣、曳き縄している池間の漁船。
（長嶺巌.2011）

尖閣列島でやったのは、アカオ(大正島)の北東側だったと思う。アカオの向こうに、網入れたら、赤サンゴが掛かっていたよ。1 ｷﾛ位採った時もあった。して、またコウビトウ(久場島)は、いいかも知れないと、向こうに行って、コウビトウの西側だった。そこ下ろしたら、掛かってきたよ（笑い)。ものすごく真っ赤なものが揚がってきた。根っ子はこの位あった。電柱位の大きさのものが揚がってきた。僕達はサンゴはどんなものと分らんからさぁ。あんな大きいものが揚がってくるから、もう大成功だと喜んで（笑い)。よく見たら、サンゴじゃないさぁ、何と言うかねぇ、軟らかいサンゴ、こっちでインジーと言うてねぇ。赤いからアカインジーと言う。あれの大きいものが掛かってきた。これじゃ物にならないからと、外して捨てた。それで魚を釣って帰ってきた。やっぱし、コウビトウから北側に上れば、もう向こうは泥だからねぇ、東シナ海のあっちは泥の海だからどうかなぁ、島の周囲だったら、ないと言えないはず、北側にあるはず。北とか、東面とか、向こうの下がった所にはあるはず。アカオの所も、サンゴはあるかも知れない。本格的にあれやったら、東の絶壁の所はやったら採れるかも知れない。

森田真弘さん　私財擲って　サンゴ船始める

そのあと仲間屋真オジーの長男の勇栄さんがカツオ船を持つさぁ、伸光丸(32 ﾄﾝ　95 馬力)を。僕は伸光丸の機関長しておったから、ずっと捨てるまで、30 で南方に行くまで、や

っていた。伸光丸は、カツオ船やったら、もう宮古で一番ばかりだったよ。あの時は僕も、若くて元気あったさぁ、毎日酒飲んで、勇栄兄貴と喧嘩しておった（笑い)。

森田真弘さんがサンゴ船始めるさぁ。僕が 23,4 位だったかなぁ。琉球政府を辞めて、自分ではサンゴ船やるといって（笑い)。最初は、変な小さい船を、10 ㌧位の船をチャーターしてきて、何丸だったか、忘れた。あれでサンゴ探していた。もうなかなか探せん。あれは何ヵ年も失敗して、もう退職金とか、全部つぎ込んで失くなって、こっちに、池間にも 2､3 週間位おったかなぁ。で、僕も話もよく聞いていたけど、もう相当苦労していたよ。だから勇栄兄貴は相当考えてくれたはず。森田さんのお母さんは屋真オジーの妹、僕の母は姉の子、勇栄兄貴とは皆従兄弟だから、もう心配していたさぁ。森田さんはもう金がないから、金は勇栄兄貴が出してよ。僕は分る、借りてきた船の、チャーターした船の燃料費もない、もう 100 円もないから、かわいそうと言って、あの時に、伸光丸はカツオ船では一番船、もう金あったから、あれが金出して。真弘兄貴はあれだよ、もうダメだといって、チャーター船返そうとしていたんじゃないか、そしたら、那覇地区の一本釣船が、これ何かと持ってきて見せてあるわけさぁ。真弘兄貴は、これがサンゴだ！　これ揚げた宝山の場所を教えてくれと言って（笑い)。

森田真弘さん(左)と仲間勇栄さん

あともう 1 箇所あったけど、あっちは少ないか、分らんと言っていたみたい。この一本釣船は、池間にも何回も入ってきていた。台風避難かなぁ。船の名前は忘れた。

福太郎丸　サンゴ見つけ　1 年あと　伸光丸も

森田さんは自分のチャーター船出してあるさぁ。出して行って、現場見て来て、宝山で、サンゴ採れると分かったわけ。サンゴが完全にあると思ってからが、福太郎買ってあるからねぇ。宝山で採れそうだと分かって、現場見てきて、福太郎丸買ってきた。それで福太郎丸はサンゴ見つけた。あとで、森田さんが勇栄兄貴の伸光丸も出してと言うから、福太郎丸と一緒にサンゴやった。だけど僕らはすぐには行かない。1 ヵ年あと行った。福太郎丸が採って、確実に採れそうだけど、もう冬なったから行けなかったさぁ。行けないでおって、もう来年、春からは、2 隻で行った。

池間港に停泊している漁船。中央が伸光丸、右隣は宝山丸。(「沖縄池間島民俗誌」より)

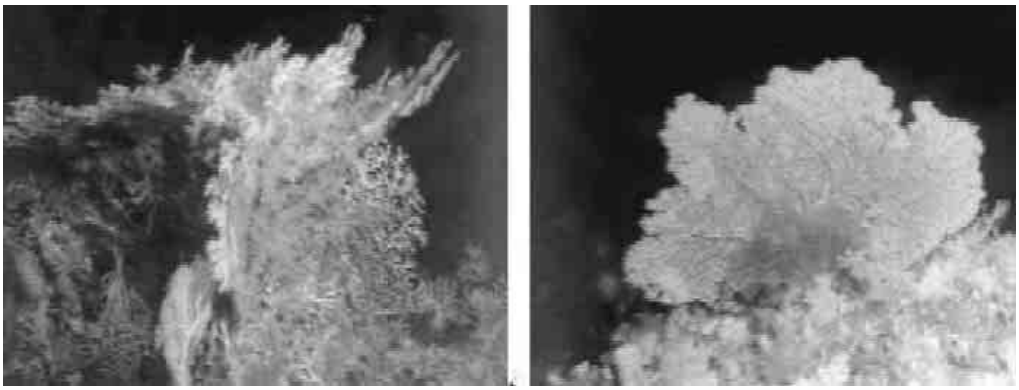
だけど伸光丸は、誰もサンゴ採ったことない。僕は屋真オジーと採ったことはあるけど、あの時は子供だったから。したら、東浜という与那国の人、福太郎丸のもと漁労長しておったはず、あれを伸光丸に連れてきて乗せておったよ。

して、やったら、東浜という僕らの漁労長は上手だった。2隻とも相当採れた。僕らのローラー（巻揚げ機）が壊れなかったら、福太郎より採っておったはず。あの時分はギアローラーさぁねぇ、ずっとだったから。あれが壊れてから、あとは皆車のミッション（変速機)、あれを使えるようになった。して、サンゴはものすごく採れた。だけど。森田真弘兄貴はあれだよ、変な人だった。あれは金を儲けるとか、あんなのに関心あんまりない。お金には何も関係なかった、サンゴ探すのに苦労して、サンゴ見つけたら、うんと儲けようと思うが、欲はあんまりない人だった（笑い)。

2隻目　チャーター船栄泉丸　漁労長　上手だった

福太郎は台風ですぐやられた？　宮古島台風で、そのあと、代船購うてきて、それでやったいたはず、よく憶えてない。とにかく福太郎丸は、ある程度採っていたよ。船長は中平兼太郎というオジーだった。このオジーがずっと船長して持っていた。

森田兄貴の 2 隻目のサンゴ船は栄泉丸と言ったかなぁ？　あれは買わんで、内地からチャーターして持ってきたと思ったけど、分らん。あの栄泉丸は上等な船だった。本土の人が漁労長で来ていたよ。カワグチとか言って、若かったけど、すごい人だった。この人はうまかった。上手だった。僕ら伸光丸がサンゴ採っていた後からが来たけど、やっぱり上手だったから、一番いっぱい採ってあった。また、サンゴの質もよく知っておった。赤サンゴとか、桃、スカッチとか、ボケサンゴが、あの透明なきれいなのが、一番高いとか、僕らの場合は、あのボケは百貫に 200､300 ｸﾞﾗﾑしか採れない、もう一番上等なものさぁ。だけど、この栄泉丸の漁労長、もうこの人は酒を手から離さなかった。もう酒ジョーグー（上戸）で（笑い)。大きくして、いい身体していたから。



海底でのサンゴの形状。左：1ﾒｰﾀｰ高さの岩に生えている赤サンゴ、歪な形で、潮流の複雑さがよく分かる。右：桃サンゴ、これが一般的な形状である。　（「奄美群島漁場調査報告」より）

最初ピンクル　2回目後から　貫木　ものすごく採れた

僕らが行ったのは昭和35年だ。僕らは最初行って、採って来てから、別の船は皆ガーと行ってからがサンゴブームさぁ。その前に行ったから。あの時は尖閣には行かん。ここ宝山ソネで発見して、こっちだよというから、そこだけ行った。

サンゴはメチャクチャ揚がったよ。だから、もういじって、恰好の悪いものは、海に捨てて、また、木のハンマー叩いて割ってみたりして、あんなして遊んでおった（笑い)。

もうこれ金になるかなぁと思わん位採れた。もう大変だったよ。して、網入れてやったら、最初は上ばっかり、サンゴの枝だけが、掛かって揚がってきた。これはピンクルと言って、この鉛筆の大きさ位のサンゴ、これは金にならん。だけど 2 回目からは、貫木ばかりが採れる。1 貫(3.736 ㌔)以上の木が揚がってくるから。最初のピンクルの時に、たまには貫木が揚がってくるのもあった。やっぱし1回目曳いて、2回目3回目からがよかった。

もう後からは、全部貫木さぁ、1貫以上のものが何10本も揚がってきた。伸光丸のブリッヂに入らん位、大きなものもあった。桃サンゴだったけど、中には、きれいなスカッチの、このパイプの大きさ位のもあった。この長さ位のが、何本も揚がってきた。

ピンクル　海に捨てる　あとで袋入れて　加工材料に

あの時は、宝山は誰も行ってなかった。僕らが最初だったから、もうメチャクチャに採れた。1貫以上の木なんかは何10本と揚げておった。もうあんまりいっぱい巻揚げて　ローラー壊して帰って来た時もあった。網揚げて、サンゴ掛かっている。これ簡単には外せないから、ハンマーで叩いて落として、もう残った大きいものだけ採った。こんな小さいもの、ピンクル（サンゴ屑、破片)なんかは、捨てておった。金にならんからと、スコップで、海に捨てておった。木のハンマーで、叩いて、割って、網からサンゴ外すさぁ。

叩いて、割るから、デッキの上はいっぱい散らばっている。足が痛くて、歩けんさぁ。あの時足袋なんか履いてないから。仕事の邪魔だし、親父に怒られるから。もう溜まり次第、スコップで、どんどん海に捨てておった（笑い)。海に捨てて、そのあと網入れると、あのピンクルがまた網に掛かったりして(笑い)。

今考えると、ほんと馬鹿なことをした。ピンクルは高く売れるさぁ、それを取っておけば、金持ちになっていたけど(笑い)。もうあの時はこんな考えは何もない、僕ら漁師の頭には何もなかったよ（笑い)。

で、ピンクルは海に捨てておったら、勇栄兄貴の弟の進さん、あれがサンゴ細工を習ってきて、三洋宝石という会社建ててから、もう捨てるな、自分がもらうからとい

網外す時に叩いて割れて出るサンゴ屑、デッキいっぱいピンクル出るから、スコップで海に捨てておった。

って、あれから袋に入れることになった。そしたら、下っ端連中は、もう怒ってから、今までスコップで海に捨てておったら、楽さぁねぇ。あれをいちいち袋に入れて、4 斗袋か、6 斗袋に入れて、上げんといかん（笑い）。

あの時、サンゴ相当採れたから、大体、1 航海に、ピンクルは 6 斗袋 2 つか 3 つ位は持ってきて上げていた。三洋宝石は、僕ら捨てていたピンクルもらって、原価ないで商売始まったわけだから、相当儲けたはずよ（笑い)。

採れたサンゴ　8,9 割 桃　残り 1 割　スカッチ・ボケ・赤

宝山で採れたサンゴは、全部が桃、たまにはスカッチも入っていたけど、8 割 9 割は桃、1 割はスカッチとか、赤とか、それと一番高いボケサンゴ、あれも掛かった。あれは 100 貫採って、1 ｷﾛあるかなぁ、とても少ない。あのボケは、栄泉丸が一番採っておった。

僕らは知らんからあまり採らなかった。ボケは桃の値段の大体 8 倍位しておった。ボケは白っぽくて、透明で、きれいだった。今赤サンゴ高いさぁ、あの時はあれ安かった、あれをばサンゴとしない。あまり売れんから、投げて捨てておったよ。それに赤は小さいものしかない、桃みたいに大きいものは揚がってこなかった。

赤サンゴ

桃サンゴ

ボケサンゴ

僕らあの時は大変だった。サンゴ網はモズク網みたいな感じで、ただまとめておいて、ただ長くなしている。で、石に全部リング付けて、石 1 つには大体 4 つから 5 つ位網を付けている。で、サンゴ掛かると、ローラー（巻き揚げ機）で揚げるさぁ。あれは 1 回にローラーが弱かったら、網 2 つ位しかやらんさぁ。3 つ 4 つ網揚げたら、揚がらないさぁ。ローラーが壊れる。一度はサンゴいっぱい掛かったんもんだから、どんどん揚げてやったら、壊れた。もうあの時大変だった。どうにもならないからすぐ港に帰ってきた。

あとで、車のミッション（変速器機）使ってからは、網 4 つ位は 1 回に揚げていたけどねぇ。とにかくあの時分は、サンゴは相当採れたよ（笑い)。

尖閣　海サボテン？　多く掛かる　宝山 少ない

(右下の写真を指して)　これきれいだ。これ、こっちではフーインジーと言うけど、ちゃんとした名前は知らん。身を剥いて芯は黒だよ。これは真っ黒になる。これサンゴと一緒に掛かってくる。宝山で網入れると、このフーインジーとか、海サボテン、海マーチ(松)とか、あんなのも掛かかってくる。サンゴと同じ 100 ﾒｰﾀｰから 200 ﾒｰﾀｰ深さにあるから。

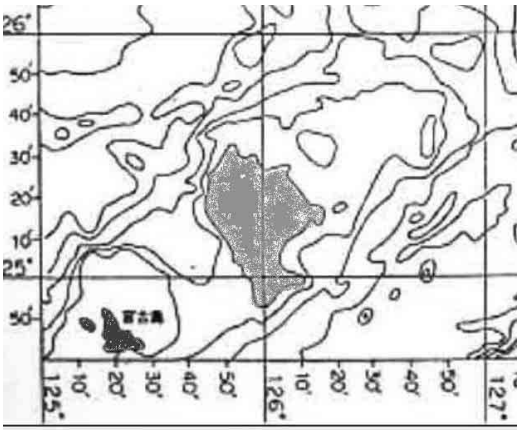
深海 100～200 ﾒｰﾀｰに生えているフーインジー。
海サボテンの１種か？　サンゴ網に掛かってくる。

だけど宝山は、サンゴも多いから、こんなものは少ない。気にならない位の量さぁ。別の場所行ったら多く掛かってくる所もある。尖閣列島は海サボテンはすごい。あっちは危ないよ。アカオの北側だったかなぁ。あそこでやった時、赤サンゴは少し採れたが、この海サボテンもいっぱい掛かってきて、邪魔だったよ。また、コウビトウの西でやったら、アカインジーと言うけど、根っ子はこの位あった。もう電柱位の太さよ。これが赤サンゴみたいにして揚がってきた（笑い)。驚いたさぁ、だけどあれ物にならないから捨ててきた。これも同じさぁ、このフーインジーは、皮を剥いだら真っ黒して、きれいだから、床によく飾られている。これはまた蝋とか、線香とかやって、形はきれいに自分らで作れる。焼いて、少し暖めたら、ぐっと曲がるから、自分で、あんなにやってきれいな形できる。あのアカインジーはできない。あれは１週間なったら失くなるよ。軟らかいから、ボロボロになって崩れる。

重宝ソネ　ものすごく、サンゴ採れた

（海図を指しながら）こっちは宝山、これ東大九、こっちは西大九ねぇ、宝山は相当広いよ。宮古の 4､5 倍の広さあるかなぁ。

こっちとこっちでやって、で、宝山の一番東側の、この重宝の所、ここでもサンゴ採ったよ。この海図でみたらあんまり引っ込んでないけど、この引っ込んだ側のここに、離れたリーフある。ここだ。重宝のこの引っ込みがサンゴヤー(家)だった。浅瀬はこっちにある。ここに沖縄の行く線から東に行って、これから絶壁して、ここは深いさぁ。ここに、こういう感じの瀬がある。



宝山ソネは宮古島数倍の面積、西側重宝でもよく採った

ここは皆サンゴよ。（地図を描いて示しながら）こんな感じになっているさぁ。ここにもあった。サンゴはこんなにあった。もう全部サンゴだったから、メチャクチャに揚がった。

また重宝のソネからここは傾斜している。この所にもサンゴはあったけど、そこは死にサンゴが多かった。虫サンゴ、枯サンゴと言うさぁ。あれはものすごく大きい。もう幹の太さが大きいのが多いさぁ。それに魚がものすごかった。そこ行ったら、サンゴ網下ろして、また魚を釣っていた（笑い）。ここの深さは220㍍位あったんじゃないかなぁ。10キロ20キロのアーラ(ハタ類)とか、またでっかいマチが釣れた。こっちでメンタイと言うけど、アカマチ(ハマダイ)とか、シチューマチ(アオダイ)とか、あんなのをいっぱい釣っていたから、福太郎丸に釣った魚をくれていた。美味しい魚食べられるからと喜んでいた。

だから、栄泉丸が来たら、僕ら栄泉にも、魚釣って上げておったよ。

サンゴ生える石　白っぽくザラザラ　あとで黒くなる？

（サンゴは火山脈がある所に多いのでは？との質問に対して）サンゴが生えている石、焼け石みたいに黒っぽい。黒いけど、皆が皆黒くない。白いのもある。あれは火山の焼け石ではないはず。サンゴは火山が通っている所に多いか、どうかは知らん。あの黒っぽい石は、あれは元々は黒くない。下の方は、ザラザラして、軟らかいさぁ。普通のこの辺にある石グー（軟質の隆起サンゴ礁）みたい。置いておったら、色が少し濃くなってくる。だから、サンゴが生えたら、あんなに黒くなったはず。あれはどんなになっているか、分らん。採る時は、そのままピタッと採れる時もあるし、引っ付いている所から少し残して採れる時もある。サンゴが生えている所は、根っ子がサンゴになって全部張っているでしょう。あれをやったら、すぐこのままで、下の根っ子ごと全部ポンと採れる時がある。

サンゴ生えているこの石は黒っぽくない。薄褐色堆積岩？

岩だったら、それができない。石グーみたいな軟らかいかったらできる。

今言ったように、火山脈が通っている所に、サンゴがあって採れるとしたら、あの宝山、重宝にも、あとからは大九にも行った。行ったら、いっぱい採れた。採れたわけだから、あそこのソネの下には、火山脈があるのかなぁ。

サンゴ　軟らかく　弾力ある　揚げたら硬化

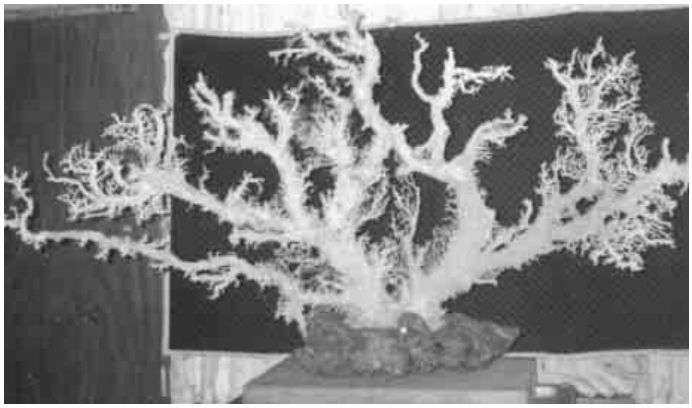
サンゴはあれだよ。海から揚がって、すぐしたら、何か分らん、枝掴まえてポンと折れる。だけど置いておったら硬くなるさぁ、あれは。1時間あったら、もう硬くなるよ。あと

は折れない、強いよ、それに海から揚げた時期、ヌルヌルした外が皮付いている。この辺の浅い所にあるサンゴと一緒さぁ。あれも皆ヌルヌルしているよ。触ったらベタベタしておるさぁ。僕らの場合、網揚げて、木のハンマーで叩いて落として、サンゴを網から外していくさぁ、あの時、手袋なんかしてない、もう素手。手袋やる位の、あんな金はなかった。だから採って、手で掴んだら、ヌルヌルして、軟らかくもあったわけ。弾力性もあるから、落ちていかないじゃないかなぁ、もう、枝でも箸の大きさ位のものだったら、もう引っ掛かって、全然落ちない時もあるからねぇ、あれ強い、して、軟らかい。だけど置いておったら硬くなるさぁ、1時間あったら、もう硬くなる。あとはあんまり折れない、相当強いよ。

（サンゴの写真を指して、右下に掲載）これは見事な桃サンゴだ。枝ぶりもきれい。

海の底に生えている形で揚がってきている。あんまり枝も折れてない、きれいさぁ。

宮古の海で採ったというが誰が採ったのかなぁ。僕ら採った時もこんな形で揚がってくることあった。片一方の枝にだけ網が引っ掛かれば、落ちていかないから、そのまま揚げることできるさぁ。片方の 1 つで揚げれば、網は他の枝には触らん。触らんから、枝も折れんよ。地面に生えている形、そのままの形で、きれいに揚ってくる。



沖縄近海で採取したサンゴ。見事な枝振りの貫木が沢山揚がった。

球サンゴ椿事　バレーボール大　割って　中身は？

サンゴは、大きいものもあれば、またきれいな曲がったもの、また変な形のものもある。おかしいよ。一度は、枝も何もない、形はもう球、真ん丸くして、バレーボール位の大きさで、ただ真ん中位からポッンと茎が 1 つ、箸位の小さい茎が 1 つ出ているわけよ。これの下の方に根っ子があったはず。これは折れてないさぁ。この茎に網が引っ掛かって落ちないで、揚がってきたわけよ。持ったら、相当重い、重いから、この茎では球は持てないよ。だから、ボールみたいに転がったままで、このサンゴの球は大きくなったんじやないか。で、網に掛かってきたよ。揚げて見たら、これおかしい。丸いサンゴ球前にして、これいったい何かなぁ（笑い)。この芯の中に、何かあるはずだ。石をただ包んでいる、いやそうじやないと言ったりして、最後はもう割ってみないと分らんとなったわけよ（笑い)。

もう重いから、アンカーの後ろの棒つつく所がある、置いておって割ったよ。硬いから

簡単に割れんわけ。大きなハンマーで割ったみたら、真ん中には、大体1ｾﾝﾁの石じゃない、土と一緒に、軟らかい、土を粉にしたみたいな砂、汚れはなかった、これだけしかない。残りは皆これ包んでいるサンゴだった（笑い）。

そしたら森田真弘さんが来たよ、何しているかと。こういうのが揚がってきたから割ってみたら、皆サンゴだったと言ったら、お前、あんなの割るバカがおるかぁ（笑い）。

何で、分からんで、これ中がどうなっているか見ようと思って割った（笑い）。採ってきたサンゴ全部と、この丸サンゴと比べたら、こっちが値段高かったのに、何でこんなことやるか、このバカタレと叱られたよ（笑い）。割ったサンゴ、あれどこ置いたかと言うから、あれは金にならない、ピンクルに入れて捨てていたさぁ。

真弘兄貴は、拾ってきて、コケシの顔作ろうと言うて持って帰った。あの割ったサンゴで作ったはずよ。片一方しか割らんから、残りの大きい所でやったはず。

あれだよ。コケシの顔作って、これに合うような胴体は、大きい死にサンゴ、枯れサンゴ使う。あれは大きいものが揚がってくるから。

死にサンゴ　ものすごくでかい　20､30ｾﾝﾁ　貫木も

死にサンゴ、あれ虫食いサンゴといって、もう虫ばかり入っているみたいな感じ。木が虫にやられているみたいにして、死んでいるもの全部入っている。見たらすぐ分かる。筋がこうやって入っている。あれは虫にも色々あるから、長らくなったのは使いものならないのもあるけど、大方は使えるのが多い。外だけ虫入って、芯は上等のものもある。あれは大きいものだと、相当大きい奴があるから。

倒壊している死にサンゴ（虫食いサンゴ）。老衰したのか？電柱状の太いのもある。（「奄美群島漁場調査報告」より）

あれもあんまり大きくなって死んでいる。サンゴの老衰みたいなもの。だから、ものすごく大きい貫木よ。幹の太さがこんな大きい。電信柱みたいに大きい。20,30ｾﾝﾁもあった。この位大きくあって、先が死んで、根っ子がやっぱり死んでいるから、少し掛かるところがあれば、掛かって揚がってくるさぁ。

僕らは採ってはいたよ。あんなのを採って捨てたりしておったけど。で、この死にサンゴは、サンゴ加工する人なんか上手だった。あんなの上手いやり方しておった。ちゃんといいサンゴ削って、粉にして、虫に食われた穴に入れて、ピタッとしたら、もう生きたサンゴみたいな感じして、売っていたさぁ。あんなして売っているのがいっぱいあったよ（笑い）。

馬車で　家に運ぶ　子供達に折って　上げていた

あの時に、世の中をよく分る人は、サンゴで儲かってあるさぁ（笑い）。僕らは、こんなに採れるから金になるわけないと言う位考えていたから。

ピンクルも、あれだよ、あれは今は高いさぁ、あの時はデッキにいっぱい捨てて、硬いから、スコップで取って、海に捨てておった。あとで袋に入れて持ってきた。子供はもらえと言っても、もらわなかった（笑い）。浜に捨てられているあのサンゴ（浅瀬のサンゴ）とみたいに考えていたんじゃないか。して、網入れたら、サンゴ掛かるさぁ、1貫の木なんかは、もう掛かったらねぇ、ひと網に 2,3 本掛かってあるから、あれを何 10 本と揚げたら、もうダンブルのもういっぱい、入りきらん。こんなに採れるさぁ。考えてもおかしい。あんなの金になるわけはないと思っていたから、僕はいい考えなかった。

車のない時代。港から家までサンゴ運搬は馬車を利用した。

だから勇栄兄貴が、1 貫以上の木は、記念として、責任者に上げると決めてあったけど。もう金にもならないから、自分の分はもらいもしない、取りにもいかなかった。あれ誰かがもらって売って食ったか知れん。誰が食ったかなぁ（笑い）。

伸光丸は池間に帰ってきたら、採ったサンゴ、あれをダンブルから出して、家の倉庫に入れておったから、勇栄兄貴の家の中に入れておった。あの時は港から家までは、荷馬車で運んでいたさぁ。あれにいっぱい積めない、幾つも枝がこうあるから。もう何回も運んでいたねぇ。そしたら、僕らが運んでいる馬車を見て、子供達がワァワァして集まる。

サンゴきれいさぁ、サンゴ指して、これ欲しいからくれ、くれと言うよ、言ったら、はいよと言って、枝折って、ポンと投げて上げておった（笑い）。

あの時は何とも思わなかった。子供達がほしいと言えば、すぐ折って上げたよ。

あんなことしたのは僕 1 人じゃない、皆サンゴを上げておったから（笑い）。

1 航海で　2000ﾄﾞﾙもらって　家造った

サンゴは段々儲かると分かるさぁ。そしたら、もう皆サンゴブームになる。あの時は池間はビールで手足洗っておった（笑い）。もう大変だった。金はあの時は恐ろしい位だったからねぇ。もうあの時メッチクチャだった。僕はサンゴブームの前に、サンゴ船辞めているから、あんまり儲けていないさぁ（笑い）。

だけど、僕は 1 昼夜の金で、自分の家を造ったよ（笑い）。僕は家内が病気で船主に 400 ﾄﾞﾙ位負債があった。で、サンゴを採ってねぇ、それで借金払って、今の家もそのまま造った。1 昼夜分の収入で造った。僕は責任者だったから 1 人半取っていた。あの時は 2 千ﾄﾞﾙ

位、現金でもらったはずよ。僕の家は現金で造ったもん。

すぐ、あの今日行って、朝よ、出港して、行って、採って、午後2時頃だったかなぁ。帰って来たのは。勇栄兄貴が、サンゴ採れたなら、普通は池間港だが、この時は平良港に入れと言うから、入ったよ。

1航海で2000ドルもらい、サンゴの儲けで造った我が家。赤瓦家の快適な住まいで、45年余経ても今尚現役で活躍。

銀行と相談して、銀行の倉庫に入れんといかんから、その時間に入って来いと言うから、銀行の倉庫に入れた。そしたら3日か4日位には、勇栄兄貴の家で、皆に配当して、現金を渡してあった。あの時風呂敷に包んで、持ってきていたから。採ってきたサンゴを、銀行預けて、銀行から金借りていたんじゃないかなぁ。あんな大金が兄貴にあるわけないし。僕は2千ﾄﾞﾙ余る金を、現金をもらった。それで借金も返して、自分の今の家も造った。サンゴで儲けて造った家はいっぱいあるよ。池間には（笑い）。

1貫25ﾄﾞﾙに下がる　カツオ船に転向　サンゴブーム前に

伸光丸の場合は、最初の時期にやったから、サンゴブームで皆が出るまでは採っておったから、もうデタラメに儲かったさぁ。あの時1貫何100ﾄﾞﾙだったかなぁ、もう忘れたが、あの時相当儲かったょ。サンゴやっていたのは、森田真弘さんのエイシン丸と勇栄兄貴の伸光丸の 2 隻だったんじゃないか、もっとやっていたかなぁ、やっていたとしても3,4隻位。サンゴ採れると分かったもんだから 3,40 隻にも増えた。4,50 隻はいたかも知れん。相場も下がって 1 貫25ﾄﾞﾙになった。これから上には上がらん、1航海に人間10名乗っていたら、あれだけの船だょ。皆にサンゴくれているから、皆が持っているから、値段は長らくそのまま。サンゴいっぱい採っても、1貫25ﾄﾞﾙしかない。それに売れるかどうか分からん位になっていった。皆がカツオ釣るというから、僕らはサンゴ辞めてカツオ釣った。

2人が手にしているのは採ってきたばかりの桃サンゴか。
（「沖縄池間島民俗誌」より）

辞めたあとからが、サンゴ船はいっぱいになっている。もう皆サンゴやると言って、カツオ船もサンゴやって、船も80隻も、90隻も増えたさぁ。サンゴは危ないよ、中には、儲けた人とも、損した人ともいるはずだけど。

僕はそのあと 2,3 年したら、カツオ船で南方に行った。ボルネオ、スマトラ、ソロモンに行った。南方に 10 年余りもいたが、僕が行った 4, 5 年あと位かなぁ、サンゴはもうダメになっていた。サンゴやって失敗した人も相当いたよ。ほんとあれは危ない仕事だ。

僕はあの時、サンゴ辞めて、カツオ獲ってよかったと思っている。

（了）

サンゴブームの頃は那覇泊港は多くのサンゴ船で賑わった。
帰港してもロープ、網の手入れに大忙し。（豊島貞夫.1960）

聞き取り余滴

石垣 真次郎　いしがきしんじろう（那覇地区漁協）

真喜兄さん　生徳丸２号で　サンゴ掛けた

私は25歳(1960年)に八重山からこっちに来た。当時那覇地区はマチ船がいっぱいだった。ここで最初に乗った船が生徳丸ですよ。１号、２号、３号、５号と４隻あったわけよ。

私は生徳丸１号に乗った。１号は次男の國吉勇さんが持っていた。三男の真喜さんが生徳２号持っていた。私は見なかったけど、別の人の話では、真喜兄さんが生徳２号から一本釣りにサンゴが掛かったみたい。あの当時は一本釣はヤマギタだったさぁ。宝山で、あのヤマギタにサンゴが掛かった。真喜兄さんがそれをサンゴ屋に教えてあるさぁ、あれ達は見たら、こっちに沢山ある、ないは分かるんじゃない。真喜兄さんは人がいいから、すぐ見せてあるさぁ。もし採った何割かは私に頂戴とか、契約やってから海教えればよかったのに、何も契約してないさぁ。ただ簡単に教えて。サンゴ船やっている人は専門さぁ、このサンゴ見てから相当あるなぁと思って、あそこからサンゴ採ってあるよ。あれからがサンゴブームなっている。宝山で相当揚がたみたいよ。相当サンゴで儲けたという話だった。儲けても最初に発見した真喜兄さんには何もないさぁ、あとではもう採り尽くしているから（笑い)。

那覇地区漁協の一本釣船・生徳丸２号と國吉真喜船長

たまに　桃サンゴ　底延縄に　引っ掛かる

そうねぇ、自分なんか一本釣の時は、サンゴ掛けたことはない。協徳丸で底延縄やっている時、あの時は30（1966年）頃にやったから、あの時は幾らかは揚げた。桃サンゴよ。

延縄やっている時は、尖閣でサンゴ揚げたことない、宝山では揚げた。サンゴは浮き延縄(底立延縄)には掛からんよ。あれは底から浮かして流してあるから。底延縄にが掛かる。

掛かるといってもたまによ。そんなに掛からん。あんまり大きくない枝が掛かってくる。１遍は大きいのも掛かってきた。掛かったら、それを集めておって、平和通り(那覇市商店街）に、私は売りに行ったことがある。高くで売れたよ（笑い)。売れたと言っても煙草代位よ。あの当時はサンゴは人気あったさぁ。今はどうか分からんけど。　　（了)

外間 安健　ほかま あんけん　　（ 那覇地区漁協 ）

1935 年(昭和 10 年) 那覇市垣花に生まれる。80 歳(2015 年時)。

16 歳から漁師になり、サバニで慶良間近海で石巻落し漁を操業、のち深海一本釣りに替える。1958,9 年、23,4 歳で永昌丸(15 ﾄﾝ)、40 歳で兆福丸(5 ﾄﾝ)を建造し、深海一本釣を専業、尖閣諸島にも出漁する。

宝山ソネでたまたまサンゴを掛ける。これがきっかけでサンゴブームの 1960 年代初めに 3 ヵ年間サンゴ漁に手を染める。サンゴ船は宮古・与那国島の漁師が主だった。那覇地区の一本釣がサンゴ漁したのは異色である。氏に当時の話を伺った。

叔父 金出して　3 ヵ年 夏だけ　サンゴ船

―　前回は、尖閣諸島での一本釣の話をいろいろ聞かせてもらい有難うございました。

サンゴブームの頃に、一本釣船で、サンゴ採りもやったと聞きましたが。

外間：サンゴ船もやりましたよ。1962,3 年頃だから 27,8 歳かなぁ、2､3 ヵ年はやった。

僕が一本釣にサンゴ掛けてきた、サンゴがちょっと揚がったからから、サンゴ組合に報告したわけさぁ。これ見て、僕の叔父さんが勿体ないからとサンゴしょうということになって、一本釣を休憩してやったわけ。僕は経営者じゃない。母の弟が川上喜コウといって琉球警備社の社長だった、亡くなったけど。この叔父さんが金出して、僕は船出して、15ﾄﾝの永昌丸をサンゴ船にして仕事やった。サンゴ船は許可もらわんとできなかった。それで許可もらってやった。主に宝山でやった。尖閣は行かなかった。あとシナ海があるさぁ、アコウの北側、大陸棚の上の方にも行って少しやった。

サンゴ船の船長は自分でやって、漁労長を雇って、石垣さんという与那国の人を。

あの時は船員は 8 名か 9 名位いたはず。サンゴ船するといっても、あれは夏だけよ。冬は一本釣で行きよった。サンゴ船は夏しかできない、冬はできない。あの天気ヌワッサレー（悪ければ)仕事はならん。これ潮サーニ、サンゴ掛けるから、風と潮と当らんネー、サンゴは掛からん。潮にもたれないとサンゴは掛からない。そういう関係で夏だけやっていた。冬なったら切り上げして一本釣に行きよった。

宝山ソネで　ブイ目当てに　網入れる

―　サンゴ漁は、尖閣に行かないで、主に宝山に行ったわけですねぇ。

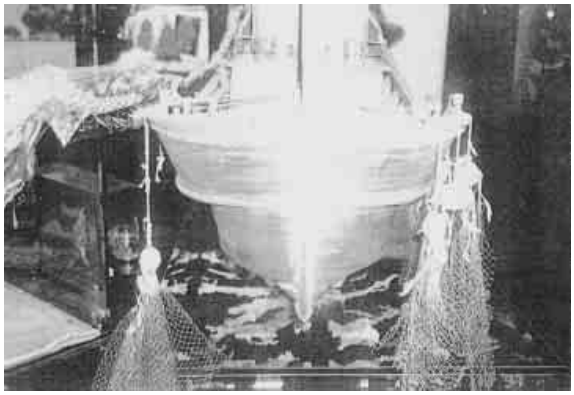
外間：そう、宝山に行った。あの当時ＧＰＳはない、ローラン持っている人もいるし、少なかったよ。大体判断で行きよったさぁ、永昌丸の場合ローランはなかったけど、コンパスで方向して行きよった。あっち行ったら、サンゴ船が 4,50 隻はいつでも塊まっているさぁ。そこに入れなかったら、宝山ソネは広い、西も東もある。前の場合は西の方で掛かったから、今度は東やろうと、東に行きよった。サンゴ船がいっぱいおるからもう皆で簡単に漁場は探すさぁ、そこでサンゴ揚がったらブイ受けてあるよ。サンゴ掛けた人が必ず

そこにブイ入れるようにしていた。ドラム缶 2 つくびってライトを点けて、沈まんようにして、アンカー入れてねぇ。僕達はあんまり経験ないから、このブイ入れたことがなかった。専門的な人が入れよったねぇ。皆このブイを目当てにしよった。ブイがなければ仕事できないさぁ、これを目当てにサンゴ網入れよった。

サンゴ網　１人で１本　船員 8,9 名 乗る

―　サンゴ網は１人で幾つ入れましたか、船員は何人乗ってましたか？

外間：永昌丸の時は８名乗っていて、網は８本入れる。１本に１人ずつ、石はまた１人ずつしか入れきれなかったさぁ、網は１人で１つしか入れきれん、2 つ３つは入れきれない。それで 8 人が必要だった。入れる時には一緒に入れて、揚げる時は一緒に揚げんと採れないわけよ。あれは潮にもたれさせていて、エンジンは止めて、で、掛かったら、ゴーシタン(バック)して起こすわけ。オモリの石入れているから、ロープ掴まえたら、掛かっている、掛かっていない、分かるから。掛かったら、どうなっていると、サンゴか、何か、岩に掛かっているさぁ、ゴーシタンして起こさんとならんわけ、そうして起こしよった。僕は一本釣しかしてないさぁ。サンゴ船の場合は漁労長を頼むわけよ。専門の人が乗っていて、やり方があるから、この人が指導して網入れよった。



船の両舷に吊るしたサンゴ網。オモリの丸石に網は括られている。永昌丸は８名乗って１人１本網入れた。

サンゴ船の経験はこの人達がもう、やり方があるから、あんなしてやっていた。もう大体潮の流れで、時間見て、時間たったら揚げて、また同じ所に入れて、しょっちゅう入れたり揚げたり、入れたり揚げたりしていた。また網揚げると、サンゴの他に色んなのが掛かるさぁ、これを木のハンマーで叩いて、網から外していた。網きれいに捌かんとサンゴ掛からんからよ。草とかが掛かったら、草捌いて、網から外して、サンゴ掛かるようにしよった。

専門家　草見て　サンゴあるない　分かる

―　サンゴ網に草とかも一緒に揚がってきたわけですねぇ。船の残骸とか、色んなものが引っ掛かってくることはありましたか？

外間：色んなものと言っても、海にあるのしか掛かってこないさぁ（笑い）。船の残骸とか変わった物ってないよ。草からあのウミサボテン、もうあのサボテンはサンゴある所に同じ底にあるから、白くてこれ位のがある、このサボテンがよう掛かりよった。

専門の人は揚がった草を見て大体サンゴはある、ないは分かりよったよ。海の草があるさぁ、これ見て、こっちはサンゴがある、ないと分かりよった。僕達はそういう経験ない

けど、大体うすうすはもう網入れて、イフーナ草グワー(異様な草)が生えていたよ。普通の所にはこういう草はない。そうねぇ、銀色の小さな草だが、銀色でブッププツして、丁度マースケー(ウニ)ように、星のように小さいものが草にミートータン(生えていた)。

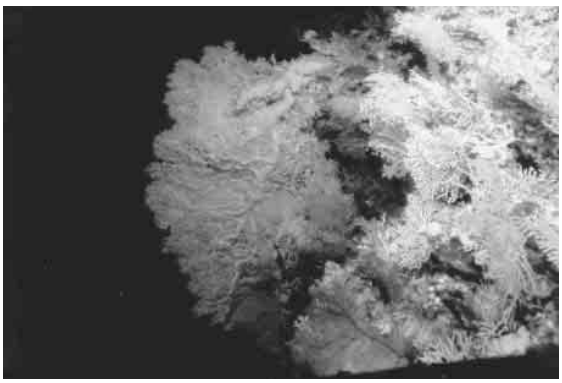
この草見て、専門の人は分かりよった。網曳いて、この辺はサンゴある、ないと、大体分かっていたねぇ、これ経験さぁ。あの時分、内地の人が沖縄に来て、漁労長していた。専門だから分かりよった。内地で相当サンゴを採って、なくなってから、沖縄のサンゴ見に来て、沖縄のサンゴ船に乗っていたさぁ。あの森田サンゴといって、あの人が沖縄の中心だったわけ、内地から漁労長連れてきて、宝山がサンゴあると、この人があれして、仕事して、それであの人達は相当サンゴ揚げていたよ。

サンゴ　竹山と同じ　最初採れて　あと難しい

―　採れたサンゴは、桃が多かったと聞きましたが、赤サンゴはどうでしたか？

外間：沖縄は殆んど桃サンゴよ、桃サンゴしか密集しないさぁ、赤サンゴ、そういうのは密集しないよ。桃サンゴは塊まっているけど、別のサンゴは塊まっていない。これ採りながら分かる。沖縄にサンゴは桃しか揚がらんのに、赤は、小さい赤、こういうのはピチピチの小さいものがあったけど、赤フージ(赤っぽい)のは仕事にならん位よ。このサンゴは密集しないさぁ、赤、紅サンゴというものは、ブッブツあるんじゃないかねぇ。桃サンゴは竹山みたいに密集しているさぁ。

サンゴというものは、全部採ろうとしたら、これ簡単に採りきれん。簡単に網に引っ掛からない、非常に採りにくいさぁ、最初はパッと引っ掛かって 1 度に採れるさぁ。そのあとが難しい。丁度竹山があるさぁ、引いたらすぐ採れるさぁ、採れたあとは、アマクマ(あちこち)に残るさぁ、そのあとが採りにくいさぁ、サンゴというのは、そういう形なっている。アマクマにしか残ってないから、簡単には掛かってこない、それ採るのは難しいということよ（笑い)。まとまってある時には簡単に採れる、最初 1,2 回は相当掛かる。それを採ってから、3,4 回目からはあんまり採りにくくなっていた。



崖の頂上付近に横向きに生えている桃サンゴ。竹山のように群生しているのか。(「奄美群島漁場調査報告」より)

水深？　大体 200 ﾒｰﾀｰ位、そうねぇ、深い所は 280 ﾒｰﾀｰ、大体 200 ﾒｰﾀｰ位かなぁ。宝山は大体 170 ﾒｰﾀｰから、浅い所では 150 ﾒｰﾀｰ位にあったみたいだねぇ。

サンゴがあるか、ないかは魚探では絶対分からん。魚探で見えない、何も見えない。これはここで掛けたサンゴが揚がらん限りは、そこ行っても意味はないよ。また揚がったからといっても、この辺は時の運なって、そこで掛かる人は掛かるし、掛からん人は掛から

んよ。サンゴは見えないさぁ、だから難しい技よ。

地形でも分からん。海の山は幾つもあるのに、幾つもある山にサンゴある、ないは分からん、行って網引いてみないと分からんさぁ、簡単にはないよ。石油と同じ、石油も簡単な所にはないさぁ、サンゴは石油と同じだよ。

サンゴと一緒に　揚がる石　真っ黒　焼石

―　サンゴある所は、魚探でも、地形でも分からないなら、何で分かりますか？

外間：網揚げたら、サンゴと一緒に、石が揚がることあるさぁ、この石見たら、マックールソーン(真っ黒くしている)。もう焼けた石よ。サンゴは、たまにだけど、こんな焼石しか揚がらんさぁ。網に掛からん。サンゴある所には焼けたような石がある。

だから簡単な所にサンゴないさぁ。これ見たら、サンゴというのは簡単な所ないと分かる。普通の所の石は白よ、何もないさぁ、裏は泥しか付いていない。サンゴある所の石は、焼けて真っ黒くしている。その位の熱があるんじゃないかねぇ。火山脈が近くにあるはず。僕は,3ヵ年やって、サンゴ掛かる所のは、こういうマックール石しか揚がらなかったから。

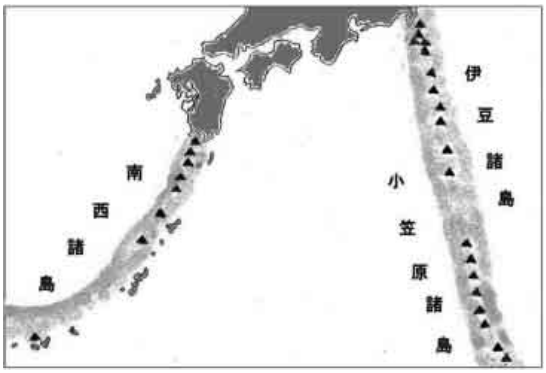
別の所で網曳いていても、揚がった石見たらすぐ分かる、こう焼けた石がなければ、あぁこっちにはサンゴはないと、あれば、こっちにはサンゴあると分かりよった。

サンゴ　火山脈の所が　大体ある

―　焼石があるということは、サンゴは火山脈の近くにあるということですか？

外間：そういうことよ。サンゴはマーンマーン(どこにも、どこにも)ないよ。近くに火山脈がちょっとでもあったらこの辺に必ずあるわけよ。小さいものがあったら、この辺に必ずサンゴがあることになっているわけ。

まぁ、沖縄である所は、1,箇所、2箇所，3箇所か、宝山からこっちに来るまで3箇所しかなかった。宝山もサンゴがある所は焼けている石よ。近くを火山脈が通っているから、盛り上がって山なって、そこにサンゴ相当生えているわけよ。この一遍山なって盛り上がって、この宝山にサンゴ相当生えているわけ。



南西諸島、伊豆・小笠原諸島の海底火山帯。宮古の宝山、小笠原、奄美大島一帯のサンゴとの因果関係があるか？

サンゴというのはそういう関係だと僕は考えているよ。火山脈が通っているから、熱があるさぁ。その関係で、サンゴが生えているわけ。硫黄鳥島あるねぇ、あそこも火山脈の熱があって、サンゴが生えている。今中国船がサンゴ盗りにきて問題なっている小笠原があるさぁ。あそこも火山脈が通っているから、サンゴが生えているわけよ。そういう所しかない。僕は小笠原に行ったことない

けど、あっちの岩見たら、もう真っ黒なっている、焼けているはずよ。とにかくサンゴはマーンマーンないよ。石油と同じさぁ、簡単の所にはないよ。火山脈の近くにが、大体はサンゴはあるわけよ。僕がサンゴ揚げた宝山とかは、　マックール石だった。アコウの北側で行って、サンゴ少し揚げたが、あそこは火山脈は通っていないはず。だから皆が皆そうではないけど、火山脈近くには、サンゴはあると、僕は見ているよ（笑い)。

アコウ北側　泥海よ　桃サンゴ揚った

―　アコウの北側でもやったわけですねぇ。大陸棚の上の方、あそこは泥の海ですか、

外間：そうアコウの北の方のシナ海まで行った。アコウから大体 10 ﾏｲﾙ位離れていなかったかなぁ、あそこは泥海だから、シナ海は殆んど泥よ。サンゴ礁というのはあんまりないわけよ。僕達が一本釣りした時は、アンカー入れるさぁ、アンカーの爪に泥は掛かりよったよ。泥は簡単に網に掛からんけど、サンゴがあると聞いて行った。あの水産の船の試験船した人達がサンゴがあるという話していた。揚がった品物があったから、これ見て、サンゴ採りに行った。あることはあったですよ。あそこではこういう石のマックール見たことなかった。あそこの近くは、大陸棚だから火山脈は通っていないはず。だけど桃サンゴが掛かった。やっぱり沢山はなかったねぇ、あそこの桃は太かったねぇ、粗かった。

小さいのは掛からなかった。殆んど粗いサンゴ、ちょっと質が変わらんかったかねぇ。僕達は質がよかったかどうか分からんけど、粗いサンゴだったねぇ。

スカッチ？　あれはなかった。桃サンゴが密集している所しかスカッチはないさぁ、そうねぇ、ボケが宝山では小さいの、この位の、ボケが掛かっていた、小さかったけど、この位、長さこの位(10 ｾﾝﾁ位）、太かったねぇ(2 ｾﾝﾁ位）。

アコウもサンゴあったよ。サンゴある話は聞きよった。分かる人しか、あそこは網引かない。僕達はアコウには行かなかったけど。台湾船があっちでサンゴ盗っていたから、あるんじやないかなぁ。

サンゴ船　金掛かる　船員 月給制

―　3 年ほどサンゴ船してどうでしたか　儲けましたか。

外間：少しは儲けたと思う。あんまりは儲けてない。サンゴがあまり採れなくなったから辞めたけど。だけどサンゴ船は厳しいよ。マグロ船、一本釣船と違って、サンゴ船の船員は月給制だった。採る時も採らん時もあるのに、決まりがないさぁ、行って品物揚がるか、揚がらんか分からんのに、月給制にしないと誰も付かんさぁ、配当制では船員はもたんさぁ。それにこれ品物売らんと金幾らなるかはっきり分からん。しかも 3､4 ヶ月も寝かして、入札に出す。サンゴ船は 2 回しか入札しないわけ。だから船主はこの間金作らんといかん。金がない人は簡単にできないよ。

経費でも 1 航海の経費相当掛かるさぁねぇ、燃料代、網代、何もかもして、300 万位掛かりよったから、あの当時はﾄﾞﾙだから、ﾄﾞﾙだったら幾らだったかなぁ、そうねぇ、小さい

網だったら大体10万掛かったからよ、2,30万以上掛かりよった。船員の給料はゆうにひと月に、大体40ﾄﾞﾙ位だったはず、普通の人ができない。金がないと船は動かしきれん。

経費も1航海100ﾄﾞﾙ以上かかるのに、網、燃料代アシェー、食事代もあるさぁ、もう船員の月給もあるさぁ、この程度だったらもう相当金掛かるさぁ、1ヶ月1000ドル近く掛からなかったかねぇ。母の弟叔父さんが金は出していたから、僕ははっきり分からんけど。

儲けた人は　相当儲けた　けど　大バクチよ

―　だけど、儲けた人は相当儲けて、損した人は相当損したと聞きましたが

外間：サンゴ船はバクチさぁ。大バクチャーよ。物が見えないのに、採ってこなければ物が分からんのに（笑い)。魚探でも、あぁ何でも、分からんよ。ただ揚がったという話を聞いて行って、そしたら、皆は掛かった所に同じ所に入れるさぁ（笑い)。前は100隻近くいたよ、宝山でサンゴ揚げると100隻近くいたよ、サンゴ船いっぱいしていた。

そして、サンゴ採ってきても内地に持って行かんと分からんさぁ、入札業者が儲かったんじゃないかねぇ。またもサンゴブームなくなってから、買う人がいない、品物が売れないと言っていたよ。在庫持った人が沢山いたみたい。それで損して皆倒産しまったよ。

儲かった人は慶田さんといって、与那国の人だったけど、宝興丸、この人は非常に分かっていたねぇ、サンゴ採ってうまかった。それに前西原さんという人がいたよ。あの人も相当儲かった。森田さんと慶田さんと、前西原さん、この人達はサンゴ船のベテランさぁ、僕等はサンゴ船のヒヨコみたい。もう経験もなくて、ただ漁労長頼んでやっただけさぁ。

一本釣で　サンゴ掛けた　2ヵ年ほど　サンゴ船した

―　サンゴ船を3年間して辞めて、そのあと戻って、もっぱら一本釣したわけですねぇ。

外間：いや、また採りに行った（笑い)。これは大九で一本釣していたら、小さなサンゴが掛かったからよ。僕も経験あるさぁ。網持ってきたよ、石も持ってきた。サンゴ船の場合は5､6本も10本も網入れるけど、自分の船小さい船だったから、あの兆福丸5ﾄﾝでやった。1人連れて僕と2人で乗って、2つ網入れてやった。僕が海辞めて、15年位なるけど、辞める4,5年前に2ヵ年位やった。最初行った時よう採れよった。こっちは新しい漁場さぁ、網にいっぱい掛かりよったよ。あの時はサンゴ船はいないさぁ。宮古のサンゴ船ない時代だから。私1人だったから（笑い)。

サンゴ原木小枝と加工業者からお礼にもらった指輪

（現物を取り出して見せる）　これがその時の桃サンゴ、相当揚がった。これは僕がサンゴ売る人に、この人が指輪にして僕にプ

レゼントしてくれたわけよ。こういう品物だった。これ桃サンゴよ。2 ヵ年目からあまり採れなかったねぇ。それで辞めたけど。儲けたかって？　まぁ 2 年間平均したら燃料代は位は持ってきよった。少しは儲かったかなぁ（笑い)。

サンゴは魚探で見えないよ、何も見えない。僕がやった兆福丸の場合は、他にサンゴ船いないよ。どこにあるか 1 人で探さんといかん。ツキがなければそういう宝物は当てきれんさぁ、運が付かなければ。運があるからサンゴに当たったと思う。宝クジだって運がないと当らんさぁ。そういうものだと思うよ。

サンゴ網禁止　潜水艇方式だけ　サンゴ許可

―　今はサンゴ網は禁止されています。沖縄県は、網曳いて荒らされたらいけないということで、サンゴは潜水艇で採る方式しか許可もらえないそうですが。

外間：そうらしい。これこそおかしい、バカな話よ。これだと僕ら海アッチャー（歩く人、漁師の意)はもうサンゴ船できないさぁ。

潜水艇だと何億金が掛かるか分からん。サンゴ船はもうお金持ちにしかできない。県は勝手にこれ決めて、僕ら海人はサンゴ船させない積もりかなぁ。

10 何年前に、こっちの泊港に潜水艇と母船が来ていたよ、サンゴ船する人に売ろうとして、内地から宣伝しに来ていた。沖縄でちょっと使ったはず。これサンゴ組合がやっていた。兆福丸の時代さぁ、この時 3 億 2 億という話だった。この潜水艇、丁度買う人がいたら売ってあれさせようと話だったねぇ。サンゴ採らそうと。母船は見なかったけど、潜水艇は見た。乗ったことはないけど。

一本釣船兆福丸 5 ㌧、前はこんな小さな船でサンゴ掛けた。今は沖縄県は潜水艇方式しかサンゴ採取は許可してない。

だけど沖縄のサンゴないよ。僕はそう見てる。宝山は、台湾船から、今は全部中国船さぁ。いっぱい来て、もう向こう盗り尽くしたから、今度は小笠原に行っているさぁ。だから県も、国もジンブン(知恵)出して考えんといかん。そうしないと沖縄ではサンゴはできないよ。2,3 億する潜水艇でやれと言って誰もできない、やれないさぁ。誰もやらなれば、沖縄のサンゴは、台湾船、中国船に盗られて全部なくなるよ。

―　ほんとにそう思いますねぇ。ためになるお話有難うございました。　（了）

聞き取り余滴

上原 常太郎 うえはら つねたろう （ 糸満漁協 ）

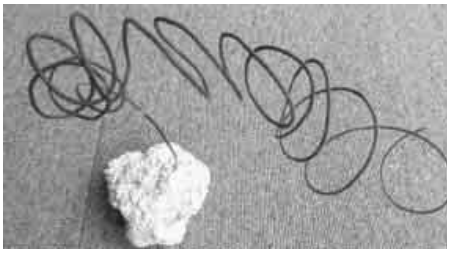
ウミマーチ　ウミタケ　サンゴ一緒　掛かってくる

（飾り棚指して） これ底延縄に引っ掛かったから持ってきて飾ってある。きれいさぁ。大体 150 ﾒｰﾀｰ位に生えている。サンゴの採れる深さよ。同じ深さだから、サンゴ網にも引っ掛かるんじゃないか。ウミマーチ(海松)の黒いのもこんな形、グキ(茎)よ、皆骨だけで葉っぱはないみたい。100 ﾒｰﾀｰ位からある。赤いのはポロポロして、乾燥して、すぐ落ちる。あれをサンゴと思って採って来たら、崩れるさぁ（笑い）。

何か電線みたいにぐるぐる巻いて、あれも生き物ですよ。あれウミダキ(海竹)と行って、珍しい、前はあれも集めていたけどねぇ。小さいのは、背丈もある位のものあるんだけど。

これは太さは鉛筆位かなぁ、深海 100 ﾒｰﾀｰから 5、60 ﾒｰﾀに生えている。

サンゴ採る時にこんなのがいっぱい網に掛かるはずですよ。結構浮いて生えているから、網に掛かるはず。大体 100 ﾒｰﾀｰ位にこの黒いのも、赤いのも、ウミダキもある。赤いのはこれみたいに葉っぱ付いている、きれいに付いているけど、乾燥したらダメなる。



上：ウミダキ　　下：ハママーチ
（上原常太郎所蔵）

石サンゴのウル　網に掛かって揚がる　生きているのはヤナ？

ウチは 10 年以上も、100 ﾒｰﾀｰから 200 ﾒｰﾀｰで、底(立)延縄やっているけど、赤いのは、サンゴは引っ掛けたことがない。白いのはあるけど（笑い)。だけど、あれはサンゴじゃない。あれはもうウル、ウルが引っ掛かる。浅い所にサンゴが生えている、あの石サンゴをウルという。もう死んだら、生きているサンゴが死んだら、これの骨がバラバラなって、あの白い石にウルという。石サンゴが崩れたのをウルと言うさぁ。

もうあれがもう死んで、枝折れて、網なんかによく引っ掛かってくる。石ころなんかが、枝が沢山あるから外しにくい。昔の人は、普通のサンゴ礁の石なんか、木が生えて、あれが折れたり、何したりして、ウルが引っ掛かったと言うわけ。

で、生きているのはヤナと言う。ヤナに引っ掛かった。底だから見えない。岩が尖った

のとかに引っ掛かればヤナという、そこは魚の棲かとか、魚棲めなくても岩の凸凹とかに、また、チブルサー(頭状)もあるよ、あれもサンゴの一種だけど、丸い岩を、立ってみたら足がツルツルする。粘膜みたいなのが貼られているからよ。人間の頭みたいに丸くなってあれも生きているからねぇ、上から粘膜貼って、ヨダレがあるからねぇ。死んだらヨダレもなくなるはず。またヒーゴー(痒い)とか、あんなもの、岩に触ったら痒い場合もあるよ。

徳之島で　サンゴ掛かった　100 万円で売れた

延縄船のアンカーなんかに、叉が 5 つあるでしょう、あんなのサンゴが引っ掛かってきた話は聞いているけど、本人はサンゴと分からんでよ。ヤナ(厭な)ウルやと言って、すぐ海に捨ててよ。これは奄美大島の徳之島での話ですよ。

ウチらは奄美大島から、喜界島、十島、トカラ列島、あの辺まで行きよった。その頃はシチューマチ(アオダイ)がよく釣れよったから。1 番大島から近い所はヨコワといって、この周辺にソネが沢山ある。徳之島シンゾネといってねぇ。徳之島から 20 ｶｲﾘ位離れている、あの辺で縄入れていたら、サンゴがアンカーに引っ掛かってきたわけ。ヤナ(厭な)ウルグワーと海にブンナギタ(放り投げた)よ（笑い)。

奄美大島の 230 ﾒｰﾀｰ海底に生えている桃サンゴ。カンパチが泳いでいる。(「奄美群島漁場調査報告」より）

また、別の人が縄入れたら、これにまた引っ掛かってきた。引っ掛かったもんだから、これ揚げて、よく見たら本物のサンゴだったわけ。先に揚げた人は早合点して、海に捨てて、損したさぁ。自分がとっておけば自分のものになったのに（笑い)。上等な桃サンゴよ。あんまり小さい枝はない、この位の太さの立派なものでした。だけど、セリ市場でサンゴとる人いないから、一応、組合(糸満漁協)に預けていましたよ。情報入れてからに、口コミで宣伝したら、買い手が来てからに 100 万位で売れましたよ。100 万円で売れたから、本人喜んでいた（笑い)。

大島とか、徳之島辺りは、サンゴがよく採れるんでしょうねえ。底延縄していたら、よく徳之島の海人から、サンゴある所ないかと、よく聞きよったですよ。糸満の海人で、サンゴやる人はいないですよ。同じ同業者、延縄シンカ(仲間)には誰もいない。

潜水艇で　サンゴ採っていた　倒産して　もうやってない

ウチの同級生に 1 人だけいましたねえ。もう亡くなりましたけど。あれはサンゴ網じゃなくて、ロボットを使ってサンゴを採ってました。サンゴは深海 100 ﾒｰﾀｰから 200 ﾒｰﾀｰ位にあるから、魚探では全然分からない。水中カメラだったら分かる。サンゴ船はカメラ沈

めて、海の状況見ながら、こんなして、やっていた。機械も備えて、もう大きな船、サンゴ採りをロボットで。機械は見なかったけど、こんなやるよといって、言いよった。

何で、こんなに海ひっくり返しているかなぁと、テレビカメラで見たら岩なんかもひっくり返しているでしょう、もう荒らされていると（笑い)。

サンゴは 100 ﾒｰﾀｰから 200 ﾒｰﾀｰ深海にある。あそこはアカマチ(ハマダイ)も、シチューマチもいる。サンゴは魚の棲かになっているはずよ。このサンゴ採るといって、網引くさぁ、ヤナも全部壊される。それにサンゴも皆採られたら、棲かもなくなって、魚もいなくなるよ。あれ達は、潜水艇で上から機械見ながら、ロボットで、サンゴ採るといって許可もらってやっていた。一応、糸満の組合員にもなってました。

潜水艇で採取したサンゴ、枝ぶりも見事である。

組合に入ったら、組合の購買も掛けしても買えるから。潜水艇で採るならヤナも壊さんからいいさぁ。だけど、うまくいかなかったのか、赤字なってから、借金して、倒産しました。彼は、会社に雇われていたと思うけど。糸満に営業所もありましたよ。会社の名前は分からん。あっちのお店には大きなサンゴがきれいに飾られていた。ロボットで採るから、枝もきれいにして、網だとどこから折れるか分からんねぇ。だけどロボット使ってサンゴ採るのは、やっぱり 200 ﾒｰﾀｰ深海だから、大変だったんじゃないか。

尖閣で　台湾船　よくサンゴ採っていた

尖閣で漁している時に、よく台湾船が尖閣列島の大陸棚で、アコウ(大正島)とかで、よくサンゴ網やっていた。ゆっくりゆっくりよ。1 隻よ、網引っ張っていた。クミアカ(大正島の古称)とユクン(ここでは尖閣 4 島の総称)の丁度中間位で、網引っ張っていた。

まぁ、120 から 200 ﾒｰﾀｰ下がる所、だから自分なんかと一緒の場所だからよ。あれ達が引っ張っている所を船よけながら、ウチらは底(立)延縄入れたりした。サンゴ船とすぐ分かった。もうゆっくりゆっくりだからねぇ。底延縄の旗見えないから、あれ達がもしか来ていないかといって、側に寄せていったけど。台湾船はすぐ分かる。マーラン船みたいに艫があれしてよ。鶏とか食料、いっぱい積んで、鶏鳥も船で養って、とっても大きいからすぐ分かるよ。動物もあれしながら、鶏なんかも養いながら、人も沢山いたからねぇ。まぁ台湾のサンゴ船は 4,50 ﾄﾝ位かなぁ。常丸造ってすぐだから、もう 40 年前の話ですよ（笑い)。今は宝山に中国サンゴ船が来ている。あれは相当大きいですよ。鉄船で 70 ﾄﾝ以上あるんじゃないかなぁ。ウチらの 10 倍以上もあるから。　（了）

聞き取り余滴

上原 徳広　うえはら とくひろ （那覇地区漁協）

瑞幸丸　サンゴ引っ掛け　枝折れて　海へボチャン

1978年頃かなぁ、瑞幸丸(渡嘉敷真厚船長30㌧)に乗っていた時で、一本釣りでサンゴ引っ掛けたことがある。あれは宝山で、あの時は魚あまり釣れないわけさぁ。カブ(撒きエサ)入れてまた流したりしないといかんさぁ、だから20分に1回は揚げるわけ、釣機がない頃だから、きついわけよ。たまたま揚げようとしたら、重いわけ。アイ！　揚がらん。引いても揚がらん。これまた下手したら岩に掛かったなぁと、切ろうと思って、こう少しずつ巻いて、巻いたら、やっぱり船というのは少しずつ動くさぁ、潮の流れとか、風で。

この力を利用してやると、こう揚がるわけよ。ナー(もう)デージナトーサ(大変になっている)。この重いものを海底から250㍍位揚げないといかんさぁ。

重いから、そのまま切れた方がいいと思ったよ（笑い)。で、しょうがないからこうこう揚げていたら、底も段々見えてきたわけさぁ。水深大体50㍍近くきて、太陽光線が入ってくる。ものものしい影が上がってくるからさぁ、見えるわけよ。

これの何？　よく見たら、色の付いたサンゴが引っ掛かっているわけ（笑い)。俺は本物のサンゴとは思わんよ、ただのサンゴが掛かって、あの普通のサンゴ礁の、岩の、あのウル(浅瀬のサンゴ)が掛かってきたと思った。そしたら桃色サンゴであるわけさぁ。

瑞幸丸(30㌧)と渡嘉敷真厚船長。サンゴ掛かると分かってからは船の先にサンゴ網巻いていた。

俺がもうこうして揚げているさぁ、船長はそれ見てから、待て、揚げるな！
揚げるな！と、そしたら、バチーンと切れたよ（笑い)。船長は、がっかりしたのか、あぁと声出していたよ（笑い)。

まさか本物のサンゴとは思わんさぁ。結構この位はあったなぁ。で、重いから水面のこの位まで来てから、先っちょの枝がポキッと折れた。この位は掛かっていたわけ。

俺もこうやって、間違ってこれが外れたら、釣り針が跳ね返ってくる、一時どうして揚げようかなぁと考えていたけど、まぁいいやと、そのまま揚げたら外れてしまった。

結局、あのサンゴは、水の中では軽いけど、水面から揚げたら、重みでバッチ折れたから、枝これだけしかないさぁ（笑い)。あれ下手したら30㌔はあったはずよ。

枝だけど掛かっているから、やっぱし、ナイロンと下から揚げる力と重さで、一番弱い

所からやるさぁ、揚げられれば30㌔揚がる、釣針で、水面には、この位までは、揚がったかなぁ。だからアンカーに掛かる時は、全部揚がる。そのままで揚がるよ。

それから、船長の真厚ヤッチー(兄貴)は、ウマ(ここ)、サンゴがアッサー(あるなぁ)と言って、アンカー打つ時に、船の先にサンゴ網を巻いてあったよ（笑い)。1 回も掛からなかったけど（笑い)。あれサンゴ網持っていた、瑞幸丸は（笑い)。

台湾船　堂々と　魚釣っている傍から　サンゴ網流す

で、たまには、宝山で、台湾の船が目の前からよ、サンゴ採って歩くわけ。台湾のサンゴ船は大きかったよ。マグロ船位はあったかも知れん、2､30㌧はあったかなぁ。夜だったからよく見えなかった。もっと大きかったかも知れんし、とにかく大きかったよ。瑞幸丸はアンカー打って、皆寝ているさぁ。台湾のサンゴ船はゆっくりゆっくり流れているからさぁ、要するに黒潮に乗って、網引っ張って流している感じで。

真厚ヤッチーがあれサンゴ船だよと言いよった。あれ達もこっち見て、もうワァワァワァワァして、呼ぶわけよ。そしたら、真厚さんが、エー話するな、デージドー(大変だよ)。保安庁に見つかったら大変だから、面倒だから　向こうが何と言っても、返すなよ。絶対話しするなよ、合図も、何もするなよと、船長からの指示だった。

得将丸から尖閣に電灯潜りで行った時に、台湾船が漂流していた。魚釣島から 9㍄位の所で。ロープで曳いて島のカタカ (蔭)に連れていたわけ。あの船もサンゴ船だったと思う。夜だったからよく見なかったけど。大きい船で 50㌧位、先の尖ったジャンク船で 15 名位乗っていたかなぁ。色は緑色だった気がする。ロープ渡して、それで引っ張って魚釣島に避難させたわけだが。あとで保安庁の巡視船が来ていたよ。そしたらあの船と言葉交わしただけか、船に乗ったか、もし乗ったなら、港入港できない、すぐ検疫受けないといかんといろいろ言われて、２時間位調べられた。あの時に真厚ヤッチーが、保安庁に見つかったら、大変よ、話しするなよ、合図も、何もするなよという意味がよく分かったさぁ。

1980 年長崎県男女群島でサンゴ密漁中の台湾船(28㌧)。
（「「社」目黒会北海道支部サイト)」より）

で、あの宝山の台湾船は、50㍍位、離れて、こうあったら、ここに並んで、潮加減で、あっちなるか、こっちなるか。このサンゴ網を堂々と、瑞幸丸の傍から引っ張って歩くから、たまたま潮の流れが、そういう風に、こっちの船の近くに流れてきたかもしれんけど。あれエンジン掛けない、流している。潮の流れで、引っ張っている。だから燃料使わないわけよ。僕のサンゴに関係した経験はこんなものです。　　（了）

根間　忠男　ねま　ただお　　（サンゴ加工･販売業）

1933 年(昭和 8 年) 宮古島平良市狩俣に生まれる。81 歳(2015 年時)。

8 歳(1942 年)に満蒙開拓団で満州に渡る。家族に死別、11 歳孤児となり単身帰国、14 歳に帰郷。戦後貝ボタンブームが起こり、16 歳に太陽商事、18 歳には三洋ボタン工業で、貝ボタン製作に従事。貝ボタンはプラスチックの出現で消滅、27 歳(1960 年)にはサンゴブームが到来。サンゴに着目し、サンゴ製品加工に乗り出す。氏は本県の貝ボタン・サンゴ製品加工の魁であり、第一号である。氏の歩みは沖縄県の貝ボタン･サンゴ加工技術の歩みでもある。

サンゴ漁業はサンゴ採集と製品加工･販売の両輪からなることから、氏にサンゴ製品加工・販売について貴重な体験を語ってもらった。

満蒙開拓団で　満州へ　8 人家族　1 人だけ生き残る

僕は戦災孤児なんです。両親に連れられて満蒙開拓団で満州に行って、あそこで両親、弟妹亡くして、1 人だけ生きて引き揚げてきたんです。生まれたのは宮古島の狩俣です。8 才の時に満州行って、あの時は狩俣開拓移民団で 23 名行きました。満州国三江省(現中華人民協和国竜江省)方正県伊漢通という所でした。今でも覚えてますが、伊漢通国民学校の 3 年に編入されました。学校から帰ったら、両親の農作業を手伝いしたりしていました。昭和 20 年 7 月、20 歳以上の男の人は全部招集されて、親父(景福)も招集されて、女､子供だけ残された。ソビエト軍が満州に侵攻したら、もう難民になって逃げ回っているうちに弟妹 3 名が亡くなった。やっとのことでハルピンに行き、収容所のある花園小学校に入ったんです。しばらくしたら親父はソビエト抑留中に逃亡したらしくて、収容所で再会しました。その時喜んだんだけど、中国共産党の八路軍と国民党との内戦が起きて動けなくなったわけです。親父は過労と栄養失調で、そのあと母親恵美子と妹 2 人が亡くなった。8 人家族だったのに、残ったのは僕 1 人ですよ。子供ながら、もう大人達に混じって、ハルピンから、貨物列車で朝鮮のコロ島の港に行き、そこから昭和 21 年 4 月、船で、日本に向かいました。あの時僕は 11 歳、あぁいう場合に誰も知らない中に、1 人ポッンと残り残された。集団は心の支えがあるんですねぇ、そこで守られているです。集団の中にいたから、自分はこうして生き延びられたんだと、今では思っています。

右上：親父根間景福。左：現在の伊漢通開拓団の跡地。当時の民家が今も使用されている。（蓑口一哲 2004）

博多に上陸　帰郷間際　従兄弟夫婦　引き取る

博多に着いて、行き先の振り分けが始まり、私は 8 歳までいた宮古と登録したんです。宮古だったら、沖縄だから名古屋の収容所だということになって、列車で名古屋の収容所に着きました。で、沖縄宮古への帰りを待っていたんです。それも集団の中で、食べ物は、一応はある程度支給がありましたんでねぇ。そうこうしているうちに、ウチの親父の本家の長男兄さんが、大阪にいて、収容所に同じ郷里の人がおって、僕の従兄弟に当る根間景正兄貴に連絡したんです。それで奥さんの千代姉さんが僕を探して迎えに来てくれたんです。僕は知らないですよ、もう初めてお会いする方で、それこそ神様が救ってくれた喜び勇んで、僕は付いて行ったですよ。それで収容所を出るとなったら、アメリカ軍から、何かいろんなことを質問されました。ジープで来て、憲兵が来て、米軍の宿舎に連れて行かれました。中国でどういうことをしてきたか？　11 歳の僕に（笑い）。通訳を通して、それでいろいろなことを聞いていました。要するに内戦のことやら、いろんなことを。大人が話しているので、聞いた話をしました。

根間景正兄貴

で、兄貴のお家に行ったら、もう満州では、勉強どころでなかったので、学問のやり直しといって、神戸の本庄小学校の 5 年に編入されたかな。そのあと 3･3 制ですから、本庄中学には入って、僕を引き取って、大事に育てくれました。兄貴夫婦には感謝して、何も心配ないもなかったですが。急に田舎から連絡が来たんです。早く帰って来いということで帰されました。

狩俣帰り　2ヵ年半畑仕事　トゥンガラヤー　心癒し

悔しいね、僕は根間家の長男なんです。周囲の色んなアドバイスで家族の遺髪を持っていたんです。髪の毛切って、毛切って家族全部、6 名兄弟妹でしたからねぇ。で、それを大阪に来た時に、兄貴はお寺に持っていって、ちゃんとお骨箱作って預けてあった。結局田舎ではそれがどうもいかんと。それと本家の兄貴の所にいたらまずいとか、いろいろあって、結局帰らんといかんわけです。三ノ宮駅で兄貴夫婦に送られて、夜行列車に乗って、1 人になった時に、ほんとポロポロと涙が出てきましたよ。もう 14 歳になったけど、やっぱり一人ぼっちの寂しさは、怖かった。もう生きる望みなかったですよ。だけど、佐世保の収容所着いたら、またえらい賑やかで、引揚げる人が沢山いたんです（笑い）。沖縄、宮古、八重山へ、郷里に帰れるということで、昭和 23 年の 7 月かなぁ、中城湾の久場崎に着きました。収容所は知念の上の方にあって、カマボコ型の建物でした。で、宮古への船便が出るまでかなり長い期間ありました。あの当時かなり大きい台風があって、宮古は混乱しているからと出航を延期していて、しかし、こっちは毎日皆とワイワイしておりゃ、集団の中にいたら、寂しさ忘れるんです。その頃皆ダンスパーティーみたいにやって、僕も一緒にワイワイして楽しくやってました（笑い）。

で、宮古に着いたのが昭和 24 年 4 月かなぁ。平良の桟橋で迎えられて、狩俣に連れて行

かれて、母方に世話になるようになった。さて、ここでも仕事しながら学校に行かしてくれるかと思ったら、そんな余裕なんかない、毎日畑仕事を手伝いました。農業って、一旦作物を植えつければ、除草する以外はそんな仕事ないですが、やっぱり現金収入ないといかんから、いろいろ副業がありました、畑の合間に薪を集めて、平良に売りにも行きました。1 週間に一遍は馬車に積んで持って行きましたよ。叔母さんは先に行って、売る場所を決めて、そこを下ろしてねぇ。まぁ、そういった余裕もない中で、毎日働きづくめの生活でした。ウチの田舎では、トゥンガラヤーといって友達の家に、友達同士が夜集まって、寝泊りして過ごす習慣があるんですよ。同級生 5 名でしたが、皆でワイワイガヤガヤして、それが一番の救いで、そこで寂しさを忘れるし、まぁ何となく慰める言葉も掛けてくれました。僕にとって、そこが心の癒しの場になって、元気づけられました。今でも彼らとは繋がっているんですよ。ほんと感謝しています。それで 2 ヵ年半農業の手伝いしながらも、早く田舎から飛び出して、自分の道を切り拓こうと、ずっとその気持ちでおりました。

密貿易の根間昌徳　ボタン工場設立　平良に

田舎から飛び出す機会がきたんです。根間昌徳さんという密貿易をやっている人がいたんです。郷里の先輩で、丁度金城夏子のあの頃です。僕が神戸にいた時から有名でしたよ。景正兄貴の家は神戸商船学校の近くでしたから、昌徳小父さんの船が夜遅く着いて、僕は船番させられていたから、密貿易するのは見聞きしていたからねぇ。今考えてみると 14 歳の時に、たまたま小父さんの船の船番やったのが、僕の人生の方向を決めたわけですから。不思議な縁ですねぇ。

で、昌徳小父さんが、平良で太陽商事という会社創って、ボタン工場をすぐ始めたんです。池間武福さんとか、平良新勇さんも共同出資して。その時にガリオア資金というのがあったんです。民政府は沖縄に産業を興そういうことで、漁船を建造するとか、この貝のボタンを作るとかもあったんじゃないか。この資金を三洋釦工業も採っているんですよ。これが三洋の基、もう機械いっぱいありましたからねぇ。いっぱい人も雇っていた。昌徳小父さんも宮古でボタン工場をやるというんで同じ機械でした。僕はそこに雇われた。もう逃げるようにそこに行って、雇ってもらった。ヌムトウという墓の前の所に工場と寄宿舎があった。もう一生懸命働きましたよ。

くりぬいてできた貝ボタン。でき具合を選別している作業光景。(「奈良県中和地区商工会」より)

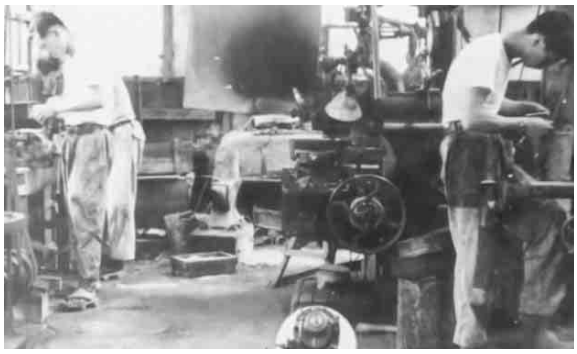
そうするうちに、昌徳さんは船 3 隻持っていて、プラタス島で海人草採ったり、密貿易したりして、そしたら、香港に真鍮を運んだ船が拿捕されたんです。これが大きい罪にな

って捕まって破産しちゃった（笑い)。敵国に沖縄から砲弾の薬きょう運んでおるわけですから。会社はもう破産して、これ3ヵ年位続いたかなぁ、昭和24年から26年、16歳から18歳まで。

で、また狩俣に戻って、仕方なく叔父さんの所で農業してました。そしたら、三洋工業がボタン工場造るから、僕がちょっと経験があると聞いたんでしょうねぇ。それで今度は三洋釦（ボタン）工業所に採用されることになったんです。これ幸いだと思ったのは宿舎も準備されて、旅費も出してくれるし、全部支度してくれましたよ。

三洋釦工業所　従業員40名余　ボタン　奈良に送る

あれは那覇の真和志中学校裏の川沿いに工場はありました。株主は7名で、合資会社でした。社長が仲間進さんで、兄さんの仲間勇栄(カツオ船主)、それから西銘順二(沖縄県知事歴任)、我那覇サダノブ（・・)、糸満三郎(県漁連会長)とか、三洋の事務所に錚々たるメンバーがいつもいました。水産関係に力のある人達がガリオア資金を取り込んでボタン工場を造ったわけです。ボタンの経験者ということで採用されて、僕が狩俣から抜け出す機会はそれなんですよ。いやもう本当に、ここに来て、自分の生きていく道は、これだと思ったのです。もう精魂こめてボタン切りましたよ（笑い)。


選別した貝ボタンを磨いている。最後の仕上げ工程作業。
(「奈良県中和地区商工会」より)

三洋工業は、40名位の工員がおって、大きい工場でした。

機械もいっぱいあって、工員は足らない位、機械は余っていたもん。

ボタンは奈良に送ってました。奈良がボタンの生産地で本場でした。あと淡路島にもあったようです。僕らの教師は淡路島から来た人でした。田崎さんという方だったかなぁ。工場で工程を教えてもらって、切るだけではダメで、擦って平たくして、穴開けて、艶出して、磨きく機械も全部揃っていました。貝殻は大体が全部そうでしたが、夜光貝はボタン材料として使ってなかった。一番多い方のが、サザエと広瀬貝、広瀬貝はあんまり薄くてよくなかったですねぇ。高級になると高瀬貝、黒蝶貝を使いました、黒蝶貝は少なかったけども。貝ボタン作る工程は今も全部覚えていますよ。あの当時の機械、切る道具はどこにもないけど、今でも教えられる位はでき

高瀬貝、広瀬貝で作った貝ボタン

ます（笑い）。何年間もやってきたからもう身体が憶えています。

貝ボタン原料　高瀬貝

広瀬貝

サザエ

夜光貝

プラスチック出て　貝ボタン大打撃　　会社　破産する

そう言っちゃ何だけど、漁師は、池間とか、佐良浜の漁師の人は、この仕事に対する情熱がないんです。海に潜ったら一攫千金だから（笑い）。貝は採ってきても、こんな仕事に向かない。まじめにじっと座ってやらない（笑い)。だから、従業員は殆ど狩俣からでした。また高校まで上がってくるともうダメです。こんな地味な仕事はいやだ､もう真っ白くなりたくない。年から年中、一日中座りっぱなしで、工場で貝殻切る。騒音とホコリの中での作業でしょう。

三洋釦工業の宿舎前で、米軍将校用住宅払下げの上等な家だった。同僚の小録健勇さんと私(右)。1956 年頃

皆最初は、食うに困るからやっていたるけど、しばらくしたら辞めていきました。僕を頼ってくる人もいました。宮古に帰るとお願いもされました。紹介して雇ってもらっても、しばらくしたら軍作業とか、他の仕事に逃げていくんです。全部給料がいいからと。

だけど、僕は給料よりも居所が大事なんですよ、居所が（笑い)。首里にはちょっと親戚もいたけれど、絶対人の世話にはならん。よし、ここで自立しようと、これは生涯の自分の職業だと覚悟決めていましたから。

そしたら、6,7 年位してからかなぁ。23 歳の昭和 32 年頃か？　運悪いのか知らん、プラスチックが出て、もう貝ボタンは大打撃ですよ。もうびっくりしました。結局、それが大きな原因で、三洋は破産しちゃった（笑い)。会社はもう整理になって、僕は行く所がないから、工場に 1 人残りました。住所もそこだもんだから、那覇市大道 1 番地（笑い)。

貝細工　軍で売れた　　森田真弘さん　サンゴ見つける

破産して、40 名いた従業員は辞めて、僕 1 人残って、そうしているうちですねぇ。貝細工を始めたんです。ブローチとか、イヤリング、材料はいっぱいありましたから。ただ遊んでいるよりは、そこにある物を活かそうというんで、それはまぁ必死でしたよ。社長自身もちょいちょいやりおったけどねぇ。これを軍のＰＸ辺りに持っていったらすぐに売れたんですねぇ。それは社長の奥さんが持って行って、この貝細工、意外に人気あって、売れたんですよ。あの夜光貝を皮を剥いで、磨いて、いろんな物作った。法螺貝でスタンドも作ったり。要するに貝細工の工夫はすれば売れたんです。色んな貝で、こうくっ付けたら蛙の形ができたり、何か、ちょっとした変化できたんでねぇ、売れましたよ。それで人手が必要になって、まぁ 5,6 名は郷里の者を入れたかなぁ、

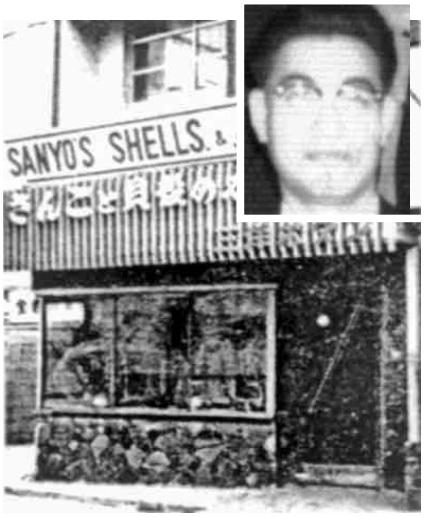
沖縄のサンゴ漁業に貢献した森田真弘さん。

昭和 35 年、僕が 26 歳の時か、池間の森田真弘さんが、宮古の宝山ソネですか、あそこでサンゴ見つけたわけです。そのあと、例のサンゴブームになったわけです。三洋工業がサンゴにすぐ加工できました。それは、貝細工やっていて、機械も、人間もいたからです。それに社長の仲間進さんも、森田さんも、池間の人で、従兄弟同士になる。社長の兄さんの勇栄さんも、伸光丸というカツオ船持って、森田さんなんかと一緒に、池間でサンゴ採ってました。

三洋　サンゴで　息吹き返す　池間から　ふんだんに

池間はもう三洋工業に直結していましたから（笑い)。入札すべきサンゴも、森田さんのサンゴも、社長の兄さんの伸光丸のサンゴも、皆三洋の倉庫に置いてました。あの当時サンゴはどこも加工できなかったけど、三洋はできたんですよ。実は、僕がサンゴできたんです。必要な機械がありましたから、一番の問題は切断機でしたけどねぇ。

そんなに大きな物ではないけれども、あの貝殻を切る切断機はあったんです。こんなもので希少なサンゴを削ったなら粉になりますので、それこそ、もうダイヤ盤の付いたようなもの、ただそれがあれば大抵の人に加工ができたんです。そのグレンダーはどこらでも売ってました。鉄工所で鉄を削る物と全く同じ物だけど、削りながら形を取るグレンダーで、一応あれの目



三洋釦工業所の那覇市前島店。貝殻とサンゴの専門店。工場は那覇市大道にあった。

の細かい物、300 いや 280 位かぁ。それでサンゴ削って、ペーパーで磨くというのが仕上げの 1 つの工程です。だからもう自分達の工場で、すぐ生産できました。加工できる職人は自分を含めて、3,4 人いました。それに、サンゴは池間から材料は入ってくるんです。ピンクルとかが、ふんだんに入ってくる。あれを活かさないといかんから。指輪の玉とか、ネックレス作ったら、国際通りの宝石店の人達は買ってくれました。

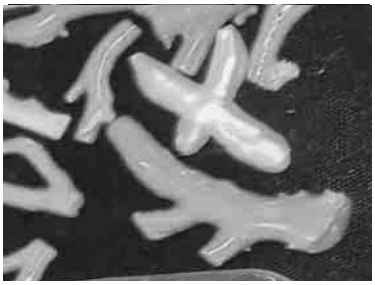
三洋工業が息を吹き返したはこのサンゴのお蔭です（笑い）。僕も必死でしたよ。貝細工もやらんといかんし、サンゴが来たら、てんてこ舞いでした。毎日忙しくて、そうこうしているうちに嫁さんをもらいました。もらったら、会社と家とどっちが大事かと叱られましたよ。家はもう道、庭挟んで工場ですからねぇ、幾らでも仕事があるわけです。もう夫婦喧嘩やって、ただこっちは、自分で生きる道はここにあるし、会社を潰せば、こっちもないですからねぇ、それは必死でしたよ。

加工技術　独自に工夫　希塩酸艶出し　偶然発見

サンゴ加工の技術ですか？　これは僕が自分で学んだもの、独自のものです。そう言っちゃ何ですが、サンゴも、貴金属も、沖縄では僕が先生、先駆者ですよ。それはもう試行錯誤しながら、一生懸命やりましたです。工場には機械は切断から磨きまで全部揃ってましたから。材料がよかったら、これはカフスボタンにするか、指輪にするか、色んな指輪にする。それからちょっと丸く削ってネックレスにするか、原料との相談です。

で、社長の奥さんは店で注文受けるんです。これで、こういうもの作ってくれと、そしたら材料の使い方にムダがあるですよ。材料の色と質、大きさと見て、これで何を作るか、材料と相談しながら決めるのが、一番能率がよくて、ロスが少ないです。それが一番のサンゴ見極めの、ですから、そう工夫して、サンゴ加工やっている人は、ちょっと財残していますよ。

最後の仕上げに練の細かい傷落しやって、艶出しがあります。この艶出しも僕のパテントもんだった（笑い）。パフで磨き掛けるんです。ペーパーで 100 番から 1000 番位までのペーパーでこう磨いていると、こう傷がなくなると、ある程度ガラス状の光を放つんです。だけどパフはそんなにいい艶は出ない。



サンゴの艶出し　上：サンゴ原木
下：艶出し加工したサンゴ

貝殻の艶出しは、塩酸でやっていましたから、このサンゴの艶出しも塩酸でやろうとしたんです。あの当時塩酸はこう壷で来たけど、なくなくなってました。買いに行くのもなかなかあれだし、この容器が山積みして、そこに希塩酸が、塩酸は濃い色だが、それが青く、大体手で触って刺激こない程度のものが底に溜まっていたから、希塩酸だけど、これを使ってみたんです。そしたら、

艶がパァーと出た（笑い）。もうびっくりましたよ。これが素晴らしい、このやり方、偶然に発見したんです。こっちは科学者ではないから温度を測って、濃度とかを調べたわけじゃない。あとは勘で適当に塩酸薄めて、希塩酸にしてずっとやってきた。それでもいいサンゴは艶がでましたよ（笑い）。工場に大勢の人が出入りしますから、僕のやっているこれ見て、話が広がったわけです。内地ではどうやったか知りませんけど、僕が希塩酸で初めてやって、沖縄のサンゴ加工業者は、皆この希塩酸で艶出しするようになりました。

揚ったサンゴ　入札で　90%超？　高知へ　残り島内

あの当時は、サンゴは内地で入札しますから。揚がったサンゴ 90%以上は全部高知辺りに行きました。沖縄で加工するのはほんの僅かです。三洋工業がサンゴ加工の第一号です。

最初の頃は、池間からピンクルがいっぱい来ましたよ。あれで指輪の玉とか、ネックレス作って、土産品店に卸したらで、これいいと思ったか知らんが、サンゴ加工をやる人が段々出てきたです、少しずつ。だけど個人だから、高価な機械入れては引き合わない。僕らの工場にサンゴ切らす機械、切断機、あれありましたから、サンゴ持ってきて、切らして頂戴と来ましたよ。そうサンゴセンターの上地さんもあの時来ました（笑い）。

あれからすると多くて 5,6 名だったんじゃないか。だから最初の頃は三洋が中心でした。サンゴ加工業者がパッと広がったのは、ずっとあとからです。

で、揚ったサンゴ 90%以上は、高知へ行くと言ったけど、これが実はよく分からない（笑い）。僕ら加工業者は、入札では取ってないです。全部船員からです。船員がチョロマカ（失敬）した物（笑い）。これはあとでゆっくり話しますけど。

もう 1 つは池間のルートです。サンゴ船の船主のルート。船主は現金が欲しいから、入札を通さずに直接売っているんです、浜売りで。入札では大勢に値段つけさせた方がいいでしょうけど。入札は 1 年に 2 回です、それまでは待てない。ここでは相対ですから、高いか、安いか判らない。要するに資金に行き詰った船主は、浜売りしているんですよ。

三洋工業では僕は工場の責任者です。サンゴ船の船主から買うとかは、これは社長がしてましたから。これがどの位だったか、数字がよく分からないですねぇ（笑い）。

船員　ポケット入れて　持ち込む　いいもの多かった

我々の所に流れてくるのは、船員さんがチョロマカ（失敬）した物を、工場に、チョイチョイは売りに来るんですよ。これは僕が対応しました。言っちゃあかんけど、それこそ、これがお金になるんですねぇ。いいものを持て来るんです、ポケットに入れてねえ（笑い）。

船員がそれをちょこちょこ売りにいくだけで、いい小遣い銭になったはずですよ。

あれいい物は、１つ1ﾄﾞﾙ、2ﾄﾞﾙ、5ﾄﾞﾙとかしましたんで、当時の1ﾄﾞﾙなら、あんた大変な金ですもん。サンゴブームの頃は大勢いましたよ。それは全部、僕らに近い人達が来たり、知らない船員さんが来たり。あとサンゴの場合、ピンクルというけど小さい屑までも、利用価値があるんです。ヤタラという物に加工して、あと親指位だとのかなりいい物

できる。サンゴ船の船員達はタバコ銭稼ぐため、この屑集めておって、船が帰ってきたら、これを買いに加工業者が港に来る。そういう話もあった、いろんなルートがあったはずですよ。また、サンゴ許可もらってない船で、この高知のセリに持っていけない船主達が、ここらで売り歩いていたから、相当な量が沖縄には確かあったじゃないか。

ピンクル（破片）、サンゴ屑だが利用価値ある。

あとからはサンゴセンターの上地さんなんかもこれ、相当買った方はずですよ。力あるのは。実は、持ってくるのは、そこにもいいのがあるんです。あんな大きいのは持ってこないけど、枝っぷりのいいサンゴなんかも、持ってきましたよ。三洋でも随分買ったかなぁ、他の所も。だから僕らの工場にそれを持ってきて、切断してもらって、持って行ったり、もらったからこれ切ってくれと言ったり、平良サンゴ店さんもそのうちの 1 人だった。要するに、サンゴの原木買うとなったら、入札に行かないでも、いろんなルートから入ってきたですよ。ここで、沖縄で十分調達できたんです。これは全体のどの位ですかねぇ。僅かだったのか、多かったのか、僕には分らないです。

加工賃払えず　サンゴ置いていく　結構金なった

船員がサンゴ持って来ますねぇ。ポケットに入れて来たり、風呂敷に包んで持ってきたりして。最初の頃は、小銭稼ぎでしようねぇ、買ってくれと、売ってましたよ。

それがあとでは、売ることしないで、玉に加工してくれというのか増えてきました。こっちも、いいよと預かって加工するわけです。中には、できた頃に取りに来たら、加工賃は幾らと聞いてびっくりしてねぇ（笑い）。サンゴ 1 個加工するのに、やはり 1ﾄﾞﾙ、2ﾄﾞﾙは取らんといかん。これ僕が決めるんじゃない、会社が決めるものと、そう言ったら、金が出せないんです。引き取る金がないから、何個か取って、あとはもらいなさいと、半分位は置いていったです。1 個 5,6ﾄﾞﾙするような物も置いていきましたから、三洋もそういうので随分儲けたんじゃないか（笑い）。

船員達も、玉にして売った方がいいと思うたかも知らん。もうその頃には国際通りの宝石店はサンゴ置きたがっていたから、向こうに売りに行ったわけでしょう。加工した方が売りやすい。結局、あの時は原木切る切断機は、僕らの三洋の工場にしかなかったから、皆こっちに来たですよ。そのあとサンゴセンターの上地さんが始めました。沖縄銀行本店の後ろの方の所に置いてやってました。ここが三洋の次に早かったんじゃないかなぁ、その前は皆僕らの所に来て、サンゴ切りにだけ来る人もいるし、また玉に加工してくれと、預ける人もいたし、それで手に負えないのは三洋がもらうわけです（笑う）。

あの時はそういう面白い時代だったです。何か混乱した世の中には金儲けの穴場みたい

なのがあったです。僕が 26,7,8 歳、昭和 35 年から 6,7 年、サンゴーブームの頃ですねぇ

尖閣でも　えらく採っている　赤サンゴ　多かった ！？

(1967 年度尖閣で操業したサンゴ船と生産高一覧表を見る)

血赤サンゴは、土佐沖、奄美大島沖、八丈、小笠原近海から採れます。沖縄では尖閣辺りかなぁ、僕ははっきり断定できないんだけれども、この表見ると、伊波幸夫さん(元宮古市長)もサンゴ船出していたか、伊良部平盛さんも船出していた。そういえば、猫も杓子も採りに行っているのに、もう有名ですよ。これ皆、多分少しお金があったから、ブームで資本出している人達だもん。こっち(一覧表)にある人、名前聞いたこともあるし、知り合いと言えば、知り合いですねぇ（笑い)。

この慶田清希さんは、確か、最後まで手広くやってかなり入札に出して、ここで入札した覚えがあるなぁ、宮古で。これは琉球政府に提出した報告なんですねぇ、67 年だから、これはサンゴブームがちょっと終わった頃ですよ、僕はこの時は、三洋を辞めてます。この表見ると、尖閣でもえらくサンゴ採ってますねぇ。あっちはサンゴの質はよかったじゃないかなぁ。赤だと思う、確か赤ですよ。

尖閣諸島の魚釣島、この近海で採れた赤サンゴを入札して加工したことある。(新納義馬 1971)

この前から宝山に中国のサンゴ船が沢山来ていましたでしょう。あれが小笠原まで行っちゃったけど。宝山は桃ですよ。僕もこれはあったけど、そんなに色はよくないんです。中国では、その桃が受けるかどうかはあまり知らないです。今沖縄とか、内地で展示したりをいろいろ見てると、もう血赤が売れるというんで、べらぼうな値段が付いています。これも大きさがあって、小さいので 10 ミリ以上ですねぇ。小笠原近海のも小粒だけどもちょっと赤に近いかなぁ。赤と言ってもピンからキリまであって、その血赤と名前で呼んでいる赤がどす黒い。宝山のは桃と言っても、とにかく色々あるんです。削ってみて、えらく同じ色じゃないだけに、いいのは高いわけです。

※なお、該表「1967 年度サンゴ生産高報告書」(琉球政府経済局)は、参考資料として末尾に掲載。

沖縄でも　時々入札　宮古のホテル　照屋敏子の店とかで

これ尖閣から採ったのは、赤だと思う。赤は加工していますよ、多分尖閣からだと思う。この慶田さんが持ってきたサンゴ、入札してとって加工したことがあります。この人のは大体沖縄で、サンゴ組合で入札しましたから。それは僕が独立してから、ここでサンゴ組

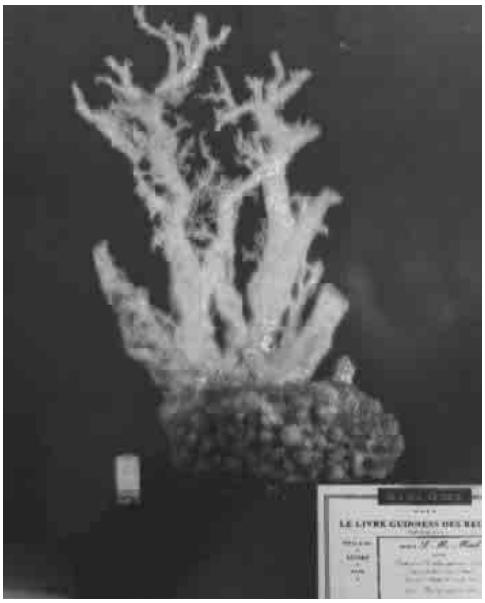
合を通して、業者集めてねぇ。

(「新サンゴ漁場を発見　柴田組合長“かなり有望”」の新聞記事見る)　柴田さんの方興丸が魚釣島の沖合いで、桃サンゴを 35 ｷﾛ採ったんだ。福島丸も同じ場所から桃を 20 ｷﾛ採れたんだねぇ。桃といっても赤味がかった桃だと思うなぁ、向こうのサンゴは。この時の入札には僕も参加して採っている。柴田さんが組合長になってからだなぁ。この人が主催してやっていた。あの慶田さんの宮古のサンゴホテルの 2 階でだったかなぁ。よく憶えてないけど。あの頃は沖縄では、業者集めて、入札をちょいちょいやってましたよ。あの照屋敏子さんの所でも、やったりもしたねぇ、金ポウ堂(クロコデールストア)でも。沖縄の業者がある程度塊った頃には、内地に行かず、ここでやったのもありましたよ。ここに内地から来ました。やっぱり値段を出すためには、ここだけでじゃなくて、中央から、高知からも、神戸からも、何名か来ましたよ。神戸にも大きいサンゴ屋あります。何と言ったか、忘れてしまったけど。もう真珠をやっていた人達がサンゴを兼用してやって来てましたよ。

枯れ木でも　削ったら　いいもの当たる　入札　勘が頼り

血赤、血赤と騒がれたのは、最近ですよ。台湾とか、中国辺りの需要が伸びてきたからです。それまでも桃が殆どで、ボケが最高でした。あの当時は、殆んど桃です。殆ど桃を中心に動いてました。桃の中にも、皆が一級品と認めるものがあったんですよ。

面白いもんで、一見ダメそうな木でも、削ってみて、いいのが出る場合があるんです。大当たりもあるんです。また反対に、いい木でも、表面に保護面があって、削ってみたら、中が虫食いとか、枯れ木になって、物にならない。もう丸々損して（笑い)。



世界最大の紅サンゴ。沖縄久米島近海で採取。重さ 105 ｷﾛ、H125×W95 ｾﾝﾁ。時価不明としているが 100 億近い？

加工業者は入札の時は、もう自分の勘が頼りです。それと、ボケサンゴが、明治時代から最上級のサンゴでしたよ。それもピンからキリまであって、透き通ってきれいな色が出るのもあるし、それが加工業者には最高の魅力なんですねぇ。入札の箱の中見て、当るか、当たらないか、これが僕らの楽しみでしたねぇ（笑い)。

高知とか神戸で入札ですか。僕らはもうとてもじゃないけど工場が忙しいから行けませんでした。吉浜サンゴさんなんかは、今でも材料は、高知に行って買っていますよ。

僕は独立して店持ったあとも、ここ殆ど沖縄での入札です。独りで加工やっていたから、サンゴは沢山必要なかったですから（笑い)。

（世界最大のサンゴの写真を指して）これが世界最大の紅サンゴですか？　桃サンゴ、これ採った所は久米島産とありますねぇ。台湾実業家が持っている。時価は不明だが、100億円近いわけですか。すごいですねぇ（笑い)。まぁ実際にはそれだけで売れるかどうか分からんけど。でも、これは加工には向かないですよ。加工するならいいもの取れない。こんな小枝の分しかできない。この根っ子の方は層がはっきり出ていて、磨いてもいい石は取れない。いい石が取れそうだと大体切りますよ、細かく。崩したらお金にもなるけども、これ崩さないということは、大きくて形がいいから飾り物にしたわけですねぇ（笑い)。

要するに装飾品としての価値では、世界一ではあるわけでしょう。だけど、材料取るとしては、世界一の材料ではないですねぇ（笑い)。

金銀の衣裳着けさせ　付加価値付けて　宝飾品に

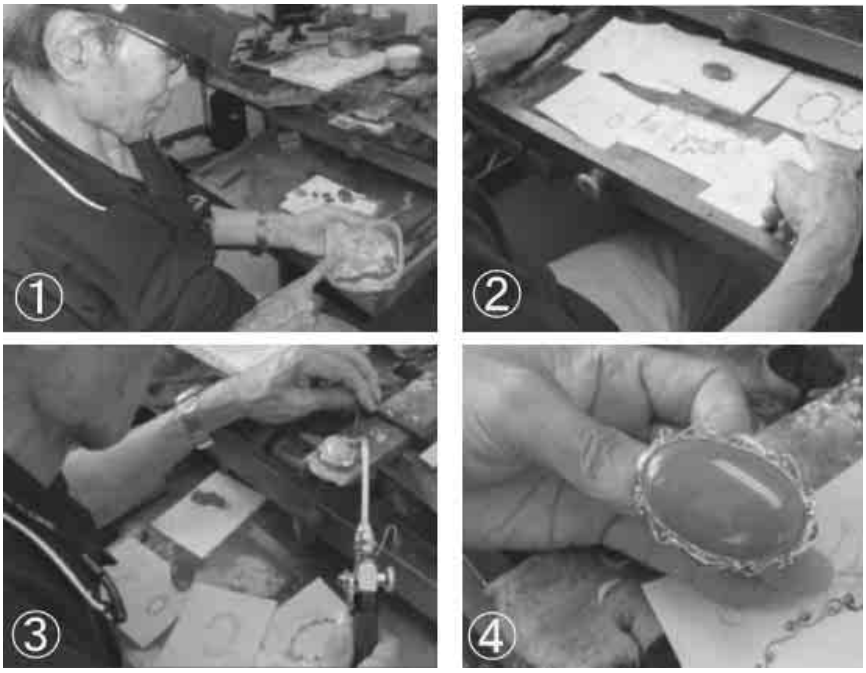
サンゴというのは、付加価値付けて、どうやって売るかが問題です。石だけ磨いても、そんなのは如何にもならん、玉でしかないですよ。そこに衣装着させて、金とか、銀とか、貴金属に合わせた宝飾品にして、初めて価値ができ、金にもなるわけです。

例えばペンダント、指輪、カフス、タイタックとかがありますねぇ。これを金銀、プラチナとかで取り巻くとか、衣装を上手に着せるとか工夫すれば、一段と価値が出ます。高価な宝飾品になるわけです。宝飾品は誇りになるようなものでなければダメです。二束三文のようなものなら、あとは捨てるのは目に見えていますよ。衣装着けさせて、付加価値付けて、高価な宝飾品にする。

サンゴは磨いて玉に仕上げ、金とかの衣装着けさせて、付加価値付け、高価な宝飾品で売るのが第一である

それはやっていて分かったから、社長に話したんだけど、そういう余力がないと（笑い)。僕がどっかに行って見習いするわけにもいかんから、既存の宝石の加工所ありました。徳田宝石とか、南さんとか、鹿児島辺りから来た人でしたけどねぇ、そういう貴金属加工の技工士さん達がいました。時たまそこ覗いたりしてましたけど（笑い)。そのあと三洋も、貴金属・宝石をやるんです。三洋宝石を、そしたら忙しくなって、そんな余裕ないから、結局やれなかったです。そのあといろいろあって、僕は三洋宝石を辞めて、独立して小さな店を持ったんですよ。それから少しずつ、自分で手掛けるようになった。もうその頃にはサンゴの店が幾つかできてました。その中には、加工製品を作って売るんじゃなく、サンゴをそのまま売るだけ、そのまま売った方が早いですもん。そういう業者がいましたよ。サンゴ店と看板あげて、店のコーナーで職人が加工している所も見せて（笑い)。あれはもう見せ掛けのデモンストレーションですよ。店を大きく構えて華々しくやってましたが、結局皆潰れてしまった。もう１箇所も残ってないです。

そういう売り方が、悪い評判になるしねぇ、高いものを買わされたわけで、行き詰ったんでしょう。僕が考えたのが正解だと思う。やっぱりサンゴは貴重なものですから、これを加工して、付加価値付けて、売ることが一番大事です。



①サンゴ磨いても玉でしかない。どんな宝飾品にするか決める。②これに合う宝飾をデザインする。③金をロウ付け加工し、貴金属衣裳を着けさせる。④サンゴの玉は素敵な宝飾品に生まれ変わる。

沖縄　舶来品ショッピング観光化　三洋　宝石貴金属にシフト

あの当時のサンゴ販売は、国際通りが中心だった。舶来の高級時計とか宝石店が並んでました。実際は宝石といって、あまり価値はない虎目とか、メノウとか、並べて、また売れてました。本土から観光客がドルが使えると、ポッケットにお金を突っ込んできて買うわけだから、沖縄でショッピング観光ということで、ドンドン増えてきましたよ。

1960年代の国際通り、ﾄﾞﾙが使えるため高級舶来の時計、皮製品を売る店が軒を連ねショピング観光通りとなった。車が左側通行になっている。(「那覇市歴史博物館提供」)

そうすると、三洋もどうしても宝石・貴金属は伸びるから、これにシフ

トして行こうということなったんです。またサンゴは酸化の問題もあって、そんなに利益に結びつかない。あとのクレームが大変だからと。それで、宝石・貴金属にシフトして行ったんです。僕は両方やらんといかんから、サンゴは少し疎かになってきたんです。

サンゴの酸化の問題ですか？　あれはカビの問題です。昔から保存されているきれいなサンゴがありますねぇ、あれは使っていないか、売る方が、酸化しやすいから、使ったあとはきれいに水洗いして拭いて下さいというのを守って、きれいに置いている方です。汗で酸化するから、指輪とか、ペンダント類は酸化しやすい、だから白くなります。帯留めとかブローチとかは服の上からやるから酸化しにくい。真珠もそういう傾向にあるんですけど、真珠よりはサンゴははるかに硬度はいいです。

で、三洋は、宝石・貴金属もやることになったら、従業員 2 名を甲府に宝石の研磨技術で派遣して、サンゴもやらなきゃいかんということで 1 人は高知に行かして、僕も彼らを連れて、甲府も高知も、いろんな所廻って勉強してきました。三洋は、その頃には、那覇大道の三洋釦工業所と、あと泊の沖縄漁船保険組合の 1 階に三洋宝石店、この 2 つに切り離してやってました。事業拡大した時期もタイミングがよくて、努力の甲斐あって、貴金属・宝石では儲けたんです。

33 歳　1967 年　独立して、サンゴ金属加工所　始める

そうしていたら、僕はたまたま交通事故に遭って、骨折して 3 ケ月ほど入院しました。その時にいろいろ考えて、33 歳なら、もう潮時だから、自分は独立しようかと、それで三洋宝石を辞めたんです。あそこは 18 歳から 15 年いました。昭和 27 年から昭和 42 年まで。

で、国際通りの安里に、根間宝飾店という看板掲げてサンゴ金属加工所を始めたんです。安里の蔡温橋のすぐ近くありました。僕が加工しながら、女房の竹子に売らしたけど。そのあと安里からパラダイス通りの松尾に移転したら、安里とは比べにならん位客が来ましたよ、相当繁盛しました。店開くには「地の利」があるんだと分かりました。

もう、その頃には国際サンゴ上地さんの所も職人を揃えて、自分の所で加工するように

那覇市松尾のパラダイス通りの根間宝石店。

加工したサンゴ指輪を前に店番している。

なってました。沖縄でもサンゴ加工する店が少しずつ増えてきました。

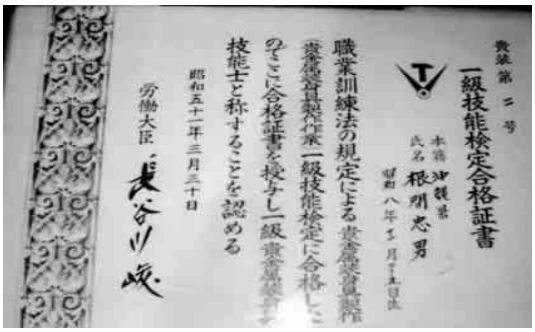
それから復帰ですから、復帰後は、観光客はドンドン増えてきて、国際通りに土産品店が軒を連ねて、観光客で賑わい始めたんです。もう活気に溢れていました。

僕もお土産品店をやろうと思うから、国際ショッピングセンターの店舗の売り出しの時に、松尾の店を処分して、無理して、あそこの 2 階の一角を買いました。あそこで、女房サンゴ、宝石・貴金属の店やりました。そして 1 階は約 90 坪ありましたよ。僕ら仲間 5 名が集まって共同であの場所借りて、各々のコーナー持って、土産品を売るわけです。

1 年交代で行こうじゃないかということで。あと海洋博があったりしたから、結構好調でした。だけど、この国際ショッピングセンターの店は、建物が老朽化しているということで取り壊すことになって、平成 10 年にそこ辞めて、それで今は、住宅があった久米町のビルに引っ越してきたわけです。

結局、僕は最初にサンゴやって、途中から宝石・貴金属をやって、あとはお土産品も売ってきましたが、サンゴ加工は、材料もあるから、自分 1 人やってきましたよ。いろんなお土産も売ってきましたけど、僕の本職はサンゴ加工です。

サンゴ加工は、材料もあるから、自分 1 人ずっとやってきましたから。復帰後に、労働大臣の検定試験というのがあってねぇ。金属加工技術検定試験とあって、まぁ合格したのは、城間宝石さんの職人と僕とで、僕はあとに取ったので 2 号になってます。これが技能検定証書です。


貴金属第二号
一級技能検定合格証書
本籍 沖縄県
氏名 根間忠男
昭和八年五月十五日生
職業訓練法の規定による貴金属装身具製作
貴金属装身具製作業一級技能検定に合格したこのたびこの合格証書を授与し一級貴金属装身具技能士と称することを認める
昭和五十一年三月三十日
労働大臣 長谷川峻

貴金属装身具製作 1 級技能検定証。（昭和 51 年 3 月）

内地デパートで　沖縄物産展　サンゴ製品　高知の業者？

こんなこともありました。復帰して 4､5 年あとかなぁ、当時は宝石組合があって定例会していたら、その席で、山田宝石さんが、根間君、悔しくないか、県の肝いり内地で沖縄物産展やっているけど、沖縄のサンゴ業者、誰も行ってないし、また声掛けもないって、そう聞いたもんだから、県庁に行って、担当に話聞いてみたんです。聞いたら、沖縄のいろんな特産品を全国のデパートを巡回して売っていたんです、毎月やっていたかなぁ、県がデパートと提携してですよ。その中にちゃんとサンゴコーナーがあって、高知の業者が売っているんです。沖縄サンゴとして（笑い）。それ悔しいじゃないですか。

じゃ僕が行くからと、行きましたよ。自分が加工した商品持って（笑い）。行ったら、こっちのコーナーはないんです。準備もされてない。やっとかっとコーナー隅っこに作ってもらって、まぁそこ利用しなさいというわけです（笑い）。沖縄のあらゆる特産品ありました。サンゴコーナー見ると、高知の業者が、中間業者がいましたよ（笑い）、卸もして、忙

しくして。こっちはよそ者で、とにかく冷たくあしらわれてるという感じ受けながら、持っていった自分のサンゴ製品を売りました。結局売れませんでしたねぇ。損しました、だいぶ（笑い）。いや、だって向こうは大手でやり手でしょう。商売としてはこっちは一介の職人ですから、やっぱりすごいですよ。経験ある商人というのは、物売るの上手だし、規模も違いましたから。

その後、県の担当に文句言いました。沖縄のサンゴ加工業者は苦しんでいる。現に販路に苦しんでいる。県は沖縄物産展と言っているからには、せめて沖縄のサンゴ加工業者から仕入れて、売るような所まで指導してくれ。県は沖縄の地場産業振興を政策にも掲げているでしょう。そのためにも、サンゴ産業をぜひ育ててほしいです、とそう強くお願いしましたよ。

加工・販売店の集い　10日会結成　今なお続く

お願いしたら、県は、分かりました。沖縄のサンゴ製品をできるだけ仕入れて、仕入れする様に仕向けて、販売させるようにしますと、協力を約束しましたよ。そしたら、これをきっかけに、私達も真剣になりました。サンゴ業を地場産業として育てなくちやいかんということで、それで10日会というのを作りました。加工販売業が集まって、主要メンバーは、吉浜サンゴさんに、上里サンゴさん、与那覇肇さんに、平良サンゴと、僕の 5 名ですか。ここで10日会が、サンゴ製品を展示販売するようになったら、内地から業者を呼ぶと、来ましたよ、仕入れに、こっちが連絡したら。

それと、あの内地のデパートの沖縄物産展、あそこには直接行った方がいいというんで、物産展の中に 10 日会で組み込まれて、行くようになりました。それが今でも続いてます。僕が行ったのは1回きり、です。

あの頃は、サンゴも、宝石・貴金属の加工も1人やっていて、家内の竹子に売らしてました。今度は、また国際ショッピングセンター1 階に、お土産のお店始めていて、とても手が回らなかったです。

だから、自分の注文加工するだけでも、やんややんや言われてましたから（笑い）。

三洋宝石は、1,2 回行ったけど、経費合わないといって行かない。山田宝石さんは行ったかなぁ、よく分からない。

国際ショッピングセンターでは土産品販売も始めた。加工までなかなか手が回らない。店で応対中の竹子。

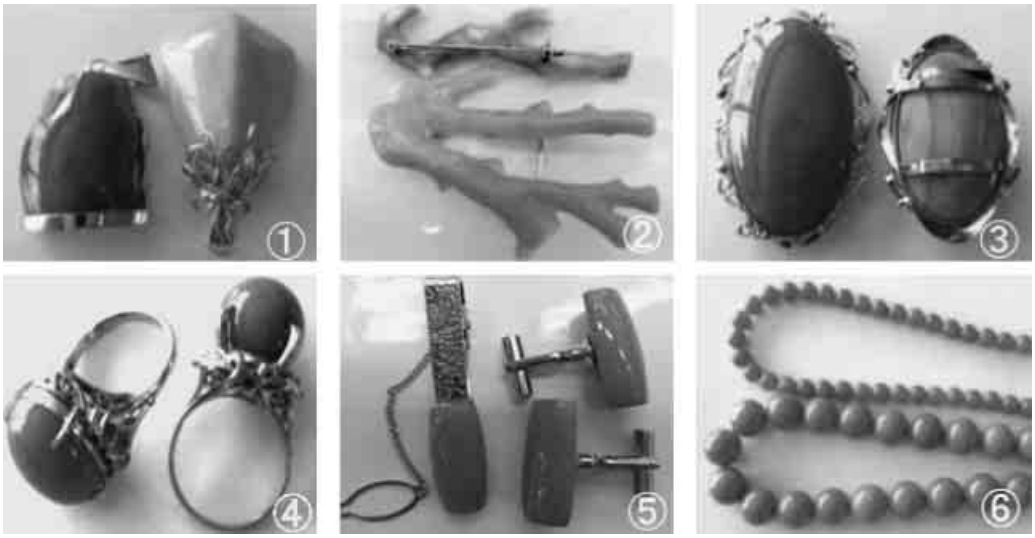
今でも、この物産展には 10 日会のメンバーの何人かは行ってますよ。行って、沖縄のサンゴ製品を出品して、全国回って販売しています。あそこで売るために頑張っています。もう一生懸命やっています。もう物産展なければやっていけない（笑い）。相当助かっていると思いますよ。今でも物産展は県が

主催？　いや、今は別の組織になったみたい、関東何とかいう団体に。この 10 日会ですか、今でも続いています。仲間うちで、月に一遍位は情報交換で集まって、もう 35 年以上は続いてますねぇ（笑い）。

復帰後　観光客急増　サンゴ製品　沖縄土産で人気

最初、あの国際通りの土産品店、宝石店で、サンゴ製品はなかなか売れなかったです。復帰前の沖縄に、珍しがってショピング観光で買いに来るのは、舶来品の高級時計、オメガとか、ワニ革製品のバック、ベルト、あとヒスイとか、オパール、エメラルド、ダイヤの指輪とかです。昭和 47 年 5 月の復帰後ですか、復帰したら、国内だから、もうパスポートが要らなくなって、観光客がドッと来るようになりました。来るようになったら、サンゴ指輪がよく売れ出したんです。それからいろんなサンゴ製品、ネックレス、カフス、タイピンとかも売れ出した。沖縄に行ったら、お土産はサンゴだ、サンゴ製品だ。これ買おう、これ買って来てくれと言って、沖縄サンゴは人気が出てきましたねぇ（笑い）。

サンゴ製品が次第に売れ出すもんだから、加工業者も少しずつ増えてきたですよ。昭和 50 年、確か 7 月頃だったかなぁ、沖縄国際海洋博覧会が、北部の本部町で開催されましたでしょう。あの開催が決まったら、いやもう沖縄中が、海洋博だ、海洋博だといって、海洋博　景気に浮かれていたというか、沸いていましたねえ。僕らも、相当観光客が来て、サンゴとかの土産物が売れるだろうと、期待してましたよ。もう海洋博始まる 1 年前から大変でしたから、サンゴ製品は人気があるから、どんどん売れ出しました。もう沖縄サンゴブームでしたよ。



サンゴ製品　①ペンダント　②ブローチ　③帯留め　④指輪　⑤ネククタイピンとカフス　⑥ネックレス

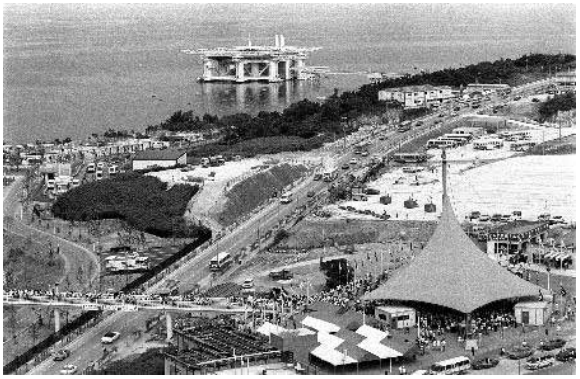
海洋博時　売上げピーク　品薄・品不足に便乗　安物乱売

パーとサンゴブームになってねぇ、ブームになったのはいいけども、サンゴ製品は作るやり方をちょっと見て、真似すれば、それすぐ加工できるんです。我々の世代の人はやることやってますから、見るだけで、すぐ真似できます。ということで、加工所が沢山できて、小さな俄か加工場が、もう 4,50 軒もできたです。大体が個人で、中に稼ぎでやっているような所もあるんです。で、そこで加工した物を持って来るわけです。

この品物見たら、被せている金属は安物で、加工も悪い。こんなものでも作れば、売れるからか知らんが、これじゃ粗製濫造です。粗悪品で、安っぽいから、値段も言いなりで、バラバラだから、二束三文で売る人も出てくるわけです。海洋博前でもこんな状態でした

海洋博が始まると、海洋博の期間は半年余りでしたかねぇ、昭和 50 年 7 月に始まって、翌年 1 月まで、その間、サンゴはもう飛ぶように売れました。その時が売り上げはピークで、一番盛り上がりました。もう飛ぶように売れましたから、沖縄で作るだけでは間に合わない。サンゴ製品は品薄で、品不足でした。内地からドッと入り込んで来たんですよ。

本場は高知ですから、加工だって何だって上です。向こうは加工業者も桁違いに多いし、それに商売も上手ですから。で、友人が品物を揃えたというので、僕はちょっと顔を出して見たんです。見てびっくりしました。もう安物、二束三文のサンゴ製品ですよ（笑い）。友人は、神戸の業者に、騙されたんじやないか、あんなのが売れるのかな、粗悪品だから売れるわけない。一目見て、そう思いました。それがもう倉庫にいっぱい並べてあるんです。海洋博時の品不足に便乗して、幾ら品不足、品薄だからといっても、サンゴの質も悪く、加工も悪い、あんな安物、あんな粗悪品がまかり通り、沖縄のサンゴ製品として売られたわけです。この品物を買ったお客さんも、このお土産をもらった人も、きっとガッカリしたはずです。これがサンゴか、沖縄の製品は、こんなに質悪く、貧弱か。実際あれじゃ、宝飾品として、粗雑品で、安っぽいでしよう。誰も身に付けませんですよ。



海洋博は昭和 50 年 7 月開催。30 ケ国が参加し活気を呈したが、終了後の後遺症は大きく、観光土産品業界も倒産続出。

終ると　売上げダウン　信用落して　命取りに

海洋博終わると、もう売れ行きはガタ落ちです。沖縄来て、サンゴ買っていく人達が、サンゴ、サンゴと言っていた観光客がドンドン減っていきましたよ。質の悪い、加工の悪い製品作って、二束三文で、乱売したから、あれで評判落として、沖縄サンゴの信用ガタ落ちしました。あれが命取りになったと思うけど。実際、国際通りで、もう千円とか、二

千円位とか安物売ってました。安物の金属使って、加工も悪い。そんなサンゴの宝飾品は、お土産にもらっても嬉しくないです。やっぱり宝飾品ですから、価値は売る方が付けにやいかん。欲を出すんじゃなくてねぇ、サンゴの価値そのものは守らにゃいかんです。

よく言われるように、ダイヤだって、シンジケートがなかったら、あれは石ころと同じ値段となっていたことは有名な話ですもん。もう質の悪い安物作って、投売りで、サンゴの人気落としたのは事実だし、いい物を作って出せばよかったんですけどねぇ。

真珠だって、選別して悪いのは全部割って捨てちゃう、陶器もそうですよ、焼きが甘いとか、上薬が飛んでいるとか、悪い物は割って捨てて、売りません。それで品質、価値を守ってます。サンゴもそうすればよかったものを、下手な加工でも、これサンゴ、サンゴだからと、何でも売っているわけです。とにかく儲ければいいと、それが大きい原因です。

サンゴの価値はどんなしても守らんといかん、いい例がミッドウエーのは白っぽい、その白っぽいサンゴは大量に出た時、サンゴの値打ちがグーンと下がったことがあります。あの時も安売りして。この点、高知の人達はしっかりしてます。値崩れを起こさないような加工も、販売も、しっかりしてますよ。

海洋博終わる頃には、もうサンゴ製品は売れないから、小さい加工所は全部辞めました。なくなりましたよ。もう 10 数軒は残ったかなぁ、そこらでしたねぇ。サンゴ加工所も少なくなって、作る人も減って、サンゴ製品は、沖縄から段々消えて行ってます。

沖縄 14,5 年で　採尽くす？　高知 江戸期から 今なお続く

皆がサンゴ辞めたのも、材料が来なくなったからでもあるわけです。殆どの加工所は内地に入札には行きません。材料はサンゴ採取業者から買ってました。その採取業者は、昭和 47 年の復帰あとには、もう殆どはいませんでした。おっても 2,3 の業者だけでした。

昭和 35 年にサンゴ採集ブームが起きて、昭和 42,3 年にはもうサンゴ採取は終わっています。あの時サンゴ当てた採取業者は、億単位で儲けたとか、ものすごく儲けたもんだから、お金はドラム缶に入れたそうですよ（笑い）。もう毎日夜の街を賑わして、豪遊して、あの時の使いぷり、ビールで足洗ったとかの話、今でも残ってますよ（笑い）。

だけで、サンゴは限りある資源だから、いつまでもあるわけないです。もう採れなくなってしまったら、今度は逆に、高利貸からも金借りたりして、資金繰りに苦しんでいたみたい。僕の店にも、採取業者が来ましたよ。なんかこう網を仕立てるのに、金が必要だと言うんでねぇ、2 回位訪ねて来て、お金出してくれと、これ揚ったからと、サンゴのサンプルを持って来たんです。そんなのあるから、絶対間違いないからと、要するに資本を出してくれ言うわけです。だけど、こっちは金なかった（笑い）。小さい店構えて、僕独りで加工して、家内が販売して歩く、もうこれだけで精一杯でしたから。

投資なんて、そんな余裕ないからと、話だけは聞いて帰しましたけど。

結局、彼が言うようには、うまく採れなかったみたい。それはそうですよ、サンゴ採取ブームの時に採り尽くしてるから。

結局、考えて見ると、沖縄のサンゴ採取は、14,5 年しか続かなかったですよ。たったの14,5 年間しか。サンゴ本場の高知見て下さいよ。あそこは江戸時代からやっていたとか、それが明治大正昭和でしよう。平成の今でも続いています。150 年以上も。聞いた話だと、サンゴ船は今も 60、70 隻もいて、中には夫婦 2 人でやっている船もあるそうです。どういう風にやっているか知らんけど、サンゴは自分達の大切な資源、これを大事に保護しながら、計画的に採取しているから、今まで続いているわけです。

サンゴを大漁したのか、カマス袋に入れて沢山積まれている。担いで陸揚げ準備。（中村幸裕 1963 年？）

沖縄の場合は、トイスーバーケー(採り勝負競争)して、もう乱獲ですよ、結局長続きしなかった。サンゴは限りある資源だから、あの時大事にすればよかったです。ダイヤだと、大資本家とかのシンジケートが抱え込んでいますねぇ、あの時サンゴもあんな感じで生産調整すればよかった。沖縄の船がサンゴ辞めて行かなくなったら、台湾のサンゴ船が来て、今度は中国船が押しかけて来たわけですよ。沖縄の海に勝手に入り込んで、サンゴを盛んに盗りまくってます。

漁師さんは沖縄はサンゴの宝庫、質のいいサンゴがまだまだあると言つてます。今度こそ乱獲しないで、貴重な資源として保護し、生産調整しながら、本場の高知を見習って、持続して採取できるようしてほしいです。ほんと、そう願ってますねぇ。

加工業者組合　作った　皆仕事こなすのに　精一杯

それと、あのサンゴ採取ブームの時に、ダメな物を加工するんじゃなくて、いい物だけを、きれいに加工して、立派な宝飾品にして販売していたなら、このサンゴ加工は沖縄の地場産業にもなっていたはずです。この点は僕ら加工業者、販売者にも責任ありますし、大いに反省してます。実は、僕らは加工業者の組合を作ったですよ、沖縄サンゴ貴金属組合というものを、最初の組合長は、三洋の仲間進社長がやりましたよ。10 数箇所位からスタートして、一番多い時は 44,5 箇所いたかもしれない。だけど半分以上は小さな業者、独りでサンゴ儲かるというもんだから、稼ぎでやってる所ですよ（笑い）。

だけど、加工の仕事って大変ですよ。朝から夕方まで機械に向き合って、一日中ホコリ被りながら、サンゴ切って、削って、磨いて、また艶出しして製品作る。職人ですから、しょっちゅう、それの繰り返しで、大変忙しいです。だから下手に加工してとか、製品安売く出していると言われても、実際毎日の仕事こなすだけで精一杯です。そこまで考える余裕ない。だから組合作っても、そこまでやるのは難しい。僕らも仲間同士で、4、5 名集まっては、酒飲みながら、いい物作って、また値段もシンジケートみたいに一定に決めて、

投売り、安売りもさせないようにすべきだとか、ワイワイしながら話してましたよ（笑い）。したけど、リーダーが格がいなかったからと言われたら、そうかもしれないけど。

結局は組合が力及ばずとう言うべきか、それで動けなかったというのが実情でした。職人同志の世界ですから、僕らではとてもやれない。これは行政のレベルじゃないかなぁ。これこそ、沖縄県の方で考えて、しっかりとやってもらわんといかん。

沖縄県　宝飾加工職人･技術者　育てる場　ほしかった

やっぱり加工職人ですねぇ、サンゴに限らず、貴金属宝石の宝飾加工職人、これを育てて行くという大事さを、僕は県が忘れていたような気がします。この職人を育てるのは難しいです。三洋が宝石やるというんで 2 人を甲府に派遣したことありますよ。僕が甲府まで行って預け来て、せっかく技術習得させても実らなかったです。帰ってきたらすぐ辞めました。知り合いの工場なんか、よその業者行った方がいい給与がもらえるとか、他の仕事が楽だからと、職人が全部辞めたこともあったです。こういう地味な仕事は、やっぱり情熱を持った人間じゃなきやダメですよ。確かに修業期間というのは厳しいけど､それ乗り越えなきゃあ、我々も、食うに困ったから乗り越えてきたわけです。職人というのは、昔から職人気質ってあるでしよう、自分の仕事を納得いくまで追求しますから、だから、1 人前の技術を持ちさえすれば、あとは自分の努力次第で、自分の技術を、才能を幾らでも伸ばせるんです。一流の宝飾加工技術者とか、宝石デザイナーとかもありますねぇ。まぁそこまでいかないにしても、沖縄県は観光産業に力も入れてますでしょう。沖縄の観光をこれから大きく発展させるには、お土産品産業を育てなければなりません。その中でも宝飾産業は可能性ありますよ。やり甲斐あります。この宝飾品は、他所から仕入れて販売もするけど、沖縄でも作って、これを沖縄の特産品して売るわけです。

サンゴ加工作業光景。海洋博が終ると、サンゴ製品も売れず、加工職人もいなくなった。県はもう一度育てる施策を。

衣装とかデザインで付加価値高めて、宝石・貴金属とか組み合わせて、豪華なアクセサリーとかです。これいろんなのが考えられますよ。とにかく、安物でなく、高級なもの、しかも世界に通用するような一流品を作るわけです。勿論、これは簡単にはできっこない。それをやるにも、相当時間も、金も掛かる。でも、沖縄観光は将来こうしたい。こうできたらいいなぁという将来像、これ青写真と言うのかなぁ、ぜひこの青写真は必要です。

この中で、観光立県を謳うなら、世界の一流ブランド目指す宝飾産業を育てて、沖縄観光の目玉にし、地場産業にするわけです。そうすれば、僕ら観光土産品関係者も夢が出て

きます。職人達も大きな目標と希望が持てて、仕事に励みが出てくるはずです。

宝飾品のコンクール、ああいうのを定期的にしたなら、皆技競って創意工夫して、精魂込めていいもの作ります。どんなすばらしい宝飾品を出てくるか、楽しみですよ（笑い）。

サンゴ青写真　イタリア・カメオ　お手本に！

サンゴは、宝石の中でも、とくに稀少価値があります。世界でも採れる所は限られています。（カメオを持ってきて）これねぇ、イタリアのカメオ、これ貝殻ですよ、何がこれの値打ち付けるかといえば、装飾です、装飾するから何 10 万円にも売れるんです。これはほんとに性もない貝です、万年貝という貝、この貝を切り込んで、彫刻が上手でしよう。

これ日本人が彫ったら日本人の顔になる、中国人が彫ったら中国人の顔になる。やっぱりイタリア人は上手いです。上手いから、その付加価値を付けて、国挙げて特産品にしている。成功している。サンゴでも、このカメオを見習って、イタリアみたいなことができたらいいですねぇ。サンゴをただ商品にするんじやなくて、独特の加工技術を施して、希少価値持たせて、沖縄の高級ブランドにするわけです、それは夢物語じゃないですよ。どうすれば付加価値のある商品ができるかを追及すべきですねぇ。そういう付加価値を付けることによって、宝飾品作る職人も育ち、仕事に目標も持てて、励みも出て、技術も向上していくわけです。

イタリアが世界に誇る宝飾品カメオ
沖縄サンゴ、これ見習うことできたら

ところが我々の周り見てみると、悲しい哉、職人はもう殆ど消えていない。いたとしても、指輪直しできる程度の人しかいない。前はいい職人、技術者は相当いました。今は殆どいません。しっかり育てなければいかん。いい感覚、センス持った若者は結構いますから期待できます。だけど、県の職業訓練学校なんか見ていると、今流行のＩＴというか、殆どがコンピュター関係ですよねぇ。この宝飾品加工職人を育てる場が必要です。また県立芸大か、琉球大学には、漆器とか、陶器、沖縄の伝統工芸だからと言うんで、専門コースあります。宝飾品デザインとか、結構技術レベルが高い分野だから、こういった関係のコースがあったら励みになります。沖縄県は、加工職人が育つ土壌と言うべきか、宝飾品の加工技術者人を育てる場を作ることを、真剣に考えるべきと思います。

沖縄近海　サンゴ豊富　中国サンゴ船　荒らしまわる

先ほど、中国サンゴ船の話をしましたねぇ、僕らは、昭和 35 年頃のあのサンゴ採取ブー

ムの時、沖縄のサンゴはもう採り尽くしただろうと思ってました。中国船が来て、サンゴ盗っている？　何盗っているか疑問でした。あの採取ブームの時に、深海 200 ﾒｰﾀｰ前後で、網引っ張って、サンゴ採るわけでしょう。どこに引っ掛かるか分からん、枝とか、折れて底に落ちますねぇ。中国船はあの時に折れた枯木サンゴとか、採り残した分とかを、盗っていると思ってました。だけど、漁師さんとか、専門家の方に聞くと、やっぱり、沖縄近海はサンゴ資源がもう豊富にあるんですって。この採取ブームが終わっても、八重山、与那国沖とか、尖閣列島、久米島近くでも相当揚っていたわけです。沖縄近海は、黒潮の通り道でもあるし、サンゴの宝庫、いいサンゴが沢山あると言ってますよ。

宮古近海でたむろして、サンゴ盗っている中国船。日中漁業協定が障害、逮捕できない（高杉忍 2014）

中国船は、このサンゴ狙って、沖縄の海に勝手に入り込んで、荒らしまわっているわけです。ほんと、沖縄の人は、ぼんやりしてますよ。宮古の宝山ソネとかでも、もうサンゴ盗りまくってますから。これ沖縄の貴重なサンゴ資源ですよ。こんなひどいことをしていても、沖縄の新聞は書かないし、沖縄のマスコミは関心もないです。全く中国船のしたい放題のですよ。その中の 1､2 隻が、たまたま領海内に入り込んできたら、巡視船が逮捕するわけです。新聞には、その程度ことしか載らないです。実際、全体が報道されないもんだから、中国船が、50,60 隻も集団で押しかけて来て、沖縄の海を荒らしまわり、サンゴ盗りまくっても、表になかなか出てこない、大きな問題にならないですよ。もう漁師さん、漁業関係者の皆さんはとても困っています。

血赤一番高い　中国人　値打ち付けた　与那国・尖閣　採れる？

そのあと、中国船は、今度は、小笠原の方に押しかけて行ったでしょう。もう 100 隻以上が、それで、日本中が大騒ぎして、もう国会でも問題なりましたねぇ。小笠原の海守れ、サンゴ資源を守れと言って。国会で、罰金を引き揚げて、海上保安庁も、中国船をドンドン逮捕して、取締まりを強化していますねぇ。中国では、血赤サンゴが高く売れるもんだから、血赤だ、血赤だと騒いでいると（笑い）、血赤は、小笠原辺りでも採れるから、血赤を狙って、小笠原に皆集まってきたわけです（笑い）。この血赤、一番高い、これ中国人が値段を釣り上げたんですよ。昔はボケが一番高かったです。ボケというは、桃がピンクになったもので、ボケはなかなか揚らなかったです。あの時分は赤は安かった。今は逆になって、赤が高い、ルビーに近いもんだから、赤は値打ちものになっている。その中でも、血のように真っ赤な、真紅で、少し黒っぽいかなぁ、これ血赤と言って、それが今一番高い、べらぼうに高いです。

中国人は昔からサンゴに関心があって、山サンゴ、あれは昔海だったのが隆起した関係で、ヒマラヤのチベットとかでも採れます。色は赤くもないが、赤く染めたりして、この山サンゴの値打ち付けたのも中国人です。中国人は金持っている。それにサンゴやたらと欲しがるわけです。だから中国人がシンジケートみたいに世界のサンゴの相場を決めてます。血赤の値打ちドンドン釣り上げて、もう、ダイヤ位に高いのもあるそうです（笑い）。

小笠原にも押し寄せてきた中国サンゴ船団。所狭しと網入れてサンゴ乱獲。(「ウエブサイト」より)

血赤が採れる場所ですか？　高知沖とか、奄美大島沖で、それと小笠原でも採れたと思う。小笠原でも採れたから、中国サンゴ船は、これ盗りに、押し掛けて行ったわけです。宮古の宝山？　あそこは主に桃です。血赤は少しは採れたかなぁ。あと、赤サンゴ、血赤採れるのは、尖閣列島とか、与那国近海、あそこ採れると聞いてます。よく分かりませんが、もしあそこで採れると分かったら、これ大事(おおごと)よ。中国船が、これ狙って、今度は尖閣列島に押し寄せてきますよ（笑い）。

中国船　沖縄に押しかける　日中漁業協定　廃棄を

漁師さんのお話を聞きますと、すごいらしいです。もう宝山なんかは一本釣りですか、マチ船なんかは、あっちは怖いから行けないと言ってました。もう全部中国のサンゴ船がサンゴ盗りまくって、この状態が何年も続いていますからねぇ。結局、沖縄の採取業者が行かなくなったら、台湾のサンゴ船が来て、またこの情報が中国に流れて、今度は中国船が押しかけて来たわけです。沖縄の海に、勝手に入り込んで、サンゴをどんどん盗りまくってます。沖縄の貴重なサンゴ資源をですよ。悔しいですよねぇ。漁師さんに、何で海上保安庁は取り締まらんかと聞いたら、もうびっくりしました。台湾船は検挙できるけど、中国船は取り締まれない。日中漁業協定でこの取り決めしているからと。こんな馬鹿なことがありますか。沖縄の海に、中国船が勝手に入り込んで、サンゴ盗っているのを、なぜ取り締まれないかと言ったら、この協定で、北緯27度以南の海域では、勿論尖閣まで入ってます。領海12ｶｲﾘ

沖縄近海、尖閣諸島も、血赤サンゴは有望。

に入らない限り、中国船は中国政府が取締まる、日本船は日本政府取り締まると取決めをしているからと。これじゃ中国船に沖縄のサンゴをどうぞ勝手に盗って下さいと言っているようなものです。しかも地元沖縄側に何の相談もなく勝手に決めた協定ですよ。中国船が、血赤が盗れるからと、沖縄近海に、尖閣列島に、押し寄せて来ても、この協定が邪魔して、保安庁は、とても取締りできないわけです。こんなおかしな漁業協定は、一日も早く廃棄してほしいですよ。

僕が最後に言いたいのは、尖閣列島も、沖縄近海も、サンゴの宝庫ですよ。血赤も、桃サンゴも、宝庫だから、沖縄のサンゴ漁業は早く復活してほしいです。

前に話した高知方式で、サンゴ資源を保護しながら、永続的に採取していく形で、一日も早く復活できることを願ってます。　（了）

※参考　巨大サンゴ 6010 万円なり　宮古島沖で採取

高知市内で 11 月 29 日に開かれたサンゴの入札会で、県漁連（下地敏彦会長)と新日本海事（和知清社長)が共同で宮古島沖で採取した巨大桃色サンゴが出品され、横浜市のさんご装飾品販売業者が 6 千 10 万円で落札した。桃色サンゴは横の全長 1.7 ㍍、高さ 1.1 ㍍、重さ 67 ㌔で世界最大級という。落札額も入札会の最高額を記録した。

落札した業者の代表者は「約 50 年間サンゴにかかわってきたが、これほど立派なサンゴは初めてと話した。入札は、深海潜水業務の新日本海事（東京)が年 2 回、高知市内で開催しており、毎年 50 社のさんご業者が参加している。

サンゴ採取には県知事の漁業許可が必要。県は無人潜水艇など他の水産物に影響を与えない手法で、選択的にサンゴを採取する場合に限り許可を与えている。業者には毎年、採取量の報告を義務付けている。　（沖縄タイムス.2006 年 12 月 2 日）

※参考資料１　―尖閣諸島におけるサンゴ採取高

尖閣諸島におけるサンゴ採取については琉球政府の「さんご漁業生産報告」の一部が沖縄県公文書館に保管されている。この報告から採取状況が大凡推測できる。これを以下に紹介する。

サンゴ採取高　　1967年（昭和42年）5月以前

昭41年6月	宮古島平良市	第三新徳丸	小橋川長助	赤尾島	17.0㌔
10月	宮古島平良市	第三新徳丸	小橋川長助	赤尾島	4.0㌔
昭42年5月	宮古島平良市	第三新徳丸	小橋川長助	赤尾島他	1.8㌔
5月	宮古島平良市	第八宝央丸	慶田清稀	赤尾島	50.8㌔
5月	宮古島平良市	第十八住吉丸	前西原豊	赤尾島	7.5㌔

（「1966、67年・さんご漁業生産報告」琉球政府農林局）より

1967年6月、魚釣島沖合で、新にサンゴ漁場が発見された。「琉球サンゴ漁業組合（柴田重利組合長）所属の方興丸（28㌧）は、・・魚釣島北方12マイルから16マイル沖合いでサンゴの漁場を発見、同漁場から桃サンゴ 35㌔余を採取した・・また同じ組合所属の福島丸（28㌧）も同じ場所から桃サンゴ 20㌔を採取した。まだ資源調査をしたことがないのでどのくらいの量があるかわからないが、かなり有望だと柴田組合長はいい、サンゴ漁船はこの沖合で操業するよう呼びかけている。(1967.06/08・琉球新報・「新サンゴ漁場を発見、柴田組合長“かなり有望”」)

これを契機に、尖閣諸島沖合でサンゴ漁が急増している。

サンゴ採取高　　1967年（昭和42年）5月以前

6月	宮古島平良市	第18住吉丸	前西原豊	赤尾島	7.5㌔
8月	宮古島平良市	第18住吉丸	前西原豊	赤尾島	18.7㌔
6月	宮古島平良市	振揚丸	伊波幸夫	魚釣鳥沖	36.1㌔
7月	宮古島平良市	振揚丸	伊波幸夫	魚釣沖	58.0㌔
6月	宮古島伊良部	昇得丸	池間幸雄	黄尾崎	20.0㌔
7月	宮古島伊良部	昇得丸	池間幸雄	黄尾赤尾	25.0㌔
10月	宮古島伊良部	昇得丸	池間幸雄	黄尾赤尾	10.0㌔
6月	宮古島平良市	第八光徳丸	上地晃晴	赤尾島	7.5㌔
7月	宮古島平良市	第八光徳丸	上地晃晴	赤尾	―
7月	宮古島伊良部	昇山丸	長崎キヨ	黄尾赤尾	5.0㌔
8月	宮古島伊良部	昇山丸	長崎キヨ	黄尾赤尾	10.0㌔
7月	宮古島平良市	瑞光丸	伊良部平盛	赤尾島	10.7㌔

7 月	宮古島平良市	珊金丸	砂川鎌吉	尖閣列島他	13.0 ㌔
8 月	宮古島平良市	珊金丸	砂川鎌吉	尖閣列島他	5.5 ㌔
10 月	宮古島平良市	珊金丸	砂川鎌吉	尖閣列島他	3.2 ㌔
7 月	宮古島平良市	第三盛福丸	久貝藤一	魚釣島	5.0 ㌔
8 月	宮古島平良市	第八宝興丸	慶田清稀	赤尾島	20.0 ㌔
8 月	宮古島平良市	第八幸集丸	内間武雄	尖閣列島	5.5 ㌔

（「1966,67 年度・さんご漁業生産報告」琉球政府農林局）より

サンゴ採取高　　1970 年（昭和 45 年）5 月~10 月

6 月	宮古島平良市	第八宝興丸	慶田清稀	尖閣列島	13.7 ㌔
7 月	宮古島平良市	第八宝興丸	慶田清稀	尖閣列島	43.5 ㌔
8 月	宮古島平良市	第八宝興丸	慶田清稀	尖閣列島	23.4 ㌔
10 月	宮古島平良市	第八宝興丸	慶田清稀	尖閣列島	11.2 ㌔
6 月	宮古島平良市	第 18 住吉丸	前西原豊	尖閣列島	3.7 ㌔
7 月	宮古島平良市	第 18 住吉丸	前西原豊	尖閣列島	18.7 ㌔
8 月	宮古島平良市	第 18 住吉丸	前西原豊	尖閣列島	15.0 ㌔
9 月	宮古島平良市	第 18 住吉丸	前西原豊	尖閣列島	11.2 ㌔
10 月	宮古島平良市	第 18 住吉丸	前西原豊	尖閣列島	15.0 ㌔
5 月	那覇市二中前	第 2 福泉丸	大城清一	魚釣島沖	11.0 ㌔
6 月	那覇市二中前	第 2 福泉丸	大城清一	魚釣島沖	18.0 ㌔
7 月	那覇市二中前	第 2 福泉丸	大城清一	魚釣島沖	11.0 ㌔
8 月	那覇市二中前	第 2 福泉丸	大城清一	魚釣島沖	15.0 ㌔
9 月	那覇市二中前	第 2 福泉丸	大城清一	魚釣島沖	22.0 ㌔
10 月	那覇市二中前	第 2 福泉丸	大城清一	魚釣島沖	8.0 ㌔

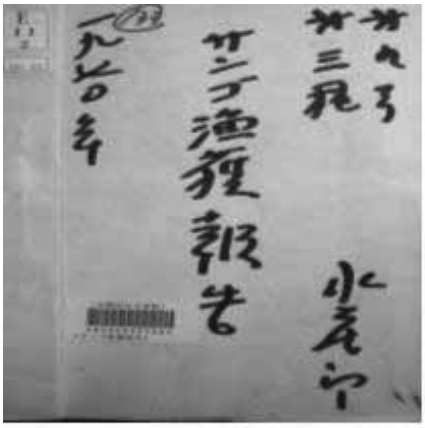
（「1970 年度・さんご漁業生産報告」琉球政府農林局）より

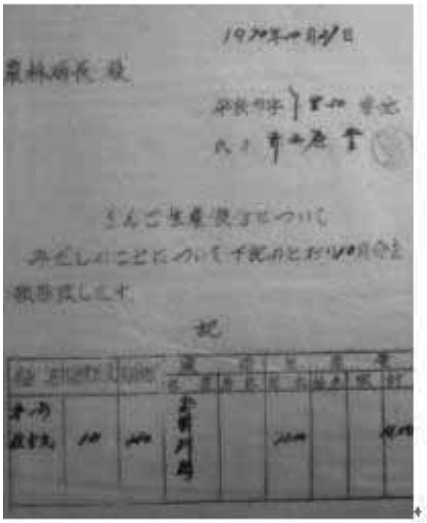
サンゴ採取高　　1971 年（昭和 46 年）3 月~10 月

3 月	宮古島平良市	第八宝興丸	慶田清稀	尖閣列島	48.7 ㌔
4 月	宮古島平良市	第八宝興丸	慶田清稀	尖閣列島	53.2 ㌔
5 月	宮古島平良市	第八宝興丸	慶田清稀	尖閣列島	21.7 ㌔
6 月	宮古島平良市	第八宝興丸	慶田清稀	尖閣列島	91.1 ㌔
7 月	那覇市壷屋	日吉丸	小渡カマド	黄尾島	153 ㌔
8 月	那覇市壷屋	日吉丸	小渡カマド	黄尾島	41.5 ㌔

3 月	糸満町字糸満	第八金栄丸	岸本永助	尖閣付近	28.4 ｷﾛ
4 月	糸満町字糸満	第八金栄丸	岸本永助	尖閣付近	34.6 ｷﾛ
5 月	糸満町字糸満	第八金栄丸	岸本永助	尖閣付近	42.6 ｷﾛ
6 月	糸満町字糸満	第八金栄丸	岸本永助	尖閣付近	42.8 ｷﾛ
7 月	糸満町字糸満	第八金栄丸	岸本永助	尖閣付近	62.1 ｷﾛ
8 月	糸満町字糸満	第八金栄丸	岸本永助	尖閣付近	72.4 ｷﾛ
9 月	糸満町字糸満	第八金栄丸	岸本永助	尖閣付近	91.6 ｷﾛ
10 月	糸満町字糸満	第八金栄丸	岸本永助	尖閣付近	118 ｷﾛ

(「1971 年度・さんご漁業生産報告」琉球政府農林局)より





左上：1970 年度さんご漁業生産報告綴り、左：報告の一部、前西原豊氏が 10 月分について、第 18 住吉丸、操業日数 10 日間、尖閣列島で生木 15.00 ｷﾛ採取と報告。右：農林局長宛、サンゴ生産証明願い。操業期間 1971 年 3 月から 10 月、生木 180.33 ｷﾛ、枯木 119.7 ｷﾛ、虫木 193.43 ｷﾛ、計 493.46 ｷﾛ、尖閣列島付近にて採取生産したものであることを証明下さるようお願い致すとしている。

なお、1976 年(昭和 51 年)の尖閣諸島海域へ出漁状況表(「尖閣諸島海域の漁場利用について」沖縄県 178.11)には宮古漁協の所属船 2 隻が操業、水揚げ 350 ｷﾛが報告されている。

※参考資料２　―わが国における産地別サンゴ漁業の状況

サンゴ船の隻数と採取量　（昭和 54～56 年度）

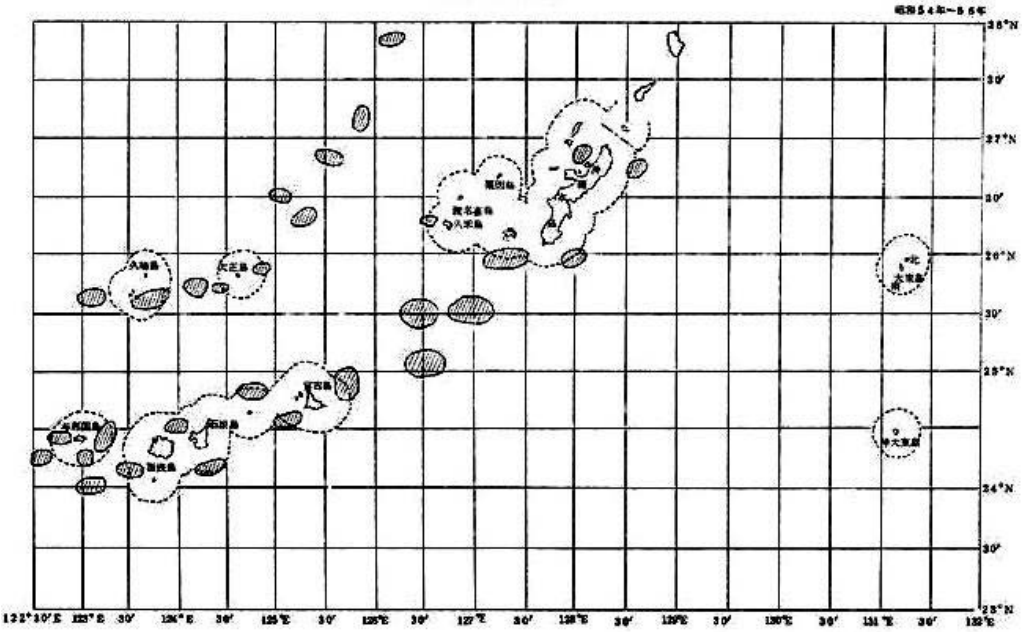
知事認可隻数(稼動隻数)

	東京都	高知県	長崎県	鹿児島県	沖縄県
54 年	17（6） 1074 ｷﾛ	581（581） 5400 ｷﾛ	30（30） 856 ｷﾛ	11（9） 770 ｷﾛ	2（1） 210 ｷﾛ
55 年	19（10） 1273 ｷﾛ	583（583） 4220 ｷﾛ	30（22） 331 ｷﾛ	8（7） 821 ｷﾛ	3（2） 191 ｷﾛ
56 年	19（11） 1789 ｷﾛ	473（473） 5544 ｷﾛ	30（18） 154 ｷﾛ	5（5） 687 ｷﾛ	2（1） 47 ｷﾛ
56 年 漁船規 模別数	0～20 ﾄﾝ 9 隻 50～100 ﾄﾝ 5 隻 100 ﾄﾝ～　5 隻	3 ﾄﾝ未満　62 隻 3～5 ﾄﾝ　416 隻 5～10 ﾄﾝ　60 隻 10～25 ﾄﾝ 40 隻	5 ﾄﾝ未満 12 隻 5～10 ﾄﾝ 16 隻 10～20 ﾄﾝ 2 隻	5 ﾄﾝ未満 2 隻 5～10 ﾄﾝ 2 隻 15~20 ﾄﾝ 1 隻	19 ﾄﾝ 1 隻

なお、東京都については 56 年度を見ると船籍内訳は東京 11 隻、静岡 2 隻、高知 6 隻。

（「わが国さんご漁業の現況（昭和 57 年 5 月）水産庁振興部沿岸課」より）

沖縄県さんご漁場図　（昭和 54 年～56 年）



（同上「わが国さんご漁業の現況（昭和 57 年 5 月）」より）

正木譲　まさき　ゆずる　　(琉球政府気象庁)

1934 年(昭和 9 年)　石垣島石垣町に生まれる。81 歳(2015 年時点)。

父正木任は 1940 年、農林省南西諸島資源調査団の一員として尖閣諸島を調査する。早世した父の遺志を継ぎ気象業務の道に入る。石垣島測候所、与那国島測候所勤務を経て、八重山気象台観測係長、与那国島測候所長となる。1972 年復帰後は、石垣島地地方気象台予報官、沖縄気象台観測課長、那覇航空測候所長、南大東島気象台長を歴任する。氏も父と同様に尖閣諸島に関わった。尖閣調査の思いでと併せて、気象歴 45 年の中でとくに印象深かったという与那国測候所時代の体験を語ってもらった。

昭和 14 年　農林省調査に同行　尖閣 5 島調査

―　高良鉄夫先生は 1950 年に戦後初の尖閣調査をなさった。お父さんの「尖閣群島を探る」の論文を読んで、情熱を燃やして行かれた。これは正木さんのお蔭と仰ってましたが。

正木：父は昭和 14 年、農林省資源調査団と一緒に尖閣に調査に行った。あれはグアノがあるかどうかの調査だった。小林純さんという技官なんかと一緒に行った。僕はあとで分かったけど。その調査に便乗したわけです。だから許可したのは当時は大和順一所長か、昭和 14 年だから、その前の喜田豊一所長だったかなぁ。尖閣列島の調査に行って、「採集と飼育」という雑誌に書いたのが「尖閣群島を探る」(1941 年 4 月号)です。

それに私が国民学校 2 年生の時に、父は亡くなっていたので、尖閣列島の話を聞いたことはなかった。ただ、父の書斎には尖閣から採ってきた昆虫などの標本も沢山ありました。写真も、幾つかの鳥の剥製がありました。カツオドリとか、セグロアジサシとかはよく憶えています。論文見るとクロアシアホウドリの剥製が写っているが、それは全く記憶にない。その頃は北小島に生息していたわけです。あの中に北小島でセグロアジサシが乱舞し、帽子被った人が竿を持って鳥を叩き落としている写真があります。この人の話を聞いたことがある。調査から帰ってきた時かなぁ？　こっちは鳥が沢山おって、竿で自分が叩いたよ。これが自分だ。竿を一振すると 2､3 羽は落ちたと言いました。この人の名前は忘れてしまった（笑い)。もう空一面セグロアジサシの大群ですねぇ。

北小島のセグロアジサシの乱舞。竿一振りすると 2,3 羽落ちた。竿で自分が叩いた。これが自分だと話していた。

高良先生もこの写真を見て、尖閣列島に情熱を燃やされたんでしょう。私もこの写真を見る度に行ってみたいと思ってました。昭和 43 年ですか、私も伊志嶺安進さんと一緒に、

尖閣の海洋調査に行きました。高良先生と一緒に南小島に上陸しましたが、先生は海鳥がだいぶ少なくなっていると嘆いておられました。

天然記念物指定し　海鳥保護を　貝新種３種 発見

父は「僅か 2 週間の採集にて、陸産貝類の新種 3 種を発見した・・・昆虫類その他にも新しきものの発見されることを期待してゐる。魚釣島の原生林の保護、北小島でセグロアジサシの大群、黄尾嶼の鰹鳥及び水凪鳥等の濫獲の取締り等は緊急必要なことで、セグロアジサシの繁殖地として天然記念物の指定をなし、北小島への上陸禁止措置をやつて欲しいと思はれる」（「尖閣群島を探る」）と書いてます。高良先生も同じことを書かれていますよ。

前列：クバの葉を与那国から魚釣島に採取にきた人達。
後列左：古賀商店支配人多田武一氏、右：正木任

台湾漁船がヒナ、卵を濫獲して、このまま放置すれば、尖閣の海鳥は滅びてしまうと警告されています。父達が行った昭和 14 年頃は太陽の光は遮られて、空がかき曇る位ものすごい数ですからねぇ。別の写真に無数のセグロアジサシが地上で抱卵しているのがあります。「鳥は全部風の吹いてくる方向に向いている」と説明してますが、この簡単な文に、父の自然観察の眼を感じましたねぇ。きっとこのような観察眼は、父の上司だった岩崎卓爾所長の影響だったと思います。

父達は、魚釣島と久場島で陸産貝の新種 3 つ、多田武一さんがアツマイマイとタダマイマイ。父がマサキベツコウマイマイを発見してます。高良先生も、魚釣島と南小島で、タカラミノギセルとセンカクコギセルの 2 つを発見してます。

岩崎卓爾　尖閣調査　立役者かも

―　お父さんは岩崎卓爾の愛弟子と言われています。高良先生も子供の頃は、天文屋の岩崎さんから尖閣の話を聞いたりして、八重山の自然だけではなく、尖閣の自然のすばらしさも教わったと仰ってました。岩崎さんは尖閣調査の立役者かもしれませんねぇ。

正木：尖閣のことはよく分らんが、八重山の自然の調査研究の先駆者、功労者です。

イワサキゼミ、イワサキクサゼミ、イワサキシロチョウ、イワサキハブとか、イワサキが冠した昆虫は 10 種類、ハブは 2 種類もありますから。八重山の自然の調査研究が今日のように進展したのは岩崎さんのお蔭です。尖閣の調査研究にも貢献したかもしれん。

高良先生は話してました。先生が八重山に来た時は小学 2 年だったから、何も知らなかった。ヤギの草刈りや薪取りが日課で、それで山に行ったら岩崎さんに出合う。出会うと

八重山の自然のすばらしさ、尖閣のことをいろいろ教えてもらったわけです。

そしたら海の向こうに海鳥の楽園があって、無数の鳥が乱舞している。これが古賀の無人島という島だと（笑い)。

高良先生はこの話を岩崎さんから聞いて、イメージを逞しくして、いつかは行ってみたいと思ったんでしょう。時々は草刈、薪取りしている時手を休めて、この島はどこにあるかと探したわけです。名蔵原頭に立って、はるか沖を見たら、西表の北の方にかすかに小島が見えた。鳩間島ですよ。先生はあれをずっと古賀の無人島と思っていたらしい（笑い)。

八重山測候所の正門玄関に立つ岩崎卓爾

それを岩崎さんに、尖閣列島は、東シナ海にある絶海の孤島だと教えられた。どんな島で、そこにはどういって自然、生き物がいるかをいろいろと教わったはずですよ。

僕の父も、岩崎さんから、教えを受けて、自然に対する研究姿勢とか、観察眼とか、相当影響されましたです。愛弟子と言われる位愛がられたようです。父もマサキウラナミジャノメとか、マサキが冠した昆虫4種類を発見しています。

岩崎さんは昭和12年68歳で亡くなりました。僕が3歳の頃ですから覚えていません。昭和7年に63歳で測候所を退職しましたが、その頃はもうお年ですから、山野を跋渉したりはなかなかできんです、離島に行ったりも。それで皆岩崎さんを訪ねて来る学者、そう言う人達を、父は皆を案内しているうちに非常にいい勉強になったんでしょうねぇ。お蔭で江崎梯三先生とか、安松京三先生とか、もう世界的な生物学者ですよ。そういう人達と交わることができたわけです。

戦時中　中央気象台　尖閣へ　測候所設置　計画

―　話はいきなり飛びますが、昭和18年頃ですか、中央気象台は、尖閣諸島に測候所設置を計画して、石垣島測候所に、軍事極秘で、尖閣調査を依頼しますねぇ。

正木：僕はその頃7歳ですから、そのこと何も知らんです（笑い)。20歳で測候所に入ったから、この戦時中の話を記録文書見て知った。書類がこんなに沢山綴られている。

軍事機密資料だから、戦局が逼迫してくると、中央気象台とのやり取りも暗号電報になりますねぇ。これ幾つかコピーしたのがあります。(そのコピーを持ってくる)

その時は父は行ってない。東京の高等講習に行って、気象技術官養成所(現気象大学校)の講習ですよ。で、帰りは門司から台湾廻りで帰る途中に、与那国沖で潜水艦にやられて亡くなっています。昭和18年3月に。そのあとだから、この件は内川規一さんが中心だったはずです。内川さんは、復帰後の沖縄気象台の初代台長やった人です。この方が東京の

中央気象台（現気象庁）から派遣されて、石垣島測候所にきた。台長は有名な藤原咲平博士で、あの新田次郎の叔父さんです。

これが尖閣群島調査報告書(第一号)です。大和順一所長名になっているが、書いたのは内川さんです。古賀商店の古賀善次さん、伊地柴贇さんから話を聞いて、あとは黒岩恒の「尖閣列島探検記」とか、父の「尖閣群島を探る」を引用して書いてます。

軍事極秘

尖閣群島調査報告書(第一号)。当時の情勢下では測候所建設は軍事極秘扱い。

最初に「位置」「由来」があって「停泊設地状況」を書いて。これ見ると尖閣は潮が速くて、波が荒いし、ちゃんとした港がない。台風が来たら、船を陸揚げせんといかん、港の問題、シケになった時や台風時の問題があるから、魚釣島の掘割を、報告書では船着場と書いている。ここを改修して使うとか、また船着場の奥にあった巻揚げ機の施設、あれは長い間使っていないからどうなってるか。「・・放置すること久しく崩壊せるも有りと想像さる」と心配している（笑い)。

また「毒性動物の棲息状況」と「地形地質状況」もしっかり書いている。「既設施設」に写真を添えているが、この写真はないけど、「同船着場の近くに古賀商店の作業場あり、右は暴風に備へ高さ約 3 米、幅 2 米、長さ 120 米に達する長大なる石垣積の防風壁中にあり」とあるから、あの古賀村の写真だと思いますねぇ。また「同所には更に角石積貯水槽 2 箇あり飲料水は豊富」とある。この貯水槽の写真は、父が「尖閣群島を探る」に写真を載せてある水槽ですねぇ。

魚釣島　山頂 362 ﾒｰﾀｰと山麓　黄尾嶼 116 ﾒｰﾀｰに

―　測候所建設候補地として、やっぱり魚釣島が候補に挙がったわけですか？

正木：候補地として、魚釣島と黄尾嶼(久場島)の 2 つを上げていますねぇ。「測候所建設候補地ニ対スル考察」にはこうあります。「島ニ測候所建設スル際ニ於テハ航空路ヲ全般ニ視察シ得ル地点トシテ標高三六二ヲ中心トスル一帯ヲ挙ゲ得ラル」と、そして「標高三六二視界ハ四面何方モ遮ル物ナキ点ヨリ考察シ雲霧ニ遮ラルル以外ノ場合ハ良好ナル観測結果ヲ得可キ事ヨリ工事　易経費多過ニ係ラズ測候所施設ノ要アリト信ンズ、但シ山頂

魚釣島の最高峰奈良原岳(362 ﾒｰﾀｰ)が候補地。航空気象データーを得るには最適地とされた。(多和田真淳 1952)

ニ於テ雲霧ニ其ノ視界遮ゲラレタル場合ノ補助観測所トシテ山麓タル船ノ発着場附近ニ若干ノ施設ヲ行フ要アルベシ」と考えて、魚釣島の山頂、あの奈良原岳の山頂を候補地に挙げています。だけどやっぱり雲霧に閉ざされる心配したんでしょう。

黄尾嶼の一番高い所は 116 ﾒｰﾀｰはあるから、そこは雲霧に閉ざされる恐れない。そこは「四面何方モ遮ル物ナキ点ヨリ考察シ航空気象上良好ナル観測結果ヲ得可キ事期待サル」として、候補地に挙げてます。それから見ると、尖閣は台湾航路の要衝にあたるから、航空気象のデーターを採るために測候所建設は必要だったわけですねぇ。

敵性艦隊出没　山砲設置し　四方砲撃し得ること

―　中央気象台長の藤原咲平。あの人は豪胆な人だったんですねぇ。莫大な金が掛かる上、食料の補給とか維持を考えれば大変だが、これを承知で建設計画したわけですから。

正木：藤原咲平台長はほんとすごい人ですよ。建設費用も莫大なものだし、それに食料の補給も大変です。防波堤も、300ﾄﾝ級の船が入る港も造らんといかんとある（笑い）。

魚釣島の場合だと、山頂測候所と山麓観測所を造り、耐震耐風のある鉄筋コンクリート造りとする。この観測所の他、「合宿所建設　食堂、厨房、等ヲ建設シ適当ナル渡廊下ヲ以テ連結スルヲ要ス」。また「舎ニハ晴雨計室、事務室、図書室、調査室、所長兼応接室、工作室、器械室、化学分析室、便所等ヲ必要トシ重油倉庫ハ地下室的ニ築造スルヲ要ス」とある（笑い）。こんな観測所ができたらすごいよ。

中央気象台、左上：尖閣諸島測候所建設に熱心だった藤原咲平台長

その他に「山頂、山麓間道路、電話開設」「電信設備」も計画しているから、ほんとすごい（笑い）。もう人間も、所長、主任、観測員、通信士、雑役人夫、全部入れて、これ何名かなぁ、15名から20名は要る。これの食料補給も大事だ。米、味噌、缶詰とかは輸送して、「野菜果物等ハ現地適当ナル地域ヲ開墾シ雑役夫ヲシテ栽培セシム、魚類ハ雑役夫等ヲシテ漁セシム」。

それに戦時中だから、武装もせんといかんとある。「敵性艦船出没スル事アルヲ以テ次ノ武装行ヲヒ万全ヲ期スル必要アリ」として「１、山砲又ハ機関砲　屋上ニ設置シ四方砲撃シ得ル　ニスル事必要ナリ、２、重機関銃二ケヲ　山頂ニ設置スル必要アリ、３、軽機関銃　一ケヲ　山麓ニ設置スル必要アリ、４、小銃　勤務人員全員ニ亘ル必要トス、但シ右ハ軍部人員派遣アル場合ハ其必要ナシ」。これは、ほんとに壮大かつ豪胆な計画だ。さすが藤原台長だよ（笑い）。

戦況逼迫　資材も止まり　計画　立ち消え

―　現地調査はどうなったわけですか。

正木：これ調査予定の 9 月頃から暗号に変わっている。調査人員、調査区域、日程も決まり、海軍艦艇の島来丸かなぁ、これに便乗して出発を待つだけだったんです。内川さんが行きます。石垣測候所からは大和順一所長と外間永起さんが行ったはずです。

大和所長は陸軍上がりでシナ事変の戦車隊の隊長だったとか、やっぱり気象官養成所本科出ではあるんですが。また外間さんは水産学校出で、船に強かった。奥さんは測候所の同僚でした。僕はよく可愛がってもらったです。これが 9 月 29 日の帰任報告です。魚釣島だけ調査してます。こうあります

魚釣島調査帰任報告
暗号電報

「全島山岳にして特に山頂は巨岩累積し且つ両側共に切り立って大規模の爆破を行うに非ざれば建築用地を得られず」「風向風速は地形の影響甚しく？視界等、観測は雲霧の為は支障甚しき？見込みなり、該地に建設は却て良好・・」。欄外に「多数の費用を要する割に観測結果良好ならず」と書いてある。この久場島は天気悪くて、上陸できなくて、「今後適当の機会まで」とある。護衛する海軍掃海艇の都合で延び延びになって、結局 12 月ですねぇ。12 月になると冬の海は荒い、北風が強くなります。12 月 2 日の電文には、「もはや当地方一帯季節風の卓越する期間と相成り、明春の期間まで実施すること困難」となった。昭和 19 年 1 月 8 日には、中央気象台藤原咲平台長から「その重要性に鑑み極力努力仕候も時局下資材を要する新規事項は全般に亙り不可能な状況にありて本件も明年度予算不成立上相成致処今後魚釣島方面気象機関要は益々重大と相成べく本台としても明後年に於いて之が予算獲得に努力致す予定に有之候に付き右御含みの上一応現地調査を打切と致され度此段及回答候也」とあります。そのあと那覇は 10.10 空襲でしよう。尖閣列島の測候所の設置計画は戦争で立ち消えたわけです。

終戦直後　設置計画　再燃　比嘉所長　意欲燃やす

―　戦時中のこの計画は、戦争で消えて失くなったわけですねぇ。でも、戦後再び、終戦直後の早い時期に、比嘉正雄所長によって計画されるわけですねぇ。正木さんは高校の地学の授業で比嘉所長からしょっちゅうこの話聞かされたそうですが。

正木：そうでしたよ（笑い)。比嘉さんは青島の所長やっておったです。東京に引き揚げてきて、すぐ比嘉さんは、石垣の所長を命令されるから家族皆連れて、昭和 21 年八重山に来たんです。そして、昭和 28 年まで 7 年間所長されてました。石垣島測候所に来たら、戦

争中の測候所造ろうというこの計画書があったでしょう。「・・今後魚釣島方面気象機関要は益々重大と相成べく本台としても明後年に於いて之が予算獲得に努力致す予定に有之候に付き右御含み・・」とあるでしよう。あぁこれぜひやるべきだ。やっぱり台湾坊主の発生、これが分からんとどうにもならない。で、それを推し進めるわけです。

比嘉所長は八重山高校で地学教えていたんですよ。あの頃は理科の先生が少ないもんだから教えに来ていた。そしたら、尖閣に測候所造るというしょっちゅうその話ばっかり（笑い)。1 学期間、全然気象の話しないですよ。気象の話しないで、尖閣のこの話ばっかりやってねぇ（笑い)。尖閣には何で必要かという話をやったり、そういうことで 1 学期は終わった。比嘉所長は、尖閣に測候所ができたら、その時に幾らでも人間必要だと（笑い)。僕ら 15 名足らずの受講生しかいない。お前ら 15 名全員採用する！　だから大学なんか、行く必要ないから、測候所が皆採用する！と（笑い)。2 学期からは鹿児島に転勤して、城間宏周さんという次の所長が来たんです。

君達 全員採用！　　海賊船押し寄せる　武装も必要だ！

そして、血気盛んな頃でしょう。あそこ海賊がいるから、海賊が押し寄せてくるかもしれんから、海賊とも闘わんともいかんから、やっぱり武装も必要だ、機関銃も（笑い)。

当時の新聞にこうあります。「再びせん角列島へ　昨夜武装警備艇出港　密貿易や海賊船の根城として　風聞乱れ飛ぶせん角列島は、先に久手堅次席ら武装警官が同島に調査に乗り出したが。悪天候のため西表沖付近から引き返したことは既報したが、その後警戒の目をゆるめず二月風廻りの通過の時季を待機していたが、昨夜夕刻五時頃、神山司法主任、玉城刑事部長以下腕利きの警官九名が武装、あかつき警備艇で再び同島へ向け出港した。予定は一週間・・」(八重山毎日新聞 1953.4.9)とある。

当時の八重山高校、右上は比嘉正雄所長。地学の気象の時間は、もっぱら尖閣の測候所設置の話ばっかり。

あの当時は密貿易が盛んで、非常に物騒な時代ですよ。尖閣も密貿易や海賊船の根城か何かになって、物騒ない所と考えていたんでしょう。尖閣に測候所を造るんだったら、魚釣島の山頂にも造らんといかんし、下にも造る。武装もして、機関銃も何丁も置かんといかん、海賊が押し寄せて来たら、闘って撃退させんといかんから（笑い)。この比嘉先生は豪胆で、話上手だったですよ。

―　すごいですねぇ、その話を聞いて、皆どんな感じでしたか、

正木：もう、そこで観測をしてねぇ、やれるとこんなに、これに越したことはないと、給料も普通の倍くれるというから（笑い)。しかし、その中で、話の中に、所謂低気圧とは、

前線とはこういうものだとか、そういう話をして、海流というのがこう流れてくる。黒潮というのが流れている、そこに北風が吹いてくると、そこに三角波が立ちやすいとか。あぁいう気象学的話が、説明が、この話の中に出てくる。興味を引きつけながら、もうそこに気象学の講義も入っているわけですよ。いやもう面白かったです（笑い)。

そしたら、学期の終わりになって、試験と、教科書全然開かない。僕が話したのは教科書の何ページから何ページの間、そこを読めば分かるから、書いてあるはずだから、確認してと、試験問題は 10 問題書いて、10 問題、気温とか、湿度についてとか、あぁいうものを書いて、これの中から 5 問出すから、憶えておけと。大学並みでしたよ（笑い)。

比嘉所長は、尖閣に測候所造らなければならない意義はやっぱり台湾坊主です。台湾坊主の発生を一刻も早く捉まえる必要があるわけです。今でも東京に雪を降らせるのは台湾坊主です。この南西諸島、とくに尖閣列島辺りは、日本列島の天気を左右する重要な要素になるわけです。台湾坊主は夏はできない、秋から。(天気図を指しながら）雲が大陸の方にできて、これが東シナ海にできたら、間違いなく、台湾坊主ですよ。所謂 2 月カジマヤーもこれによるんです。ここに西に低気圧ができると、今日はここにできると、明日は発達してここに行って、明後日はもう爆弾低気圧です。こんなに発達する。そうすると関東は大雪、南岸低気圧といいますから、ああいう風に大変な発達、急激に発達する。今は人工衛星ですぐ分りますが、あの当時は分らない。魚釣島には国際気象番号がありましたよ。確か九州が 800 番台で、南西諸島は 900 番台、名瀬が 909、那覇が 931、宮古 927　石垣 918、魚釣島 916。気象観測地点として重要な場所だからです。だから、比嘉所長は尖閣に測候所を造って、一刻も早く発生を捉まえる必要があったわけです。

当時の気象チャート。魚釣島は国際気象番号 916。

台風の前哨地点　魚釣とラサ島に測候所　軍が計画

―　当時の新聞に、「台風の前哨地点　魚釣とラサ島に測候所　軍が計画」(琉球新報 1953.03.20)とあります。米軍も気象観測地点として重要な場所だからと魚釣島に測候所設置を計画したわけですねぇ。それと比嘉所長の計画との関係はどうですか。

正木：よく分かりませんねぇ。比嘉所長は昭和 21 年に八重山に来て、戦時中の計画書を見て、早い時期から造るべきだと考えていたんじゃないか。米軍の計画が出たのは昭和 28 年でしょう。その年は鹿児島に転勤します。僕らが地学の時間にその話を聞いたのはその年の昭和 28 年 1,2 学期でした。その話を聞いたのは僕らが最後の学年だったかもしれない。米軍の魚釣島とラサ島に測候所設置の計画ですが、琉球気象台具志幸孝台長は、この 2 島

とも遠く離れた島で、しかも無人島だし、庁舎の建設、職員の派遣とか、物資補給は大変だろう、優先すべきことが他に多くあるからと、反対であったらしい。結局、予算がないということでこの計画は頓挫するわけです。琉球気象台百年誌の資料編かなぁ、その辺のことは少し載っていたと思う。それと、戦時中、与那国にも測候所造る計画があったんです。比嘉所長はこれもぜひ造るべきだとして、具志台長と一緒に与那国に視察に行っている。与那国の町民も喜んで、建設用地は無償で提供したいと、島挙げて歓迎してますねぇ。この記事が昭和27年9月の八重山毎日新聞にありますよ。琉球政府は金がないわけだから、その時の計画もダメになった。それができるのはずっとあとです。西表が優先されて、昭和29年に西表測候所が造られます。与那国測候所ができたのが昭和31年、比嘉所長が与那国視察に行った6年後です。

台風の前哨地点
魚釣とラサ島に測候所
軍が計画

（琉球新報 1953.03.20）

それにしても具志台長も大変だったはずですよ。琉球政府は金がないもんだから、どこを優先してやるか、相当苦労されたはずです（笑い）。

比嘉所長　中央気象台管轄下で建設　目論見外れる？

―　どう考えても、琉球政府は金がないのに、尖閣に測候所造るんだ。君達15名の生徒雇う、全員雇うと、比嘉所長が言ったのは、何か、考えがあってだったですか？

正木：それを言うには当時の状況が分らんといかん。戦争終わって沖縄はアメリカの統治下に入るけど、この気象事業だけは、ＧＨＱは、昭和21年に日本政府に対して石垣、宮古、名瀬、南大東島の4箇所の測候所を継続して維持運営するように指示したわけです。

それで中央気象台は、年に 4､5回船を回航させて、観測機器の補給整備をしたり、人や給料なども運んでいました。あの頃は、測候所の給料は、日本円でもらえるから、八重山支庁長よりも、石垣の町長よりも、ずっと小使いさんの方が給料が多くて、職員は皆羽振りがよかった。いまでも語り草になっていますよ（笑い）。結局、沖縄の気象事業は歪な 2 重体制、那覇の琉球気象台は米軍嘉手納の気象隊の管轄。石垣とか離島 4 箇所の測候所は中央気象台の管轄下にあったから、比嘉所長

石垣島測候所55周年記念、八重山民政管府長の家族の見学時撮影。当時の職員、前列左より2人目が比嘉所長。(1951年)

は昭和 21 年に石垣に来たのは中央気象台の転属命令で、だから正式な名称は、戦前と同じ「中央気象台付属石垣島測候所長」だったはずです。これは僕の推測ですが、彼が尖閣に測候所造りたいと考えていたのは、中央気象台の管轄下にある、この計画は元々はそこから出ているし、金も持っている。何よりも「魚釣島方面気象機関要は益々重大と相成べく本台としても明後年に於いて之が予算獲得に努力致す予定」とあったでしょう。もう戦争も終っているから。中央気象台の管轄下にある間に造りたい、造れると考えていたんじゃないか。昭和 27 年 4 月にサンフランシスコ講和条約が結ばれますねぇ。それを契機に気象業務は全部、琉球政府の管轄下に入る。ところが琉球政府は金がない、それで具志台長の奮闘が始まるわけですが。比嘉所長の尖閣と与那国に造る目論見が外れてしまう。その翌年昭和 28 年には石垣測候所を去るわけです。彼はすぐ気象庁に行けたはずだが、行かないで、鹿児島の台長に転勤します。そのあと本庁の海洋部長までやったと聞きましたが。

中央気象代時代　凌風丸で　石垣島　東京文化圏？

―　中央気象台時代は、気象台の職員は給料が多くて、羽振りもよかったんですねぇ。琉球政府に移管されたら、一変して、待遇も悪くなったわけですか（笑い)。

正木：さっき話したように測候所の給料は八重山支庁長よりも、石垣の町長よりも、ずっと小使いさんの方が給料多かったです。それで平和食堂という料亭があって、測候所の連中は皆ここに通う。他の官庁と違って羽振りがいい。お蔭で、僕らが八重山の料亭に入っても、測候所といったら、もう大変歓迎されましたよ。測候所に採用されたのは昭和 29 年、琉球政府に移管されて 2 年後ですから、中央気象台時代にはどんなに羽振りがよかったかは、これからも想像つきますでしょう（笑い)。あの時は凌風丸が石垣に廻ってくるわけです。年に 4,5 回給料持ってくる。雑誌とか、新聞とか、いろんな文化文物が、凌風丸が直接東京から持ってくる。那覇に入ってこない時期に、だから八重山文化は、東京の文化でしたよ。あの木下順二のシナリオがありますねぇ、夕鶴の劇、あの本がたまたま凌風丸が持ってきたんでしょう。世界書房の本屋に売っていた。僕らの先生が買って、昭和 27 年八重山高校 5 周年記念にやろうと上演した。比嘉所長の娘の典子さん、彼女は 1 年先輩で与ひょうの役、つうが女性だから抱くところがあるので女生徒が与ひようの役しました。僕は運ずの役しましたよ。あれが日本で最初の上演ではないかなぁ（笑い)。

中央気象台観測船「凌風丸」が年 4,5 回寄航した。気象観測資材・職員の給料の他、東京の文物・文化を齎した。

そのあと琉球政府に移管されたら、給料も安くなり、これでは生活できないと、悲鳴上げて、それで退職騒ぎも起きましたよ。これが当時の新聞です。「希望を失った測候所所員続々辞表提出　戦前戦後を通じて待遇では別世界にあって人々にうらやまれた石垣島測候

所が四月以降中央政府の統轄下に入って千円乃至千五百円の減俸となり・・薄給ではやりきれない・・若い所員らが辞職したり辞表を提出したり辞意をもらしているのが続々出憂慮されている」(八重山毎日新聞 1952.09.23)とあります。その時、相当の人が辞めた。上里直前さんとか、神山さんとか、喜友名さんとかもそうですよ（笑い)。

復帰前　無人気象観測所　魚釣島に　設置要望

―　結局、これも琉球政府は金がないということで、お流れになるわけですねぇ。その尖閣諸島一帯に石油がでるかもということで、中国、台湾が領有権を主張し、領土問題化して、1970 年ですか、琉球政府から、今度は無人観測所を設置するよう要望が出ます。

正木：そうですねぇ、これが当時の新聞記事ですか。1970 年 9 月だから、復帰 2 年前ですねぇ。「尖閣列島が沖縄の一部であることを事実上、明白に示すため同列島の魚釣島に無人の気象観測施所を設置する方針で本土政府に対し明年度の援助に組み入れるようすでに折衝を行っている。」(琉球新報 1970.09.13)とあります。12 月には、「尖閣列島の無人気象台設置費は総額 3 千 7 百 95 万 2 千円で来年早々設ける」(琉球新報 1970.12.19)とありますが、実際造られていませんねぇ。この予算は計上されたというのにどうしたのかなぁ。この辺の経緯は分りません。気象庁でも、復帰前に尖閣調査したんだという話は出てました。復帰前というから、丁度 70 年のその頃ですかねぇ。沖縄気象台の小野俊行台長が、本庁の業務課長やっていた頃、調査で飛んだことがあると言ってましたねぇ。飛行機で調査したはずですよ。

魚釣島東灯台と無人気象観測施設候補地。(沖縄開発庁 1979)

復帰後の 1978 年沖縄開発庁が尖閣諸島を本格的に調査してますねぇ。やっぱり沖縄側の要望が強いもんだから、漁港施設、無人灯台と一緒に無人気象観測施設をどこに造った方がいいかと調査してます。

設置候補地として魚釣島の 2 地点、確か北西斜面の平坦開豁地のうち、海抜 10 ﾒｰﾀｰ以上の所か、北東岸の灯台の候補地とした岩山をあげていますよ。結局これも立ち消えなりました。思い切ってあの時造っておけばよかったはずだが。

与那国設置計画　戦争で頓挫　　所長　父に予定

―　話は元に戻りますが、戦時中の測候所を造る計画、尖閣諸島の場合は戦争で立ち消えになったんですが、与那国にも造る計画があったこと、初めて知りました。

正木：尖閣列島だけじゃない、与那国にも造る計画でした。あそこも尖閣と同じ台湾坊主や台風とかの観測拠点として重要な位置にあるから、ぜひとも造らんといかんです。

それで、与那国用の資材は那覇まで送られてきてました。庁舎を造るコンクリートとか、木材なんかも、那覇港で皆 10･10 空襲で焼けた。私の父の手紙では、父は高等講習を終わ

って、人事課長から与那国測候所所長で行くことになっていた。それで門司から台湾廻りの高千穂丸に乗って、台湾行く途中にアジンコート沖でやられたわけです。台湾廻りしたのは台湾に母の兄弟がいて私的な用事があった。またもう 1 つは、帰りは台湾から漁船で与那国に渡って、与那国を見る予定だったんです。その前に与那国の郵便局に嘱託を置いて、観測をして、八重山に気象データーを電報で送っていたんです。東京での研修前にも測候所を造る準備で石垣測候所の喜多豊一所長と 2 人で与那国に行っているんです。その北さんの後任が大和順一所長です。喜多さんは東京に帰られて、父に会った時、与那国であんた頑張れと言われて、そのために台湾まで来たわけです。台湾から与那国に渡って、測候所造りの下見か、準備する積もりだったはずです。10･10 空襲で資材もやられたので、与那国測候所は立ち消えなったわけです。戦時中は職員が派遣されて、石垣から出張して、郵便局の庁舎借りて、気象観測をしていた。2 人位ですねぇ。その時の業務日誌があるはずなんです。一生懸命探すんだけど探せきれないなぁ。八重山にあると思うんですよ。で、与那国測候所は、1953 年に建てられました。僕はそこに自分で希望して赴任しました。

父の遺志継いで　与那国へ　国境の島に驚く

―　お父さんがお元気ならば、与那国測候所の所長として頑張っておられたはずです。そういう経緯もあって、譲さんはお父さんの遺志を継いで希望して赴任されたんですねぇ。

正木：そうです、父は志半ばで亡くなった。父の遺志を継いで、与那国を希望して行った。希望して 7 年おって、転勤してきて 6 年おって、復帰の前 1969 年末にまた行った。

その時は所長でした。所長になれと言ったら、僕はそこの所長よりも与那国の空港出張所、航空観測をしたくて、航空気象をやりたいなぁと思って、与那国の所長なら行かん。空港出張所所長にしてくれと言った。辞令もらったらそれが測候所所長になっていた（笑い)。2 回目所長で行った時は 37 歳で、結局は親父が死んだ歳と同じです。だから僕は与那国に通算 11 年おって、その間で経験したことは沢山ありますねぇ。

赴任当時の与那国測候所。現在は閉鎖されてない。

海の経験、突き船でしょう。カツオ船でしょう。それからクリ舟、クリ舟で、勿論エンジン付きに 2 人乗って、シイラ釣ったり、カツオ釣ったり、曳き縄で、掛かるとそれを揚げて、大漁しましたよ。

最初に行ったのは 22 歳(1956 年)、それから 30 歳(1964 年)なるまでおったから、足掛け 8 年間与那国。そのあと石垣に転勤しましたが、あの時は台湾海峡の紛争があって、大変な時期でした。もう与那国も戦争状態ですよ。与那国上空まで戦闘機が飛ぶし、台湾が見える与那国の目の前は、アメリカの軍艦がいるわけです（笑い)。

アメリカ第七艦隊　目の前で　爆撃機離発着

―　台湾海峡紛争の時、大陸、台湾側の気象情報も入らんから、予報外れたら、漁師も遭難の危険もあるし、与那国測候所で予報する正木さん達も命懸けだったわけですねぇ。

正木：あの台湾海峡紛争の時、アメリカの第七艦隊が与那国と台湾の間にいるわけですよ。すごい軍艦が、戦艦とか、集結しているわけ。すぐ目の前に見えるもんだから、びっくりしました。あのエンタープライズという航空母艦、あれも与那国のすぐそこに停泊している。航空母艦というのは、こう前から見ると、こんなにV字形に見えて。こんな大きな航空母艦がいるんだなぁと思って。あの時、第七艦隊が来たのは、大陸から金門島や馬祖に連日砲撃してくるから、何かあったらやろうと、睨みを効かしていたわけなんですねぇ。で、航空母艦から朝8時になると、もうきっかり飛行機がワァーと飛び上がるんです。飛び上がって、台湾の東海岸をグルグルグルグル、何機も、10機も、20機も。それが測候所の上を通って、戦争みたいに（笑い)。

米艦船七隻が沖縄へ
シンガポールから
海兵隊一千六百人輸送
中共軍27日
大担島にも砲撃
金門島も浴びせらる

第七艦隊、沖縄行き報じる新聞（沖縄タイムス 1958.8.28）

下：空母エンタープライズ

だから大変な光景。それが8時にやって、5時になったら、間違いなく着艦するわけです。アメリカという所は戦争の時でも、労働時間というのはあるんだなぁと（笑い)。8時から5時までは間違いなく、時計みたいでしたよ。1週間位続いたかなぁ、まだ続いたかもしれません。あの時、何で与那国の上空まで飛ぶかと思っていた。そしたら、そのあとでも、台湾の東経123度までは、台湾の領域、領空なんですよ。東経123度というのは与那国の真上を通るんです。丁度中央ウラブ岳という山がありますが、その辺が123度の線です。ナンタ港から、そこから向こうは台湾の領域、こっちは日本の領域ですよ（笑い)。だから南西航空(現JTA)とあったでしょう。

で、復帰後、これが飛んできて、何する時は、台湾の許可を得るんです。飛行場は台湾の領空にありますから、台湾にちゃんと連絡してから来るんですよ（笑い)。歪な空の国境です。

気象資料出さない　誤った天気予報　漁師　あわや遭難

―　その台湾海峡紛争の時ですか、天気予報に大変苦労したと聞きましたが。

正木：そうです、金門・馬祖の砲撃で、中共と台湾の蒋介石が戦争しているわけですよねぇ。そしたら、両方とも、中国大陸も、台湾も気象資料を出さないんですよ。管制してもう出さない、気象情報は極秘情報だから。戦争中に日本も出していませんから。

で、あの当時入ってきたのは香港です。香港はあの当時はイギリスの統治領でしよう。だから香港だけは入ってくるんです。だけど実際台湾側の情報がないから、そこの部分が空白な天気図です（笑い)、それはどの位の期間だったか、忘れたけど。

それでも与那国で予報しなきやいかんわけですよ（笑い)。漁師は、天気予報を聞いて漁行くわけだから、必要な情報ですょねぇ、で、予報は僕と課長と 2 人でやっていたんです、1 日おきに。だけど、天気は普通西から変化してくる、西の天気が分からないと、どうにもしょうがない。結局空白な天気図で予報しなければいけない。

それで相当苦労しましたよ（笑い)。漁師から、電話掛かってきて、天気はどうか聞いてくる。聞いたら、前線通過は夕方になるから、天気はいいと言うわけです。言ったら、そうか大丈夫かと、漁場に行くわけですねぇ。漁場というのは、西表と与那国の間、ずっと沖ですが、その辺りにハイヌソネといって、そこへ行ったり、メクラゾネといって、また台湾と与那国の間、黒潮の一番激しい所です。その辺りへ行ったり、あっちこっちに行く。そしたら、前線が速くなって昼ごろ北風になって、ビュービュー吹いて、もう大シケ、大荒れになったねぇ（笑い)。天気は急変したもんだから驚くやら慌てるやら、命からがら逃げ帰ってくるわけですよ（笑い)。帰って来たら、もう港に入れない。祖内港は北風が吹いたら入れない。久部良港も北風が吹くと入りにくい。仕方ないから、岬をずっと廻って、島の裏側の山の比川に着けて、そこから怒り狂って電話が来るわけです。

「正木！　お前よくも嘘ついたなぁ、ひどい目に遭った！！」「もう少しで死ぬところだった。測候所に待っておけ。お前をモリで突き殺してやるからなぁ」と、あの突ん棒のモリがある、あれ持って怒鳴り込んでくるから、逃げないと殺される（笑い)。

天気予報外れたら、もう生きた心地しなかったですよ（笑い)。

漂流ビン調査で　突き船体験

―　漁師にとって天気予報は命に関わる大切な情報ですから、それが外れて、遭難事故起きたら大変、天気予報するのも命懸け、モリ持って殺してやると来たら怖いですよねぇ。

正木：漁師は皆んな気が荒いけど、とくに与那国の漁師はカジキ突き専門だから、とても気が荒い（笑い)。突船に乗って、ほんとに怖いと思った。怖い体験をしたんですよ。

海流調査することになって、漂流ビンを流そうということになって、その頃はビンがなかったもんだから、ビニールの透明な袋にハガキを入れて、上をちゃんと閉じて、海岸では何だからと、船に乗って沖でばら撒いて流すことになった。船に乗るなら、突船乗ろうということで、金剛丸という船にお願いして乗ったんですよ。船長がもうおとなしくて、その当時 35,6 だったかなぁ、前の日にお願いして酒を飲みながら、いろんな話をして、明日の朝、5 時に港に来いというから、はいと言って、港行ったんです。そしたらコックとか、船員とかいて、お早うございますと言っても、誰も物言わない、1 人も（笑い)。

そのうち船長が来た。来たけど、何の挨拶もしない。こっちが挨拶しても返さない。これ変なものに乗ってしまった、ヤバイなぁと思って（笑い)。船乗って、久部良港出て、目

的の漁場に向かうが、誰も一言も物も言わんです。もう気持ち悪くなってきたですよ。

そしたら、太陽が上がってきてから、コックがご飯と言って呼ぶもんだから、皆船の後ろに集まて、船長だけは、あの頃は舵棒だから、手でこんなこんなしながら、皆朝飯食う。そしたら、賑やかになって、皆ワッハッハーして、昨日の話になって、寒冷前線とはどんなものかと、夕べの僕の話の続き、正木先生、正木先生、とまた質問したりして、もうほんと皆和気藹々です。あぁいい雰囲気だと思って（笑い)。さっきのは一体何だったのか、不思議がっていました。

カジキ見つけて　イキオール　戦場突入

こう和やかにしているうちに、何時間位したかなぁ、2、3 時間位で漁場に着いたわけです。目的のハイヌソネという所来たらねぇ、皆配置に着くんです。バーと配置に着いて、突き手が 2 人、機関士、それからコックと船長ですから、5 名、これだけいる。僕は船長の傍に、そこはスペースがあるから、空いていたから座っていたんです。そしたら、突き手がカジキ発見したら、「イオキール！」と言うわけです。行きつつあるという意味ですよ。突き手 2 人はモリ構えて、カジキが逃げていく方向を、あっちに「イキオール」、こっちに「イキオール」と大声で指示しながら、追いかけて行くわけ。

カジキ見つけたら、イキオールと追いモリで仕留める。(「オキナワグラフ」より」)

もうカジキも死に物狂いで逃げる。あっちこっちに逃げる。波も高いし、その波を掻き分けながら船はフルスピードで舵切りながら追いかけて行くから、もう船はこんなこんな、もう戦場ですよ。僕は「イキオール！」の声聞いた時から、もう胸はワクワクして、カジキ突きはどんなものか、見たいから、立ったり座ったりしていたら、急にカジキが逃げる方向変えると、船も曲げんといかんでしょう。ギュウと舵棒切って曲げた時に、僕に引っかかるわけよ（笑い)。そしたら船長が「このバカ者、邪魔だ！　あっちへ行け！」と蹴っ飛ばしたんです。強く蹴っ飛ばされたもんだから、海に落ちそうになったです。慌てて船の縁を掴まえて、運良く助かった。あぁ助かったとホットしていたら、また怒鳴られた(笑い)。「こっち邪魔だ、あっちに上れ！」と、真ん中にカジキ監視の櫓がありますから、あそこを指して、「早く上れ！」と怒鳴るわけです。恐る恐る櫓に上がったら、上はもっと揺れるわけよ（笑い)。右左、上下に。僕は手すりに掴まって、櫓の上からカジキ追いかけて、モリで仕留めるのを見ていたですよ。

突き手　怒って　モリ　機関場に投げる

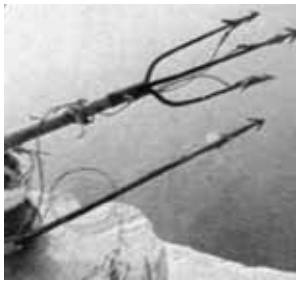
カジキに段々段々近くなるでしょう。そうすると速度を緩めれとか、バックとか、いろいろあるわけです。それを突き手が、手でこうこうこうしながら機関場に合図やるわけです。そしたらこれを間違えたんでしようなぁ。バックというのを見間違えて、何したんです。そしたら、前の突き手の若いのが、もうあの頃 25 か、30 はならない青年ですよ。これがいきなり回れ右して、怒ってあの突ん棒のモリ、あれを機関場めがけて投げたんです。これがブリッヂの壁にバサッと刺さって、ハーセ（感嘆詞　あぁ)、この野郎、もしあそこに誰かいたなら、あのモリに突き刺さって死んでいたかも。そう考えるともう背筋が寒くなって、あぁ大変な所に来たなぁと思いましたよ（笑い)。

その前にはコックがねぇ、中学校卒業したばかりの 16,7 位の子供だった。これが竹のバーキ(ザル)に芋を沢山入れてありますよ。カジキを追いかけながら、突き手が大きい声で、エサ撒け、エサ撒けと言ったんでしょうなぁ。その少年はこれを抱えて、船縁をこうこう掴まえながら、前の方に回るわけ、ところが船もフルスピードで、ジクザクだし、波もこんなして大揺れですから、転んでしまって、芋をこぼしてしまったんです。船長室の前の所に。そしたら、慌ててこれを拾おうしてやっていたら、突き棒があるでしょう。船長が「このボンクラ！」と言って、突き棒でパンパン叩くんです。この子は頭から、背中から叩かれながら、泣いてねぇ、かわいそうだなぁと思った。

カジキ揚げたら　何事もない　元の平常に

またその前か、1 匹のカジキを追っかけている時に、「イキオール」と言って、向こうから台湾船が来たんですよ。台湾船に向かってよ（笑い)。モリを向けて、お前ら、これは俺達のものだ、そこ退けと言って、モリ構えて、ものすごい顔で睨みつけるでしょう。もう台湾船の連中はびっくり、ウワァーと急いで逃げて行った（笑い)。これ見ていたら突き船の漁師は、ほんとに恐ろしいと思ったですよ（笑い)。

ところが、これ終わったあと、もうカジキ突いて、これ揚げて、丁度 200 ㌔位のカジキだったです。こんなでかい奴を突いて、揚げたから、もう帰ろうかということになった。それで何して、丁度昼ご飯時間だということで、またまた後ろに集まるんです。そしたら、さっき突き手が機関場めがけてモリ投げたわけですょねぇ。あの突き手と機関士と関係。また船長が僕を、このバカ者とこんな蹴っ飛ばしたこと。またコックは叩かれたこと。あんなことあったのかなぁ思う位、皆吹き飛んで何もないですよ。もう何事も何もない。皆元に戻ってニコニコですよ。昼ご飯食べて、あとまた帰るまで、



上：カジキ突くモリ。
下：船上での食事光景。
（「記録写真集･与那国」より）

何もない。和気藹々です。またまた僕の気象学の講義を聞いて、また「正木先生、正木先生」してねぇ。殺気立っている時にはこのバカ者と蹴っ飛ばされたんですが（笑い)。

いや、海人はほんとにこんなに豹変するのか、人間があんなに一変するのか、不思議だなぁと思いました。だけど、板子一枚下は地獄という位だから、海の上は戦場で、間違えると命落とすし、何事も命懸けの仕事だから、あぁいうサッパリした気質を身に付けるわけですねぇ。

カツオ船乗る　同じ体験する

今度はカツオ船に乗ったんですよ。仲嵩さんのカツオ船に乗せてくれとお願いして乗ったんです。タマンカ(玉城)の爺さんも乗っていた。この人はシナ事変で出征した人で、糸満系のベテランの海人です、やっぱり同じだったんです。朝絶対物も言わない（笑い)。

港に出るまでは一言も言わないです。誰も口利かないのは縁起を担いでいるんですかねぇ。この爺さんは昔はカツオ釣りの達人だったようです。で、カツオ来たら、ジャコを撒いて、散水やって、皆バンバンバンバン揚げるんです。上手な人はこんなしてパッとやれば、カツオだけ飛んで行って、ダンブルに入る。この爺さんは大判が掛かった。大きなカツオなもんだからもう揚げきれないわけですよ。揚げきれないから、カツオがあっち行ったり、こっち行ったりする。皆並んでいるでしょう。傍の青年が、すぐ揚げて、もう 1 回やろうとしたら、あれに掛かったりするもんだから、怒ってよ。この爺さんを、竿でガンガンガンガン叩いてねぇ、もう僕位の若造がですよ。爺さんは、戦争で相当手柄立てた人で、有名な人で、ベテラン漁師、大先輩です。この若造を懲らしめてやろうと思った。ほんと人間じゃないと思ったです。ところが、これまた帰りは、全く何もない（笑い)。

爺さんも、あの若造も、和気藹々して、ほんとに皆何もなかったです。全然何もない。もうサッパリして、後腐れもない（笑い)。

やっぱり海人は、海人しか分らない、不思議な世界だなぁと思いました。

カツオ釣りは海が盛り上がるというけど、ほんとに盛り上がりますよ。こうダァーとねぇ、まぁ上からはカツオドリ、鳥がバンバンやるし、どんどん揚がるし、カツオドリはジャコを食べに来るわけだから、すごいですよ。ほんとに戦場です。とにかく何分かの勝負です。何分やったかも記憶にないですねぇ、こっちも興奮してましたから（笑い)。

与那国　台湾船との闇商売　盛ん

僕は 41 年間気象やって、いろいろな体験したきたけど、とくに 30 代に足掛け 8 年与那国におった時は、普通の人がやれない体験やってきました。闇商売、あれは復帰前、今は海上保安庁ができてうるさいでしょう。あの頃水上警察というのがありました。与那国辺りに来れないから、島の前に停泊していて、夜船着けて上がって来て、タバコとかと物々交換してましたよ。また与那国の人が台湾に住み付いて、これがハイヌソネとか、ああいう所で漁で一緒になると、船停めて、自分は与那国の何という家の何々という。お盆だか

らこれ持っていってくれと。お米とか、お菓子と託するわけです（笑い)。

僕もたまたまクリ舟で行って、釣りしていたら、台湾船が停まっておったから、行って着けたら、釣り糸の話をして、この前誰が頼んだのがないかと言って、じゃ次買っておくから、何月の何日に来て、また海上で落ち合って渡すからと言付けを頼まれて、そういうことを、復帰前は堂々とやってましたねぇ。

また、僕が所長している頃に、島の東の方の浜に、ウドウブヤマという浜があるんですよ。そこでキャンプをしようということで、皆で、役割分担して、陸上班はオートバイで行って、食料持って行く。テントなんか大きいから、クリ舟に積んで、それに 3 名乗って行ったわけです。ナンタ港出て、しばらく行ったら、台湾漁船がいましたよ。あそこ行って魚もらって来ようと僕が言ったから、若い所員の 1 人が、所長、台湾漁船に着けたら琉球政府の公務員、懲戒免職になりますよ、ばれたらどうしますか？　ばれたらお前が辞めればいいさぁ（笑い)。構わん、着けろと、着けたら、日本製の衣類は大変魅力があるわけ。僕らが着けている作業着指して、これくれ。いや、これは役所の備品だからできない(笑い)、これ脱いで、中のランニング脱いで、はいとやったら、沢山魚くれるし、ボンカン酒もこんなにもらってねぇ。西表の仲の神島でもオオミズナギドリ調査に行った時もやりました、あの時は台湾人と兄弟になった（笑い)。ほんといい時代だったですねぇ。

与那国沖を航行する台湾船、漁船か、闇船か？
（吉浜貞一.1970）

黒潮のもたらす影響　沿岸国の共同調査(C.S.K)で解明

―　30 歳で、一旦与那国から石垣測候所に戻りますねぇ。そのあと、今度は黒潮調査で、先島から、台湾、尖閣諸島、東シナ海の黒潮調査されたと聞きましたが、

正木：黒潮は北赤道海流と言うんですが、その源はフィリピンの東方沖あたりで、フィリッピンにぶっつかって、1 つの流れが分れて、北上して来るわけです。バーシー海峡を超えて台湾の東側から、与那国をまともに洗って、東シナ海に入ります。そしたら真直ぐに北に来て、尖閣にぶっつかるんです、大陸棚に。大陸棚にぶっつかるから、こう曲って向きを北東に変え、深い沖縄トラフを通って、そこからトカラ海峡を抜けて九州南に行くわけです。大陸棚から溢れて行く海水が、飛行機から見えますよ。那覇から台湾に飛んで行く時に、尖閣の上を飛ぶんです。1 万ﾒｰﾀｰ上空から見たら、黒潮が大陸棚の崖っぷちにぶつかり、海面が盛り上がって、大陸棚いっぱい溢れて、黒潮が流れて来るのが分ります（笑い)。大陸棚にぶつかって軸がこう曲がって、流れて行くのがはっきり分ります。

この黒潮は、南から北へ、毎秒約 3500 万ﾄﾝの水を運んでいるわけです。世界最大といわれるアマゾン河の流量でも黒潮の 300 分の 1 の流量しかない。これだけ莫大な熱エネルギ

ーをもたらしますから、黒潮は日本列島だけでなく、東アジアの全体の気候に大きな影響を与えているわけです。あの尖閣近海で急速に発達する低気圧、台湾坊主もこの黒潮の熱エネルギーが元になって発生します。この黒潮を国際黒潮共同調査(C.S.K：Co-operative Study of the Kuroshio）といって、沿岸国で共同調査しました。

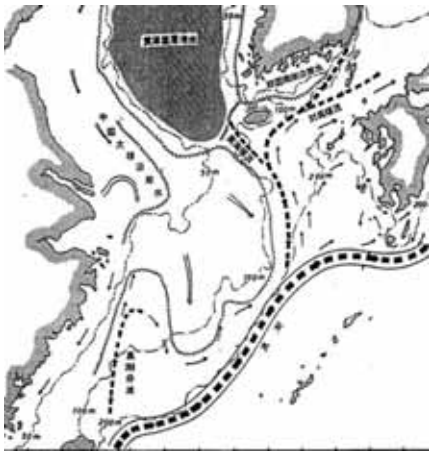
日本、台湾、韓国、フィリッピン、アメリカ、ソ連などの 9 カ国が参加して、期間は 1965 年から 67 年まで。毎年夏と冬に調査して、黒潮が気象とか、漁業とかに及ぼす影響とかを調べるわけです。この C.S.K の予備調査、東シナ海の黒潮共同調査で行きました。

長風丸　尖閣通って　華東ラインまで　東シナ海調査

―　C.S.K の黒潮共同調査、これの予備調査で行ったわけですねぇ。黒潮は、東シナ海に入ったら、大陸棚にぶっかって北上しますから、尖閣諸島近くも調査したんですねぇ。

正木：長崎海洋気象台の長風丸という船で、竣工したばかりの最新式の観測機器を備えた観測船ですよ。これに乗って、1965 年 7 月から 8 月にかけて 20 日間ほど調査しました。

長崎から山形忠和団長以下 9 名、沖縄からは、伊志嶺さんと長田正さんと私の 3 名が参加しました。宮古、八重山、石垣、与那国、台湾付近を通って、大陸棚に上がって、尖閣列島の傍通って、黒潮調査をしました。C.S.K 国際黒潮調査というのは、気象の共同調査でもあるわけですょ。台湾も、韓国も、フィリピンも、皆調査船をそこに貼り付けて調査しますが、気象の変化の調査、台湾坊主の発生する過程、東シナ海の低気圧のでき方、そういったものを観測するわけです。大陸棚に上がって、尖閣の目の前を、南小島の傍を通ったし、そこからずっと上行きました。そしたら中国の華東ラインというのがあった。あそこに入ったら拿捕されるから、あの中に入らんで、ラインに沿ってずっと揚子江の入口付近まで行きました。で、その北側に李承晩ラインがある。長風丸はあそこは行かんで、引き返して、そこから那覇に帰って来ました。華東ライン、李ラインとか、あれなんか軍事境界ですよ。台湾の側通る時もありました。台湾に船から電報打つんです。そしたらすぐ軍用機が飛んで来ました。飛行機が来て見て許可する。台湾の境界は東経 123 度、与那国の上空でした。与那国行きの飛行機は台湾と協約を結んでいたはずです。与那国空港は台湾の領空にありましたが、今はどうなっていますかねぇ。



上：東シナ海の黒潮の流れ模式図
下：長崎海洋気象台観測船・長風丸（265 ﾄﾝ）

尖閣初めて見て　感激　長風丸でも　傍通る

―　長風丸でどのような海流調査をしたんですか。

正木：水温も深い所、100 ﾒｰﾀｰ、200 ﾒｰﾀｰ、300 ﾒｰﾀｰ、あぁいう深い所のものも調べますし、海流も調べます。海流計があって、それでやったりするんですが、何ﾉｯﾄで、どこに流れているとか。黒潮の流軸が大陸棚にぶつかりますと、尖閣列島の所からこう右へ走るんです。一部は表面の部分は上がっていきます。大陸棚に上がって北上するんだけど、中国大陸近くの華東ラインの所では、揚子江から流れてくる冷たいのがある。その境を、大陸棚は 200 ﾒｰﾀｰですから、10 ﾒｰﾀｰ落ちたか、5 ﾒｰﾀｰ落ちたか、温度をずっと測りながら、海流を調べながら、海水の比重、比重というより塩分濃度、それとプランクトンも、プランクトンは簡単で、後ろから網を曳いて、この観測点からこの観測点の間を曳いて、揚げて、どの位いるんだと調べました。そしたら尖閣付近で、熱帯低気圧の接近です。

もう大シケでどうにもならないから、どこに避難するか、那覇に帰ると言うから、那覇に帰らないで、船浮は安全だから、そこに入れようと言って、伊志嶺さんがアドバイスしたんですよ。それで 3 日か 4 日間位は、西表の船浮に避難しました。その時は大変でした。皆船酔いで、僕は当番に就いたから船酔いしている暇なくて（笑い）。もう大シケの中で観測しました。

でもこの共同調査は随分勉強になりました。それに初めて尖閣列島見ました。魚釣島も目の前ですよ。

観測メンバー。前列中央は伊志嶺安進。
左隣は長田正、その上は正木譲。

あぁ、父が上がった島があれなんだなぁと感激しましたねぇ。船のデッキからもうしばらく眺めてました。いつかは自分も島に上がってみたいと思いましたねぇ。そのあと舞鶴の海洋気象台の清風丸に 20 日間乗りましたが、この時も尖閣の近くを通りました。

清風丸　沖縄トラフで　熱鉱床発見

―　舞鶴の海洋気象台の清風丸の場合は、何の調査で尖閣近くまで行ったんですか？

正木：その時も伊志嶺さんと僕と長田だったかなぁ、3 名だなぁ、1966 年か 67 年、那覇から清風丸に乗って、その時の観測は海洋観測じゃない。海洋底拡大説というのがある。海洋の地殻がこう沈み込んでいく。プレートが沈み込んで他を押し上げていく。今は常識になったテレビでもやりよるでしょう。その説が出たのが 1900 何年位かなぁ、どうもこれは確からしいと見直されて、あれの検証ですよ。フィリピン海の海洋底(プレート)が琉球海溝に沈み込んでいく過程を検証するための観測でした。沖縄本島の東海上から琉球海溝沿いに台湾東岸まで南下しました。そして台湾と与那国島の間から東シナ海に入り、尖閣列島を通って大陸棚百尋線に沿って、沖縄トラフ（舟状海盆）の調査をして、那覇に帰

ってきました。海底の地殻熱流量や地磁気、エアガンによる海底の地形、地質図の作成、ピストンコア・サンプラーによる大洋底の堆積物の採集などしました。

海底の熱流量は、電極を入れて測定器を海底まで下ろしていって、その変化で熱量を計り、それを温度に換算して、海底温度を観測するわけです。琉球海溝の所にフィリピン海プレートが潜り込んで行く所では、海底は温度が低いだろうと言うんで、実際に観測したら、もうその通りですよ（笑い)。ずっと大東辺りから温度を測ってきて、琉球海溝の海底の所まで来ると冷たくなってくるわけです。冷たいんですよ。マグマが湧き上がる所では、例えば沖縄トラフ、すぐ東シナ海です、舟状海盆とも言いますが、久米島の西の辺り、底がこう裂けているわけです。琉球列島はこっち(右)側にこう傾いています。そこやったら、海底の温度が全く違ってました。で、その観測したデータくれと言ったら、いや、これはまだ公表してないからくれなかった（笑い)。今チムニーというんですか、熱鉱床が発見されて注目されていますが、あの時から分っていたわけですよ（笑い)。この長風丸も尖閣のすぐ傍通って何しました。那覇から慶良間見るみたい見えましたから。これで尖閣の傍通るのは 2 回目、もうボートでもあれば漕いで行って、独りで上陸しようと思ったですよ。だけどそんなことはできないし（笑い)。

伊平屋島沖の海底熱水鉱床。「しんかい 6500」で、2008 年に撮影。(「後藤中徳サイト」より)

3 度目の正直　憧れの高良先生と　調査団一員で上陸

―　1968 年の高良鉄夫先生の第 5 次調査、沖縄問題懇話会の高岡大輔さんを団長とした尖閣列島学術調査団に参加されて、3 度目に、上陸を果たしたわけですねぇ（笑い)。

正木：ほんとに 3 度目の正直でした。お蔭で魚釣島と南小島に上陸することができた。あれは大陸棚の石油資源の調査が目的で、その予備調査です。琉球政府は高良先生に案内してもらって、元国会議員の高岡先生が行かれるわけだから、向こうに台湾漁船が沢山いて、物騒と思ったんでしょう。高岡先生に何かあっ

石垣港から尖閣に向かう前の記念写真撮影。前列帽子手にしているが高良鉄夫先生。右隣高岡大輔団長。(兼島清 1968)

たらいかんからと、八重山警察署は武装した警官 2 人を、平良繁治さんと伊良波幸勇さんにカービン銃持たして護衛付けて、一緒に行きました（笑い)。その時尖閣行ったのは全部で 14 名位かなぁ。

私は北村所長の命令だった。誰か海洋観測に行く人いないか、若い人いないかと言うから。はい、僕が行きますと、すぐ、手を挙げて（笑い)。

それで、また伊志嶺さんと一緒になった。結局伊志嶺さんの補助として海洋観測で行ったわけです。憧れの高良鉄夫先生と一緒に行くわけだから、もう大変嬉しかったですよ。

して、琉球水産研究所の観測船図南丸で石垣港から出航して、夜が明けたら魚釣島が目の前でした。琉大の真栄城守定さんと北岡甲子郎先生は、島に近づくと、飛び込んで、泳いで渡った。7 月で暑かったから、2 人とも若くて活発で、とても元気がありましたねぇ。伊志嶺さんと私は、図南丸に居残って、これから海洋観測です（笑い)。観測がなければ、私も泳いで渡ってみたいと思いました。泊地の潮流や水温の定時観測をしなければならない。どうせ上陸はできないだろうと、仕方なくエクマンメルツ流速計などの準備してました。「憧れ」を目の前にして、これほど悔しいことはなかった。上司の伊志嶺さんが、「この図南丸は、まもなく沖へ移動するというから、観測は中止する。次のボートで君も上陸しなさい」と言われた。伊志嶺さんが仏様に見えたですよ。ほんとうに嬉しかった。

図南丸からボートで、次々魚釣島に上陸していく。僕も 3 度目の正直で上陸することができた。（兼島清 1968）

カツオ工場跡　水溜めに佇む　父も 29 年前に

―　伊志嶺さんの戦前の上司は正木任さん。お父さんからいろいろ教えを受けたわけですから、譲さんの気持ちを汲んで、上陸を上陸許可して下さって、よかったですねぇ。

正木：最終のボートで、堀割りのある所から、魚釣島に上陸した。僕は真っ先に父が野営をしていたという古賀さんのカツオ工場の跡へ急いだ、伊志嶺さんと一緒に行きました。父の写真で見ていた水溜めがあったです。父は尖閣来たのは昭和 14 年。僕が来たのは昭和 43 年。29 年前に、父はこの水溜めの前に立つていたんだ。父の姿を想像しながら、水溜めの側で手を合わせて感慨に耽りました。その時父は 32 歳、僕も 32 歳、考えてみると父と同じ歳です。不思議な巡り合わせと思いましたねぇ（笑い)。

そのあと、伊志嶺さんと分かれて、憧れの高良鉄夫先生の後から付いて行った。カバン持ちして、一緒に魚釣島を廻りました。先生の胴乱か何かをかついで、荷物を持って、琉大の化学の兼島清先生、あの先生は水質調査で来てました。最初は 3 人一緒に廻りました。兼島先生はちょっとした流れがあると立ち止まって、あっちこっち水をビンに入れて、水

を採取していました。僕は水に興味ないもんだから、どんどん先行った。そしたら兼島先生は遅れて、はぐれて、あとはそのまま引き返したんじゃないかなぁ。

高良先生と僕と2人はずっと北側の海岸沿いを歩いて、東端まで来て、そこ曲がって、島の南側まで行ったんです。そしたら険しい断崖が迫って、これから先は危ないから、もう行くのはよそうと言って引き返しました。あとで地図みたら、相当な距離歩いたとびっくりしました。もうその間、高良先生から、島の地形を眺めながら、こっちの砂岩は何々とか、向こうの断崖は何々だとか、魚釣島の地質の話をいろいろしてもらった（笑い)。すごい勉強になったです。

昭和14年に撮った水溜めの写真。そのまま残っていた。この前に、父が佇んでいた姿を想像して手を合わした。

南小島　平坦地　穴ぼこだらけ　ヘリポート造れる

―　そのあと南小島に上陸したわけですねぇ。

正木：巡査の平良さんと伊良波さんは台湾漁船へ向かうときもカービン銃をさげて舳先に立っていましたねぇ。停泊した船に近づくと、こちらは日本領土だから出て行け！　魚をとってはいかん！と大声で警告していました。南小島へ上がると、座礁したタンカーがでんと聳えて、大きなホテルが建った位に見えましたねぇ。その近くの海岸には、台湾人が仮小屋を建てて、この座礁した船を解体して、スクラップを採っていた。台湾人皆若いから年配の人から、沢山いた覚えがあります。僕はすぐそこから岩山に向かいました。琉球政府の新城鉄太郎さんなんか、台湾人が違法入域、不法上陸したことを厳しくとがめていました。「日本の領土だから出て行け」と言う平良さんの声も聞こえてました。

南小島にタッチュー(尖塔)の岩山が2つあるでしょう。僕はすぐ南側の1つに登りましたよ。小さい方に。そしてそこ下りて、島の平坦な所をずっと歩き回りました。

殆ど土はなくて隆起サンゴ礁の平坦な岩、草が少しは生えていてました。よく見ると、所々にポコン、ポコンと穴があいている。もう歩きにくてですよ。甌穴の穴ぼこ、甌穴があっちこっちにもう、中見たら石が

南小島の東側の岩山と尖塔、裾野は平坦なサンゴ礁が広がり、ヘリポート建設が可能？　(新納義馬 1979)

入っているもんだから、これ甌穴だと分ったんです。潮が満ちてとか、台風の時とか、あるいはそれ以前は潮の高い時期がありますから、もしかすると昔は浅い海だったかもしれん。甌穴ができてもおかしくない。で、ここ歩いて、南小島は飛行場は無理だが、これだけの平坦な地があるから、ヘリポート位なら造れそうだと思いました。しばらくしたら出航すると呼ぶもんだから、すぐ皆がいる所に引き返しました。僕が上陸したのは魚釣島と南小島です。北小島と黄尾嶼(久場島)は船から眺めただけ。黄尾嶼は米軍の爆撃演習地だったから上陸はできなかった。最後に黄尾嶼を見てから、帰って来ました。赤尾嶼(大正島)ですか、あそこは行かなかったです。

尖閣で起こる地震　特徴がある

―　最後になりますが、尖閣諸島辺りで起こる地震、1947 年の石垣島を襲った地震、伊志嶺さんが震源地を特定して尖閣辺りじゃないかといった地震、尖閣で起こる地震は特徴があるとお聞きしましたが、あるわけですか？

正木：ありますよ。地震の顔です。これ僕の調査でやったんですが、当時気象庁はあんまり地震やってないもんだから、台湾の気象台が出してある資料を、台湾からウチの気象台長が、復帰前行って、台湾からもらってきたんです。地震速報みたいな、こんな沢山、箱のいっぱいもらってきたんです。これで震源を皆照らし合わせて、石垣の記録と照らし合わせてやってみたら、震源が決まるわけですよ。で、その時の地震の記録を調べてみると、宜蘭沖の地震、宜蘭からこの列島弧に沿って来るような波、花蓮港沖から南東、南西方から来るもの、そんな顔があるんです。それから尖閣列島近くの舟状海盆、沖縄トラフですねぇ、裂けて、沖縄トラフから来る地震、それから南東沖の地震、明和津波を起こした地震、それについてはあまり資料がないから発表しなかったんですが、顔があるんです。初期微動という一番最初に入ってくる波をＰ波が入ってきて、Ｓ波がこう入ってくるんです。その形が全然違うんです。顔があるんですよ。だから早く地震起こってくれんかなぁと思って（笑い)。尖閣の場合は、深発ですから、深い地震、下から突き上げるような地震がくるんです。Ｐ波がバーと大きくなって、Ｓ波が入ってきても、Ｐ波とそんなに変わらない位の大きさです。面白いですよ。今はそういう定性的な調査というのはあまり持てはやされない。だから僕らが発表しても、興味をもってくれる人もあまりいなかったです。定量的にやらないと科学じやないとの見方、僕らのように定性的なものをやるとダメなんです (笑い)。全体の特徴見るならマクロに捉える視点も必要だと思いますがねぇ。だけど、今は地震計の記録も見えないですょ。昔は針がこう動いているのを見えたんだけど、今は皆どこに何があるか分からない、皆数値化されて本庁に行ってしまうから、そんな研究もできなくなった（笑い)。いつか機会があれば、まとめてみたいですねぇ。

―　長時間のお話、とても勉強になりました。有難うございました。　　（了）

上段左：魚釣島を視察する高岡大輔氏（八重山毎日 1968.7.11）右：次の目的地北小島に向かう（季刊沖縄）下段左：南小島の上空を舞う海鳥（大城盛俊）右：不法操業の台湾漁船（松田賀勝）。

尖閣諸島調査(1968 年 7 月)の思い出を 37 年ぶりに語る集いにて　(2005 年 11 月)
右より　新城鐵太郎（琉球政府総務局渉外課長）(86)．高良鉄夫（琉球大学農学部長）(93).
伊志嶺安進（琉球政府気象庁海洋係長）(82).　正木譲（八重山気象台観測係長）(71)。
なお（　）は調査時の役職、年齢は 2005 年時点。

落穂 探脈

高岡　大輔　たかおか　たいすけ　（沖縄問題等懇専門委員 ）

1901 年（明治 34 年）新潟県に生まれる。東京外国語大学卒、衆議院議員。（財）南方同胞援護会理事、沖縄問題等懇談会専門委員を歴任。1990 年逝去、享年 89 歳。

氏は、日本政府の尖閣列島調査に尽力した。その先見と慧眼に学ぶべきもの多いが、氏の功績が忘れ去られているのは遺憾である。著書の 1968 年「尖閣列島周辺海域の学術調査に参加して」（総理府・琉球政府資源予備調査)から一部抜粋した。

尖閣列島周辺海域の漁場

沖縄海域における黒潮についての調査は今日まで可成り行われて来ているし、琉球水産資源調査報告書に伊志嶺安進氏が琉球近海の黒潮の構造を同報告書の七七頁から一二〇頁に亘り、図解をつけて詳細に説明しているが、それらについては割愛することとする。

ここで筆者が言いたいことは、尖閣列島周辺海域が何が故に好漁場であるか、そして何が故に重要であるかということである。

農林省東海区水産研究所所長日高武逵氏の所説によれば、尖閣列島一帯の海域では幾つかの好条件が具備し、また実際、好漁場として相当利用されながらも、今日までに得られた資料は断片的であり、今後この漁場を有効に生かして活用するためには総合された有効な調査、研究の結果にまつ外はないが、尖閣列島一帯は、黒潮調査の重要拠点であり、黒潮勢力の消長は漁業上の問題のみならず、日本国内の農業などにも大きな影響を与えることは周知の事実であり、また漁況の予報と重要魚の生態調査には好適地であり、更には黒蝶貝や珊瑚の増殖、研究にも好適地と思われるなど、日本の漁業上、重要な場所に尖閣列島は位置しているばかりでなく、魚類の生態、資源、環境などの研究面からみても、又とない恵まれた海域であるから、尖閣列島に調査基地を設置することは絶対的であり定期的の調査をすることが必要であり少なくとも年間二回、出来得れば年四回、五〇〇トン乃至六〇〇トン級の水産専門の調査船を派遣すべきであると力説されている。

日高氏は更に説明して曰く、好漁場となるのは多くの餌があって多くの魚を育て集め、魚を滞留させるところであるが、尖閣列島周辺の海域は、以前からカツオ、マグロ、カジキ、サメ類などの豊富な漁場であり、最近では東支那海のサバ、アジの三分の一、即ち五万トン乃至七万トンを産するといわれているが、その理由を考えてみると大陸棚の沿岸流と黒潮とが、尖閣列島附近で混合して大規模な潮目を造り、また黒潮が真正面から、この大陸棚に突き当るので、広範囲に渦流と言っても小規模のものではあるが、湧昇流を生じ、栄養に富んだ水が常に下層から補給されるという二重の好条件に恵まれているからのようであるという。潮目のあるところ、湧昇流のあるところ

は必らず好漁場であるという水産上の定義は、果して真実であるか、その漁場成因の原理を究明するためにも尖閣列島に調査基地を設ける必要があるという。

更に、日高氏は、北上するカツオ、マグロ、カジキなどの一部は必らず尖閣列島海域を通過するので、この海域での漁業状況から北上群の資源を予察することが出来るようであり、未だ、十分な調査はされていないが、サバ、アジ、カタクチイワシなどの卵や稚魚の発生状況からして東支那海におけるこれら資源の重要な再生産源の一ヵ所のようにも考えられるのである。

北小島の洞窟を背にたたずむ著者。（高岡大輔.1968）

日本近海では生態の未だ十分明らかにされていない魚が相当あるが、その中のカツオは北上群（ 索餌群）の一部で、必らず尖閣列島海域を通るので、南下群（ 産卵群）もまたここに立寄るのではあるまいか。ブリも何処で産卵するのか解っていないが、この海域では卵や稚魚が採捕されており、ウナギに至っては、今日まで日本中で真のウナギの稚魚は二尾しか捕えられていないと言われているのに、尖閣列島附近の海域では多数のウナギ類の稚魚が採捕されている。尚、底魚については全くの資料不足ではあるが、一本釣、底延縄の魚種としてはアラ、マツダイなどの磯魚が多いようであり、トロール魚種としてはシタヒラメ、アマダイ、甲イカ、エソなどがあげられているが表層の餌料が多いようであり、底層も餌が多いと思われるので、今後の調査にまつ外はないが、たしかに尖閣列島周辺海域が好漁場であることは間違いないようである、と日高氏は述べている。

また、この尖閣列島周辺海域に中国大陸の上海附近からの冷い沿岸流が流れ込むと、大気中への水蒸気の補給状況が大きく変化し、台湾北東部に低気圧の発生を促がす要因となり、この低気圧は特に冬期間しばしば起るが、急速に発達したときは関東地方に大雪を降らすというのだから、気象上から言っても、尖閣列島一帯の気象には大いに関心を持つべきであり、魚釣島は国際気象上から九一六番という番号がつけられているのだが、未だに無人気象台さえもなく、何一つの設備されていないのが現実である。

何れにせよ、尖閣列島周辺の海域は豊富な漁場のようだから、大いに注目すべきことであり、その対策を一日も早く樹立すべきである。

※（「尖閣列島周辺海域の学術調査に参加して・季刊「沖縄」特集 尖閣列島 第 56 号（財）南方同胞援護会 1971 年 3 月刊）から「4、尖閣列島周辺海域の漁場」を掲載した。

寄稿

尖閣諸島調査２題　農林省・中央気象台調査

元沖縄テレビ報道部記者　照屋（てるや）　健吉（けんきち）

1949 年(昭和 24 年)宮古島市に生まれる。66 歳(2015 年時)。
1972 年(昭和 47 年)琉球大学法文学部卒業。
1974 年(昭和 49 年)㈱沖縄テレビに入社報道制作局記者など。
2000 年(平成 12 年)琉球大学大学院政治学専攻修了　政治学修士
2009 年(平成 21 年)㈱沖縄テレビ開発代表取締役社長、同社常勤顧問。

Ⅰ、尖閣諸島農林省調査団の紹介

関係資料発見の経緯

昭和 13 年から 15 年にかけて実施された農林省の「南西諸島鉱物資源調査」については、その大がかりな調査の割には、ほとんど知られていなかった。その概要は調査団に同行した石垣島測候所の正木任技手（当時）が、石垣島の新聞に概要を発表し、さらに「採集と飼育」（東京帝大学理学部動物学教室編集の月刊誌）の昭和 16 年 4 月号「尖閣群島を探る」に詳細に報告した。爾来、同論文は学者・専門家の間には知られていたようであるが、一般にはほとんど知られることはなかったようである。

私は、沖縄テレビ報道部の記者として平成 4 年(1992 年)頃から東シナ海で頻発した臨検・銃撃など、いわゆる不審船事件を取材する過程で、尖閣諸島と関係するのではないかと考えて、尖閣関係資料の収集を進めていた。

この不審船事件は、後に中国の改革開放政策により、中国沿海部の漁民などが、タバコなどの密輸にかかわり、これを中国公船が取り締まるために活動していたことが分かるのであるが、見当違いの推論を立てて、資料の収集をしていたのである。

「尖閣群島を探る」論文と正木任氏

その過程で、琉球大学の兼島清名誉教授(当時・故人)から「尖閣群島を探る」のコピーを頂き、掲載された正木氏の論文に写真を提供したと記された小林純氏の消息を調べていた。農林省に問い合わせたところ、小林氏は戦後すぐに退官しており、本籍が岡山県倉敷市であることだけが分かった。岡山県に問い合わせ、倉敷市にも「小林純氏を知りませんか」と電話で聞いて

みたが、全く知らないということで、同氏の探索は暗礁に乗り上げるかに思えていた。

途方に暮れていたところ、当方の電話のやり取りを偶然聞いていた報道部同僚の石垣安基記者（当時）が、小林純氏が岩波書店から出版された「水の健康診断」の著者で、同著の中で尖閣探検の経緯などが書いてあるということを教えてくれたのである。石垣記者は大学で化学を専攻しており、その縁で小林氏の著作を読んでいたということであり、「小林氏は岡山大学の教授」ということであった。

早速岡山大学に問い合わせたところ、既に退官して名誉教授になっているということで、住所と電話番号をおしえてくださった。はやる気持ちを抑えて、小林氏に電話したところ、尖閣諸島だけでなく、鹿児島から台湾に至る南西諸島全域の調査を行い、その時の資料として写真、報告書、8ミリフイルムなどを大切に保管しているということであった。上司に岡山への出張の許可を求めたが、映像に詳しい上司は半世紀以上経過した写真、映像は劣化が激しく、到底ニュース価値は無いという判断で、あえなく出張は却下である。あきらめきれない私は、小林氏に詳しく伺ったところ、写真と映像は乾燥機に保管していて、劣化の問題はないとの言質を得て、ようやく岡山に行く事が出来たのであった。閑静な住宅地に位置する小林名誉教授の自宅に伺い対面した小林氏は、長身でハンサム、学者らしい威厳と慈愛に満ちた表情で私を迎え入れてくれた。

小林純氏とは？

小林純氏

小林純氏の人となりであるが、その名前を聞いてピンとくる人は公害や水質の研究者を除けばほとんど居ない。小林氏は、富山県神通川流域のイタイイタイ病の原因が上流の鉱山から流出したカドミュウムが原因であることを突き止めた学者であった。小林氏は戦後、岡山大学の水質学の教授として迎えられて水の研究に打ち込み、公害の原因を解明する不朽の業績を上げたが、アジア地区の河川の研究、カルシウムと長寿の関係の研究、中国出身の留学生への奨学金の提供など多くの実績を残している。私は、小林氏の業績に、戦前沖縄の映像を大切に大量に保管していたことを付け加えたいと思う。さらに詳しく小林氏について知りたい方は下記をご覧いただきたい。

http://www.rib.okayama-u.ac.jp/HP2012/wp-content/uploads/2014/09/Kobayashi-jun.pdf#search='%E5%B0%8F%E6%9E%97%E7%B4%94'

小林氏　燐鉱石調査で　島々回る

1937年（昭和12年）7月7日に北京（北平）西南方向の盧溝橋で起きた日本軍と中国軍とのいわゆる盧溝橋事件が拡大し、多くの若者が兵役につき、食糧増産の必要性に気付いた農林省は、肥料の原料である燐鉱石を国内で発見すべく大がかりな調査団を南西諸島に

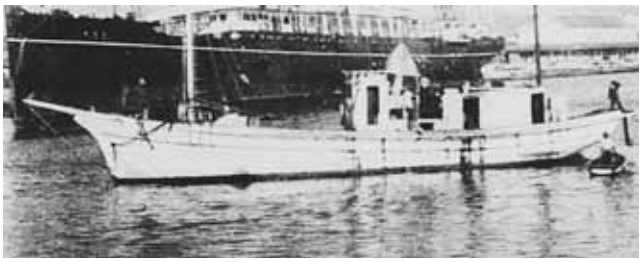
派遣することになった。その副団長を務めたのが、東大を卒業して間もない若干 27 歳の小林氏であった。南西諸島が燐鉱石の調査対象になった理由は、燐鉱石が海鳥の糞がサンゴ石灰岩に堆積して化学反応を起こして形成されるからである。沖縄県には、燐鉱山として最盛期に 2000 人が働いていたラサ島（沖大東島）の鉱山があったし、北大東島、波照間島にもリン鉱山があった。実績があり、サンゴの石灰岩でできた南西諸島の島々が調査の対象になったのである。調査は 13 年から 15 年にかけて 4 回行われることになるが、3 回目は昭和 14 年 5 月に尖閣諸島を中心に実施された。

小林氏は、調査の傍ら、学生時代から趣味にしていたカメラの技術を駆使して、写真１８００枚以上、8 ミリフイルムの映像で約 50 分の記録を残したのである。尖閣諸島は大量の海鳥が生息していることから、燐鉱石の埋蔵が最も期待されていた。結局それは期待はずれであったが、調査団の活動は小林氏が保管していた「調査日程」と題する報告書で詳細に知ることができた。本論では、石垣島測候所の正木任技手の手記と合わせて、調査団の記録を紹介する。

尖閣諸島の調査

尖閣諸島の調査は、昭和１４年(１９３９年)５月１４日に小林純、高橋尚之両技手、他４名が神戸港を出港してスタートした。団長の林義三技師は、軍部等との交渉の為に遅れて出発し、尖閣諸島調査終了後に石垣島で合流したと報告書に記している。小林氏によれば、中国大陸に近い当時の沖縄県の全域は、要塞地帯に指定されており、写真撮影に軍部の許可が必要であった。この写真の複写は、調査終了後、熊本の陸軍第６師団と長崎の海軍佐世保鎮守府に提出されて、検閲を受けたという。このことは、昭和１２年の盧溝橋事件に始まった日中戦争の影が、一見平和な沖縄の隅々にまで及んでいたことを示すものとして興味深い。調査団６名は、５月１６日那覇に立ち寄り、県立水産学校練習船海邦丸の借用を打ち合わせたのち、２０日に石垣島に到着した。

石垣島では吉嶺旅館に宿泊しながら人夫の手配などで出発に備えた。５月２３日夕刻に那覇憲兵隊から許可が下りたとの電報が入り、同日午後７時に勇躍尖閣諸島に向けて出発したのである。調査団について石垣町(当時)の海南時報は昭和１４年５月２６日付けで次のように報じている。「国家資源開発の為、農林省から小林、高橋の両技師(技手の誤り)以下６名が去る２０日入港湖南丸で来郡。翌２１日、石垣港に入港した県立水産学校練習船海邦



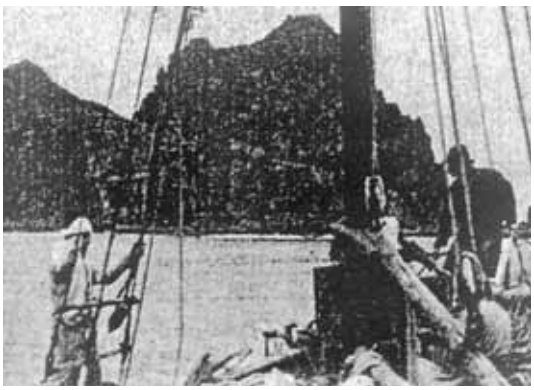
南西諸島鉱物資源調査団が乗った県立水産学校練習船「海邦丸」。
(「創立九十周年・県立沖縄水産高等学校記念誌」より)

丸(４３トン、８０馬力)に乗り、古賀商会所有尖閣列島探検に赴いた。一行とともに人夫５人の他、古賀商会那覇主任多田武一氏も同行し、また、石垣島測候所技手正木任氏も動物採取のため同島に赴いた。

（途中略）尖閣列島は、燐鉱は有望されており、また、銅鉱その他の鉱物もあるのではないかと見られ、今回農林省が決行した同無人島の本格的探検の結果は、多方面から頗る期待されている」。

時代は９年ほどさかのぼるが、当時の尖閣諸島について、昭和５年７月２８日の先島朝日新聞は「殺人的な不景気は、我が八重山の尖閣列島俗に云う無人島にまで影響し、そこに永年開墾事業や漁業等をしている古賀商会では、近年事業も振るわず現在では月給１５円で番人３人おいて夜光貝の採取等をさせ」と報じている。このことから調査団が行く事になった尖閣諸島は、昭和１０年代は、ほぼ無人の島となっていたようである。では、何故農林省は、この不便な島々の調査に着手したのであろうか？

小林純氏が戦後になって著した岩波新書の「水の健康診断」の中で理由を書いている。「昭和１２年に日華事変が勃発し、日本の戦時体制が次第に強まって行った。食料や生活必需品が、逼迫して、その統制が始まり、それまで南太平洋の島々やアメリカなどから輸入されていた燐鉱石も船や外貨の関係で輸入が困難となってきた。その為、低品位ではあっても、国内産の燐鉱石を探し出し、それを利用する為、南西諸島鉱物資源調査団を組織することになった」。


調査団は尖閣５島に上陸、生物鉱物資源を調査した。
（「尖閣群島を探る」より）

団長の林義三氏（技師）も、地元の海南時報(昭和１４年６月１１日)に次のように語っている。「肥料原料の窒素は、日本は自給自足できるが、リン酸やカリは、足りない。燐鉱石を１００万トン以上日本は使うが、国内では 3 割しか取れず、残る８０万トンの至る１００万トンは外国から輸入している。銃後の守り食糧確保に欠くべからざる肥料原料として大切な燐鉱を国内から探さなければならない」。

魚釣島

調査団一行が乗った海邦丸は、昭和１４年５月２４日、日暮れ近くに漸く魚釣島に達したが、天候が悪く上陸は断念することとなった。翌２５日、早朝の凪に乗じて、かろうじて調査団は上陸を果たし、往時に古賀商会が造った小屋跡を発見して宿所としたようである。同行した石垣島測候所の正木任技手が後に魚釣島について次のように書いている（海南時報 昭和１４年７月２日）。

「５月２５日９時３０分に上陸した。上陸地点は同島の南西海岸で、テントを張る場所無きため、西側に回ったら古賀商会の古い鰹節製造所があった。同場所は、風力強き為に家屋を作っても風の被害があるために、高さ一丈余、幅７尺に長さ６―７０間余もある暴風壁（石垣）がある。その内側に仮小屋があった。そこを根拠にして調査を始めた。同島至る所に淡水がある。それで海岸の岩の割れ目や凸部にはボーフラが実に多い。午後３時頃から１番高い山に登った。３２６米まで登り、頂上までは険しくて登れず、北方に下って午後８時頃に帰った。その山中は、原生密林で主として蒲葵(クバ)、タコサゴシャリンバイ、植木タブ、ガーナが生えている。蘭類は西表蘭、セッコクが頂上に多い。正木氏は、陸生貝や鳥類を採取したが、特に変わったものは発見されず、その代わりに、蚊が非常に多いと記している。

魚釣島は原生林鬱蒼と繁茂した険阻な島。(新納義馬.1979)

５月２６日は、天候が不良であったが、前日に引き続き海岸線に沿い、あるいは密林を縫って島を一周、強行を続けて魚釣島の調査を完了する。正木氏によると、その日は、北西海岸で与那国島からはるばる蒲葵の葉の繊維を採取する為来島していた男女５３人が合宿しているところに遭遇した。海南時報 昭和１４年５月２６日の記事によると「魚釣島では代用品時代の波に乗り、国吉長美、井上義夫、田村春馬三氏が共同で古賀商会から一年の期限で蒲葵の採取権を獲得、目下３０数名の人夫が赴いているが、蒲葵の葉脈は、汽船等のデッキ用の箒に重宝がられている」と記している。

北小島

５月２７日は、「降ったり止んだりの天候であったが、風浪を冒して魚釣島の東方約３里の北小島沖に到着、救命具を用意して伝馬船で上陸を敢行した。同島は、岩石峨々として上部に僅かに草原を有する小島嶼であるが、何百万をもって数えるほどの海鳥が生息し、一大鳥の王国であった」。後に小林氏は自著「水の健康診断」で北小島について次のように書いている。「北小島には、数十万の海鳥（セグロアジサシ）が、空が黒くなるほど群がり、人を恐れず飛び回り、ギャーギャーと鳴きわめくので、そのやかましさに圧倒されて、私たちはノイローゼになりそうであった。水の無い小島なので、せっかく船から水を運んできて洗面器に入れても、空からバタバタ落ちて来る糞の攻撃で、その水があっという間に濁ってしまう。とにかく、棒をめくらめっぽう振り回していると、何羽もの鳥がそれに当たって落ちて来るので、おいしい鳥の肉をふんだんに賞味することが出来た。ちょうどその時期は産卵期で、地上には足の踏み場もないほど無数の卵が産んであった。海鳥たちは

面白い習性を持っていて、卵を温める際、全部の鳥が一斉に同じ方向を向いてしゃがんで卵を温めるのであって、その姿は、まことにユーモラスでかわいらしいものであった」。

北小島の卵抱いたセグロアジサシ。(「尖閣群島を探る」より)

また、正木氏も、「尖閣群島を探る」に北小島について「崖を越すと少し傾斜になって雑草が繁茂している広さ３－４町歩位の平地がある。その平地には、全部セグロアジサシが生息している。その数は億といえよう。ステッキを一振りすると２－３羽はとれる。鉄砲を１発（鳩弾約 30 個くらいの散弾）撃ったら２８羽捕れた。八重山諸島の自然に触れる機会の多い正木氏が驚くほど鳥が多かったことは、小林氏が保存していた 8 ミリ映像にもリアルに撮影されている。

注　この 8 ミリフイルムは、劣化が進行しているため、小林氏から入手した沖縄テレビ報道部が沖縄県公文書館に依頼して保存をしている。

私は、1995 年 6 月に沖縄タイムスが主催した調査団に加わって尖閣諸島を訪れ、北小島に上陸したが、小林、正木両氏が云う程の海鳥を見ることは無かった。行ったのが 6 月中旬であり小林氏達よりも 20 日程の遅れがある為かとも思ったが、地面には卵片もほとんど見えず、雛鳥がわずかに崖の踊り場で姿を見せているだけであった。こうしてみると、半世紀余りの間に鳥たちにとっての生息環境が急変したといえるのではないだろうか。台湾漁民の卵の乱獲が云われているが、一昔前の事であり、今では海上保安庁が島への立ち入りを拒んでいることを考えれば、なおさら環境の悪化を疑わせるものである。

北小島の海鳥は激減、断崖に僅か生息。(金城棟永.1995)

南小島

5 月 28 日調査日程に小林氏は「再び北小島に渡り、調査を完了し、それに続き南小島を調査の上、正午黄尾島に向けて抜錨した」と記して、南小島についてはそれ以上の記述は無い。

正木氏は、「尖閣群島を探る」に、7時35分南小島に上陸、更に１１時33分に北小島に上陸と記して、小林氏と齟齬が見られる。具体性から見て小林氏の勘違いで正木氏が正しいように感じる。正木氏によれば7時35分南小島の西側に上陸した。「明治30年古賀辰四郎氏が鰹を製造した工場の跡が、現に石垣で廻されてある。同所で古賀氏は北小島でとらえたセグロアジサシを剥製にして米国に多数輸出したそうである。当時剥製鳥類一頭15銭位だったそうだ」。「同場所付近に飲料になる水があるが多量には無い。岩の間から滴る水を集めて辰の水と印されている。水質はあまり宜しくないようで少し酸っぱい感じがする」。

南小島の古賀氏工場跡の石垣囲い。(新納義馬.1971)。

久場島

久場島は、小林氏ら農林省調査団が最も燐鉱石の賦存を期待した場所であった。久場島については、農林省調査団よりも２９年前の明治４３年7月23日の琉球新報の記事が参考になる。「尖閣列島中の富源中の富源、宝庫中の宝庫たる黄尾島（久場島）に堆積せる窒素（ママ）肥料面積数十万坪の開堀については、近頃聞くところによれば古賀氏と某肥料会社との間に販売に関する特約成立せりという」。

その後、昭和14年5月26日の海南時報は「黄尾島の燐鉱は、20数年前古賀商会直営で2年間採掘され、その後1年間台湾肥料会社の経営で採掘されたことがあるが、燐鉱の値も安くて採算が取れず事業を放棄して今日に至った」と書いている。調査日程によれば、5月28日午後3時黄尾島（久場島）に到着した。この島について小林氏は「調査日程」に「本島は尖閣諸島中最も有望と推測せられ、約1週間滞在の予定で荷物全部を陸揚げした」と記した。翌29日には「早朝から人夫を先頭に立て密林を開きつつ、中央高地に向け調査を開始」した。「天気は晴天ではあったが、風が強く、本船との連絡が危険であった」と記している。「調査日程」には書いていないが、一行は強風と団員のケガ

久場島の天幕生活。　(「尖閣群島を探る」より)

と云う不運に見舞われた。正木氏は「尖閣群島を探る」で、「初日の 28 日、某氏は海岸線を過ぎる途中、海岸の岩間の海水だまりに交尾した虎鱓（ウツボ？）を掴み損ね手をかまれて大傷を負い、救急薬では間に合わず、船で石垣島に搬送した」と書いている。

正木氏はさらに「山の頂上の噴火口の直径は６０米位あって、その盆地には、ミカン、バナナなどを植えてある。同島産のものは味が非常に良い」。

高岡大輔氏は昭和 43 年「季刊沖縄特集尖閣」に「島の南西面には野生化した数ヘクタールと思われる砂糖キビも望遠され、パパイアの木も見受けた」と報告している。これらの果樹、農産物は明治年間に古賀商店が移植したものであり、あれから 1 世紀以上がたっていることから、品種改良が進んだ現在の種よりも古い遺伝子を伝えている可能性がある。当方は素人ゆえに評論する資格はないが、素晴らしい生物資源と云えないだろうか？

「調査日程」の 5 月 30 は、「強風を衝き中央高地より島の北部方面にかけて調査を行った。本船との連絡は不能となり飲料水は欠乏の恐れがあった。また、夜は北西の強風が１５米に達し、天幕が吹き飛ばされる恐れがあり、一同は不安の内に夜を明かした」と書いている。

5 月 31 日の記述は、「強風が吹き、沖懸り中の海邦丸（沖縄水産学校練習船）を石垣島に避難せしめた」と書いている。

6 月 1 日は、「北西の風が強い中、島の東部方面を主として調査した。午後からは風も和らぎ、雨が降り飲料水不足の問題が解決した」。翌 2 日は、「北東部及び北西部にかけて調査を実施した。天候は回復したが、海邦丸が夕刻に至るまで予定通り戻らず、憂慮しながら、荷物をまとめた」と記している。3 日未明に海邦丸が戻り、直ちに荷物を積み込んで次の調査予定地の大正島に向けて出港した。

大正島

「調査日程」によれば「海上平穏午後 5 時大正島に着く。上陸したが頂上は絶壁で登ることを断念した。島を一周調査して午後 7 時に鳩間島に向かった」。

17 日海南時報で正木氏は「大正島は高さ８４米、周囲は１０９米となっているが、実際は 200 米位あるようだ。全島岩礁の絶壁であるために上陸は非常に困難であり、海抜 20 米位まではワイヤ等で登れるけれども頂上へは一寸登れない。島が小さいので変わったものは見つからなかったが、リュウキュウアカショウビンが生息しているのは興味のあること」と書いている。正木氏はさらに「尖閣群島を探る」で「大きい岩の凹みの水溜りには錦エビが群れを成して棲んでいる」と書いている。

尖閣諸島・農林省調査団のまとめ

戦前沖縄には沖大東島（ラサ島）、北大東島、波照間島に燐鉱山があった。農林省の調査は、既に実績があった南西諸島から燐鉱山を発見し、食糧増産に結び付けることに目的が

あった。しかし、産業化に適したリン鉱山はついに見つからなかったようだ。その代り、尖閣諸島探検の記録としての「調査日程」報告書、鹿児島から台湾に至る島々の調査資料としての写真 1800 枚以上、魚釣島や久場島の記録映像のフィルムだけでなく、琉球の団十郎とも言われた玉城盛重の踊り、波の上祭、那覇市東町市場、那覇市にあった塩田、辻の女性の踊りなど約 50 分に及ぶ映像記録を残した。これらの写真、映像は沖縄の昭和 13 年から 15 年にかけての資料としても貴重との評価を戴いている。

2、中央気象台による魚釣島の調査
正木譲氏から、当時の交信記録の写しを頂く

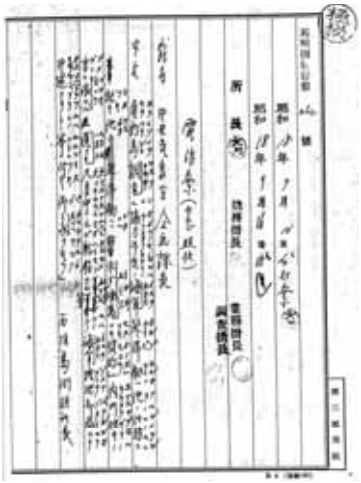
先の戦争が混迷の度を加え、日本が守勢に立たされていた昭和 18 年中央気象台は、軍の要請などもあり、九州から台湾に至る主要航空路にある尖閣諸島魚釣島に気象観測所をつくり、気象観測の空白を埋める必要性に迫られた。中央気象台は内川規一技手を派遣し、地元の石垣島測候所から大和順一所長と職員 1 名が参加して魚釣島に測候所の立地調査を行うことになった。

当時の石垣島測候所。所長と職員が内川技手に同行し魚釣島を調査した。(「八重山写真帖」より)

内川規一氏と知り合うきっかけは、沖縄テレビの報道ニュースで尖閣を取り上げていることを目にした、故正木任氏の息子、正木譲氏が小生を訪ねてきたことから始まった。

これが縁で正木譲氏からは、石垣島測候所と中央気象台との間で交信した報告書等の写しを頂いた。同時に、気象台の先輩で、復帰後に沖縄気象台長を務めた内川規一氏が尖閣調査をしていることを教えていただいた。

早速沖縄気象台に内川氏の消息を訊ねると、確か埼玉県（？記憶が薄くなっています）にお住まいと云う事であった。自宅に電話をすると、本人が出て、偶然沖縄に行く用事があるという返事である。日程を調整して、奥さま共々OTV に来ていただき、尖閣調査関連のインタビューにこぎ着けたのであった。



魚釣島調査に関するに交信記録の一部。戦時下のため軍事極秘扱い。

お目に係った、内川氏の名刺には理学博士の肩書があり、聞けば、沖縄気象台の台長在任中は、琉大で学生たちに教えていたということであった。

「阿蘇号」遭難者が魚釣島に不時着場を、測候所設置は航路安全に貢献

余談であるが、尖閣海域では、昭和１５年２月５日、大日本航空那覇発、台湾行きの「阿蘇号」が、魚釣島に不時着した事故が発生している。福岡から那覇を経由し、台北に向かう途中、エンジントラブルを起した。操縦士ら 4 名と乗客 9 人計 13 名が搭乗していた。乗員乗客に怪我はなく、13 人は救援隊に、全員救助され、奇跡の生還とも言われた。

「阿蘇号」魚釣島遭難を報じる新聞。
(東京朝日夕刊　1940.2.8)

翌年の大阪朝日新聞、鹿児島・沖縄版を引用する。「昨年二月五日台航路ダグラス機阿蘇号が魚釣島海岸に不時着した際、奇跡的に微傷だに負わず無事救助された遭難者十三名がこの奇跡の生還を一生の記念とすべく魚釣島会を組織、去る二月東京で第一回の集いを催し、そこで魚釣島を買取って同島に不時着場と遭難記念碑を建てようと話が纏ったが代表者の一人奈良市東城・・・の平岡策太郎氏が来県、島の主那覇市西本町古賀善次氏を訪問したところ、‥魚釣島？に不時着場が設けられるかという点であったが、古賀氏はその調査のためこのほど石垣島に赴き、同島の地勢に詳しい石垣島正木技手につき問合せた結果、魚釣島の東北部海岸に長さ千㍍幅二百㍍の理想的不時着候補地があることが判明、なほ同島付近は気象的には特異地帯であり不時着場設置に更に測候所の設置を希望し、正木技手がこの絶海の無人島に永住する覚悟を抱いていると語ったという。」古賀氏の談として、「不時着場候補地も理想的なところがあるそうだし、また測候所設置の計画も進められており、実現の際は内台航空路の安全化に多大な貢献をもたらすものと喜んでいる。魚釣会の代表者平岡氏は六月中旬ごろさらに具体的打合せのため来県する筈」(昭和 16 年 6 月 16 日付け)としている。

尖閣島主･古賀善次氏

内川規一氏ら、駆潜艇で、魚釣島へ上陸

米軍との戦いで守勢に立ち、戦線が次第に縮小し台湾への空路の要衝となっていた尖閣海域の正確な気象情報の把握は急務であり軍からも要望が強くなされていたようだ。中央気象台から派遣された内川規一氏は当時、企画課員で召集解除されて復職したばかりと云う事であった。その時の模様を昭和６１年８月２０日付の「きしょう春秋」に手記を寄せているので紹介する。内川氏は、「尖閣諸島の気象観測所立地の可能性調査を命ぜられて、福岡経由で那覇に到着したものの、米潜水艦の出没頻頻として石垣島行きの船便が出発で

きず、半月も引き止められてようやく那覇から船出することとが出来た。船団５隻ばかりが、海防艦に守られて、のろのろと進み５日くらい係って石垣島に到着した」と書く。一緒に出発した船は全て撃沈されたと聞いたと記述しており、この海域は米潜水艦が出没するきわめて危険な状況にあったことがわかる。

内川氏一行は、昭和１８年９月２７日、海軍警備艇「関丸」に乗船して魚釣島に向けて出発した。１０月の半ばになると季節風が吹きだして調査が困難になることを見越して、これ以上待てないというギリギリのところで海軍の駆潜艇「関丸」が来たという。

大和所長と石垣島測候所の職員１名それに内川技手の３人が乗船した駆潜艇は、「５百トンばかりのキャッチャーボートに爆雷を積み込んだにわか仕立ての」頼りない船であったようだ。夕方石垣島を出て、翌朝魚釣島に着いた。カッターを下して、気象台側３人と水兵３人が乗り移り、魚釣島の船着場から難なく上陸することが出来た。

頂上は岩が屹立し、測候所建設は、不可能

動物がいて我々に危害を加えるかも知れないので水兵さんは銃を持参した。とにかく頂上まで登ろうということで、ジャングルを切り開きながら進んだ。この時えらいことが起きた。大和さんが木に手をかけていた時、横に居た水兵が鉈でその木を切った弾みに大和さんの小指を骨に届くまで切ってしまった。かなりの重傷であるが、気丈な大和さんは、そのまま登山を続行した。４時間の勤行苦難の後に、頂上に到達することが出来た。登山の途中動物は全く見られなかった。頂上は大小の岩が屹立して建物が造れるような余地は全くない。帰任後藤原咲平中央気象台長に報告したら」、「測候所は山頂に建てるべきものと思うべからず」と云われた。以上は内川規一氏の手記から引用した。

魚釣島奈良原岳頂上(362m)。大小の岩が屹立し、測候所建設は不可能と判断した。(白井哲・荒井秋晴.1979)

なお、旧仮名遣い、あるいはカタカナは、平カナの現代風に書き改めた。

（了）

落穂 採脈

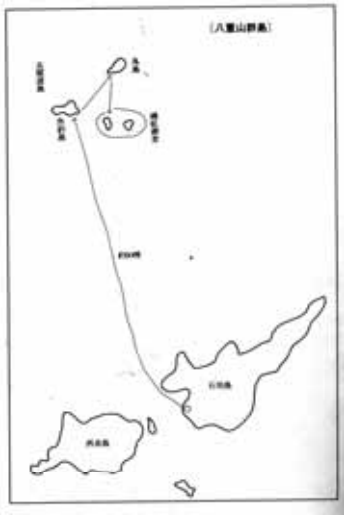
登川 正太郎　のぼりかわ せいたろう　（沖縄近海鮪船主協会顧問）

1913 年（大正 2 年）那覇市に生まれる。沖縄水産学校卒、陸軍自動車学校幹部候補生隊を経、南方戦線へ、復員後、沖縄初の底曳網漁を尖閣西方東シナ海で始める。琉球政府陸運課、那覇港港務所長、那覇防衛施設局課長、沖縄近海鮪船主協会顧問等歴任。。
昭和 14 年(1939 年)5 月農林省南西諸島鉱物資源団が水産学校練習船「海邦丸」で尖閣諸島を調査した。氏はその前年夏、同校練習船「琉球丸」で予備調査に同行した。氏の著書からその知られざる体験を抜粋する。

尖閣諸島調査に参加

マレー半島ズングンから帰郷して、徴兵検査を受け入隊するまでにはかなりの期間があったので、その間、遊んでばかりいるわけにいかず、何か仕事をしようと思っていた。その矢先、水産校の練習船「琉球丸」が農林省の仕事で尖閣列島に燐鉱調査に行くことになり、私は補充要員として乗船するようすすめられ、同行することになった。当時、「琉球丸」には私が在学中から乗っておられた浜田船長、知念機関長、与那城水夫長、大山、砂辺、赤嶺の先輩たちがいて、私の参加を喜んでくれた。

「琉球丸」には農林省から調査官として派遣された大島技師が乗られ、我々の任務は大島技師の指令通り島々を廻り、上陸させることだった。時期は夏であったので、幸い海は比較的平穏で大した波風はなかった。しかし、何といっても八重山から 90 マイルも離れて東支那海に浮かぶ絶海の孤島であり、住む人もなく永年風波にさらされた島の周辺は浸食され、船を着けるのは困難であった。我々は島に上陸して大島技官と行動を共にすることができず、危険なところは小舟にとどまって技官の調査を終わるのを待って技官を収容するしかなかった。「燐鉱」とはどんなものか、実際に見聞するチャンスを逃がしたことは残念であった。



図から石垣港→魚釣島→久場島→南・北小島の順で調査したことが判る。

しかし、尖閣諸島随一の大きな島で、その昔に鰹節の製造工場があったという魚釣島や島全体が鳥類で埋めつくされているという表現がぴったりする「鳥島」には上陸することができた。そこでかわいい鳥たちの生棲状況を直接観察すると同時に、生み立ての卵を試食することができたのは大きな収穫であった。

後で（※戦後になって）聞いたことがあるが、諸島周辺には常時日本漁船のほか台湾漁船が操

業し、中には海鳥の卵を取りにわざわざ来る船もあるようで、自然保護のためにも何らかの取り締りが必要でないかと思った。私がかつて練習生として、この「琉球丸」に乗り込み漁労実習に出た時、鰹の群れをさがすために一所けん命に鳥巻をさがしたことを思い出す。すなわち、海上で鳥の群れを発見すれば、必ずその下には魚の大群がいるんだという事を教えられたのである。

尖閣諸島周辺は平均して水深も九十メートル前後であり、さんご礁からなっているため、沖縄人の最も好むマチ類が豊富で、昔から宮古、八重山、糸満あたりから一本釣り船が来て操業しており、沖縄周辺の漁場としては有名である。また、魚釣島(※久場島か、大正島の誤り)は戦後米軍飛行機の爆撃指定地域に指定され、一時は操業禁止区域であったが、沖縄からは距離が遠く、往復の燃料が不経済であったため、久米島の鳥島、渡嘉敷島の出砂島、最近では伊江島の射撃訓練場へと移りつつあり、安心して操業できるようになった。

最近では夏の繁殖期と収獲のバランスも考えずに乱獲がめだち、毎年漁獲高が減ってきている、と一本釣りを専業にしている漁師は指摘する。魚の値段が高騰しているのは、至る所の漁場が取り放題に野放しにされており、収獲と繁殖とのバランスが保たれていないのも大きな原因だと思うのであり、水産県沖縄の漁民も将来の展望に立って周辺海域をじっくり見届け、水産業のあり方を研究すべきではないだろうか。

現在、尖閣諸島は沖縄県の一部であるが豊富な石油資源が埋蔵されていること、屈指の漁場であることなどから、中国、台湾も領有権を主張している。我々は歴史的に見ても、わが県の一部であるという認識には変らないし、無限の資源を秘めている尖閣諸島にもっと目を向け、資源を活用すべきである。

※ (「苦難を乗り越えて 一私の半世紀― 1989 年 1 月刊) から「尖閣諸島調査に参加」を抜粋掲載した。 なお文中の(※)は編者が付記した。

水産健児が集う、沖縄水産学校実習船「琉球丸」にて、(1931 年)
(「創立九十周年・県立沖縄水産高等学校記念誌」より)

あとがき

この聞き取り調査をとりまとめている最中に訃報が入った。尖閣諸島に電灯潜りで行かれていたベテラン漁師の逝去です。氏の早すぎる死を悼み冥福を祈りながら幾つかの思いがよぎりました。

生前の氏の話を思い出した。「電灯潜りは夜潜るけど、たまたま昼間潜って見たら、尖閣の海はまるで水族館よ、カシー（シュモクザメ）が目の前で 15 匹もたむろして、向こうから 5,60 キロのローニンアジ、ガーラが大名行列みたいに並んで泳いできた。その傍にはタルミー（メダイ）も群れなしている。水族館の中にいるような素晴しい光景さぁ。自分が魚突きにきたのを忘れて、しばらくそれに見とれていたよ」。その話には小生は思わず膝を乗り出した。聞き取りを何回か重ねていると互いに心が和むせいか、予期せぬ話も飛び出します。あとから貴重な体験を思い出すこともしばしばありますが、それを期待して、足繁く通うわけにいけません。また話が愈々興に乗ってきても、聞き取り 1 人に掛ける時間は限度があり、どこかでメド付けて、話を切り上げないといけません。

このようなこともあり、本調査報告の聞き取り内容は、十分とは言えません。

氏の場合も、次から次へ貴重な体験が飛び出しましたが、あぁこれは次にお預け、あとでゆっくり時間掛けて聞き取りしようとしていた矢先の訃報でした。尖閣諸島での貴重な体験がしっかりと記録されないまま、語り部がまた 1 人失くなってしまいました。無念極まりない思いです。

彼ら海人達は、板子一枚下は地獄という厳しい環境の中で、仕事をしてきたせいか、記憶力は旺盛かつ鮮明です。氏も 30 年前の体験を、あの時アカオの 40 メーターの海の底には、シュモクザメは 15 匹が列なして泳いでいて、体長 5 メーターほどあったと。こんな細いことまで記憶していたのには驚きました。これは彼ら海人の共通の特性でしょうか。大漁した場所、大凡の年月、時間帯、どんな魚をどの位獲ったか、はてはその時の天候、潮の流れまで、鮮明に覚えています。

彼らの海人の体験・知見は、尖閣諸島の漁業を知る上で貴重な資料であり、貴重な体験者、語り部です。彼らの頭の中には、図書館に万巻の書を蔵しているように、貴重な体験がぎっしり刻み込まれています。歳月人を待たずで、漁師の皆様は年々減りつつあります。

彼らのお 1 人が亡くなれば、図書館1館が消失し、その分の貴重な体験を記した蔵書が一瞬に消え失せます。それ故、お元気なうちに、体験を聞き取って正しく記録しておかねばなりません。

この機会を逸すれば、地元沖縄県の、日本側の、尖閣諸島海域の漁業の歴史的事実が永久に消え失せてしまい、国家にとって、大きな損失にもなります。

今回、私共が聞き取り調査を急いだのも、このように事情からです。

日本財団には大変お世話になりました。聞き取り調査の意義と重要さを認識頂き、この度も研究助成を賜りました。厚くお礼を申し上げます。もしも、日本財団のご助力がなければこの聞き取り調査を為すことができませんでした。2009 年の第 1 回、2012 年の第 2 回、2014 年の第 3 回です。3 回 5 年余に亘るご協力で、漁業関係者 100 名余(延人数)から聞き取り調査を実施できました。

お蔭様で、尖閣諸島海域の漁業についての貴重な体験を収録することができ、後世に正しく伝えることができます。ほんとに有難うございました。心からお礼を申し上げます。

この仕事は本来だと、国が国境漁業、国家の重要な問題として、喫緊に取り組まねばならない課題であります。願わくば、本調査報告が、契機となって、全体を網羅したさらなる聞き取り調査がなされることを期待し、あとがきと致します。（了）

尖　閣　研　究

尖閣諸島海域の漁業に関する調査報告

－ 沖縄県の漁業関係者に対する聞き取り調査 －

2014 年

発行日：2015年９月30日

編集･発行：尖閣諸島文献資料編纂会

〒902-0068沖縄県那覇市大道40番地

FAX（098）884-1958

印　　刷：株式会社　国際印刷